中央公論

THE CENTRAL REVIEW

第二十年第五號

概目

明治卅年一月廿九日第三種郵便物認可
每月一回一日發行 明治卅八年五月一日

S.D

反省社編輯

杢文年表

菊版約三百頁紙質上等　價金五十錢　郵税八錢

本書は世人の常に必要を感じて未だ出版せられざりしものなり、その世に行はるゝ年表類と異る點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なく餘白として存したり且つ前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照搜索に便利なり

本書は博く世人の需用に應ぜん爲め便利と實用とを主眼としなるべく普通年表の陷り易き亂雜の弊を避け其配列には我社は特に意匠を凝し斬新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係らず極めて簡短に且つ明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歷代中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり

各種學校にありて歷史を練習しつゝある人又は專門的に歷史を研究しつゝある人は此書の出版に由りて今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得へし歷史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし

年表は攻學者に限らず世上實務に從事する人にも必要あり我國の舊時に於てすら尚各家庭には必ず一部の年代記を藏したり本書は我新時代の要求に應すべき文明式の年代記なり敢て之を江湖に薦む

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九百十九番）　**反省社**

賣捌所　東京堂　上田屋　文明堂　有明館　盛春堂　岡崎屋

中央公論第二十年第五號目次

中央公論



第二十年
第五號

戰死者は護國神

去年二月開戰以來の海陸戰死者を靖國神社に合祀し、五月三四五の三日を以て臨時大祭を擧行せらる、是れ實に國民の心を得たるものなり。

戰爭の善惡を問ふと勿れ。戰爭は實に　天皇の命令也。日本の國家の存立のために已むを得ざるに出でたるもの也。國民としては唯だ皇命惟れ從ひ。唯だ國家のため敢て進んで戰ふの外なき也。

既に戰ふ、死は素より其の分のみ、然れども思へ。彼等の出て丶軍に從ふや。實に自個の一切を捨てしなり、妻子の恩愛の絆を絕てり、多年の相思始めて遂げ、新婚の夢尙ほ央なるに、強ひて愛人と袂を分ちたるもの、嬉々として笑語し、日夕膝に抱かれ袖に纏はりて相慕へる愛兒の縋るを振切りしもの、甚だしきは則ち病める子、孕める妻を見捨て、寸腸九裂するを忍びたるものもあるべし、己れ一たび去らば、老親を扶け妻兒を養ふものなくして、一家或は饑寒に泣くを憂ひたるもの亦素より少からざるべし、己れ遠く軍に從はゞ、親戚相感ひ、一族倶に痛み、其の生業頓に振はざるを病めるもの亦甚だ少からざるべし、然れども記せよ、彼等は一切を捨て丶顧みず、却つて出征を以て本分を盡すものとは信ぜし也。

更に思へ、彼等の軍に從ふや、燬くが如き炎天にも亦勞せざる可らず、肌を劈くが如き寒中にも亦勤めざる可らず、其の暑と寒は共に大陸的にして、曾て內地に在るもの丶夢想し得ざる所なるのみならず、滿洲の荒野は古の所謂北狄の地にして、日本內地の如く清泉

の渇を凌ぎ魚菜の饑を癒すものあるにあらず、戸口稀薄にして到る處人家少く、偶々ある所の家屋も矮陋汚穢を極め、瘴癘の氣滿ち、蚊蠅の群多きと、また內地人の想像にも及ばざる所なるを以て、多くは雨露に暴露せられ、偶々宿營するも非常の苦痛を感ぜざる能はず、況んや水乏しく食粗にして、僅かに飢渇せざるを幸とするのみ、花鳥の娛みなく、演劇講談遊山遊川の慰みあるに非ざるをや、然れども記せよ、彼等は一言半句も其の苦を言はざるのみならず、敵と戰ふや、粉骨碎身、死を見ると歸するが如き也、萬死の危境に突進して曾て寸分だも身命を惜む所あらざりし也。

吾人をして忌憚なく言はしめば、彼の士官は正に軍職に在るもの也、之がため平生國家より厚俸を受け、名譽多き地位に立てり、一旦戰あれば死は素より其の分のみ、國家の平生士官を養ふは、寧ろ戰時其の命を致さしめんが爲めのみ。故に其の戰ふて死す　、惜むべしと雖も其の本人に在ては寧ろ其の分を盡したるを滿足すべし、然れども兵卒に至ては全く相異なれり、彼等が三年の兵役に就くや、國家よりは何の報酬を受くる所あらず、切言すれば、彼等は無賃錢にして勞働したるもの也、然り、無賃錢にして殆んど最高度の勞働を爲せしもの也、其の現役に在るもの、若くは既に現役を終りて戰爭に出でしものと雖も、亦何等の報酬を受くる所あらず、受くる所のものは、一日僅かに三錢、若くは六錢のみ、殆んど一袋の煙草をすら購ふに足らざる也、然れども記せよ、彼等は斯の如くにして極めて危險なる、寧ろ負傷し戰死するを當然とする職に辛勞して、曾て半點の怨色すらあるとなきなり、否、其の死傷するを以て至大なる名譽として自から滿足す。

彼等が斯の如くして自個の一切を捨つるは、唯だ君國のためにするのみ、一身をも、否、一家をも犧牲として唯だ單に君國のために盡すのみ、然り、天皇と同胞國民とのために盡すのみ、其の忠烈至誠、殆んど人間を超越す、楠正成と雖も、名和長年と雖も、新田義貞と雖も、何ぞ之に過ぐ可けんや、抑も楠氏以下祀ら

れて千秋に崇めらる、獨り我が戰死者のみ何ぞ然らざるの理あらんや、

彼等戰死者の遺族には、素より五六百圓乃至三四百圓の賜金あるべし、其の殊功ありとせらるゝものには更に金鵄勳章若くは七等八等の勳章を與へらるべし、然れども彼等の忠烈至誠に對しては千万金を與ふるも其の萬一に酬ゆるに足らず、功一級又は大勳位を贈るも十分に之を彰すに足らざる也、若干の賜金は僅かに遺族の愁苦の幾分を慰するのみ、彼等の忠烈至誠を適當に彰はさんとすれば、唯だ神として之を祀るの外はあらず

彼等を神として祀らば、彼等の英魂毅魄は長へに我が君國を擁護すべし、彼等の子孫と吾人の子孫とは、永く彼等の忠烈至誠を崇敬し、彼等の忠烈至誠に感化せられて代々忠良の國民たる可ければ也、然らば則ち彼等を神として祀るは、啻だに彼等の忠烈至誠を彰はすのみに止まらざる也、而して是れ亦彼等の志ならざらんや。

黃金の價幾許ぞ

人界に於て古來最も尊重せらるゝは釋迦、孔子、基督の三人なるべし、此の三人の教訓は千古不朽にして、其の人心を感化薰陶するの深く且つ廣きと、未だ會て之に及ぶものあらざれば也。

鐵木眞、豐太閤、ナポレオンの如き、洵に曠世の偉人なり、然れども其の一方に於ては惡魔たり、之を悅ぶものあるも亦憎むものあり、遂に釋迦、孔子、基督の一般に崇拜敬慕せらるゝの尊きに如かざるや論なし、抑も鐵木眞、豐太閤、ナポレオン等は、其の生前に於て多くの侯伯をして叩頭せしめ、生殺與奪の權勢を握りて、威風一代を壓せしのみならず、臣從雲の如く、身は金屋玉殿に棲みて、錦繡を衣、膏粱に飽き、美人麗姬爭うて意を迎へ歡を承けて、富貴榮華、心のまゝならざるは無かりし、釋迦、孔子、基督に至つては、困軛屢々至り、災禍交々來りて粗衣粗食にすら、飽くと能はず、終世流苦困頓して、甚だしきは則ち極

刑を受けて慘死し、其の一代の不幸、實に人をして慘鼻に堪えざらしむるものあり、鐵木眞、豐太閤、ナポレオンに比すれば、其の貧富窮達、幾んど霄壤の差ありと雖も、其の德化の千秋に垂れて滅せず、永く百世をして崇仰景拜せしむるもの、却つて彼に非ずして此にあり、富貴榮華の恃む可らざる則ち斯の如し、况んや區々の黃金をや、

三井家の總理大臣益田孝氏は、其の年俸七千二百圓にして、外に配當二十万圓あり、米國大統領の年俸十万圓（五万弗）に比すれば正さに二倍すといふ、然れども思へ、ルーズヴエルト氏と益田氏と、孰れか尊ぶべしとするぞ、黃金を以て万事の標準と爲すものは、果して益田氏の尊ぶべきをルーズヴエルト氏に二倍すと做す乎

三井、岩崎の富は一億圓と號す、而して三井の收入年々五百万圓岩崎の收入三百万圓なりと傳ふ、然れども三井の主公の凡庸なる天下誰か之を仰ぐものぞ、岩崎家の久彌氏、彌之助氏必らずしも碌々たらざるも、世上の尊重すること幾許ぞや、其の部下の團琢磨、早川仙太郎、莊田平五郎、豐川良平等、黃金を獲ること思ふに年々數万圓を下らざるべし、然れども今や其の名聲の世界に馳するは此等の徒に非ずして、却つて東鄉、黑木、乃木の諸將軍なるにはあらずや、將軍等の年俸六千圓を出でず、其の收入は團、早川、莊田、豐川等の十分一乃至六分の一にも如かざるべし、然れども其の一代に重んぜられて、名聲の中外に嘖々たる、團以下の徒、諸將軍の千万分の一だにも及ぶ能はずとす、黃金の尊ぶに足らざる、其れ知るべきのみ

三田の福澤翁は俗に拜金宗の開祖と稱せらる、然れども其の眞骨頭は却つて貴族たることを固辭して終世一平民たりしに在り、『瘦我慢の記』を作りて、幕臣たる勝海舟、榎本武揚等が明治政府に奉仕したるを痛罵したる所にあり、而して福澤翁の後世に不朽なる、亦實に玆に在り

馬越恭平曾て知を尾崎紅葉に求め、一酒樓に會飮す、紅葉傲然として相下らざりしといふ、馬越が文士を重

んぜんとしたる襟度は稱すべし、紅葉の傲骨に至つては最も歎美するに耐えたり、宜なり、彼が一枝の筆を以て巨然一代に雄視し、其の家に擔石の儲なくして而かも盛名の遙かに富豪馬越に過ぎたるや

名譽の必らずしも黄金に伴はざる、否、黄金の却つて名譽に壓せらるゝ、遂に瞭然として蔽ふ可らず、宗教技藝文學の士は則ち名譽の職にあるもの也、而して政事家及び軍人も亦聊か名譽の職分を有するもの也、但だ政事家と軍人とは厚俸大祿ありて黄金多く之に伴ふがために、名聲未だ宗教文藝の士に及ばざるのみ、試みに少しく我が歴史を精視せよ

古來富豪の徒何ぞ絶えん、而かも其の名聲の傳はるもの、寥々として晨星の如し、將軍宰相また歴世相亞ぎ、其の人當さに百を以て數へ、千を以て算すべし、而かも其の名の後世に不朽なるもの幾許もあるとなし、然るに宗教文藝の士を見よ、行基、弘法、傳教を始め、日蓮、法然、親鸞に至るまで、僧徒の名は、三家村裏の老媼すら知らざるなく、知て崇景せざる無し、畫家に在ては金岡、光起、雲舟より探幽、應擧、文晁の如き、學者としては、近世の蕃山、藤樹、篤胤、宜長、徂徠、山陽の徒の如き、其の生前に在ては、多く糟糠にだも飽かず、得意なるもの極めて少かりしも、其の名譽の不朽なるは却つて多くの富豪權門を凌ぎ、大臣宰相を超ゆると遠きに非ずや、西行、丈山は武人として庸者のみ、而かも文藝に入て佼々の名を成せり

更らに近く今日に例せよ、大會社大銀行の社員は、其の収入の豐かなる、衣食住に厚き、殆んど意の如くならざるものなかるべし、然れども其の名聲は却つて米鹽常に足らざる小説家新聞記者に及ばざると遠きにあらずや、一萬圓を利するは、一冊の書を著はすの名譽なるに如かざるに非ずや

敢て今の世の人に問ふ、名譽と黄金と孰れをか擇ぶ、唯だ名譽にのみ走りて宗教文藝にのみ熱せば、日本は第二の印度たるべし、黄金のため農工商に従ふも亦甚だ必要也、吾人は唯だ徒らに名譽の重んずべきを知ら

ずして富豪を羨み黄金を尊ぶを卑しとするのみ、彼の政事家及び軍人にして黄金を重んぜば、是れ彼等の腐敗也、世に傳ふ、桂太郎氏は益田孝氏の前に頭を擧ぐる能はず、平生屢々益田氏より黄金を受くるが故なりと、夫れ桂氏は大臣大將也、而して富豪家の一番々頭にだも頭を擡げ得ずといふ、氏の世に重んぜられざる洵に理ありと謂べし、政友會の首領が政府の機密費を拜受し、進歩黨の領袖が岩崎家のポケットマネーに衣食するは、是れ政黨の甚だ振はざる所以にして、政事家が理當さに名譽ある可くして而して甚だ名譽無き所以也

宗教及び文藝の士は深く玆に鑑みるを要す、前賢舊師は實に尊重すべき模範なり、彼等は衣食稀薄にして多く當世に容れられざりき、今大に名譽を得んとするもの、斷じて富豪を羨み黄金を重んずると勿れ、陋巷に追隨して斗米屢々空しきは其の分とせよ、自から奉ずるを素樸にして一意唯だ千秋に朽ちざる名譽を獲んとを期せよ、而して政事家の如き亦淸貧に甘んずる心ありて始めて眞の政事家たるべし、錦を衣て妻妾に誇らんとするが如きは、素と醉生夢死する凡庸富豪の徒の事のみ。

武士道論

大隈重信

近來武士道と云ふことが一の流行語となつて、大分諸大家の說が出て居るがツイ能く見ない、武士道と云ふことに就いてどう云ふ觀察を下して居るか、諸大家の說を一遍通覽して、それに批評を加へたならば一番都合が宜しいと思ひまするが、きれ〳〵に話を聞くのみで、一向大家の論說をまだ見ない爲に、實は突然此節武士道といふことが一の流行の語となつて居ることを怪んで居る。一つ其うちに、大家の說によつて現れたる武士道論なるものを集めて見て、批評を試みたいと考へて居つた所であります。それ故に今日突然に貴誌の求めによつて武士道を御話すると云ふことは、實は少しも用意も考もない所でありまするが、併し全體に就いて私は武士道といふ一種の語を拵へたのは、

何時の時代に拵へたのであるか、之を一つ研究したいと思ふ。

デ私が察する所では、此の武士道といふ一つ形式を備へた所の議論は、全く徳川泰平の時代に何分漢學の流行から、支那的の形式を貴ぶ、いろ〳〵な此道徳的の言葉を順序よく並べることの流行する時代に、武士を形容した一の語であると思ふ。全體この道などゝ云ふ――武士道とか云ふ語もどうも甚だ不思議に考へるのである。そこで丁度私は十一日の日であつたか、帝國大學の國家學會に行つて斯う云ふ事を論じたんである、徳川時代の武士の有樣を私は形容して、武士道衰へて任俠起ると云ふ有樣である。何れ其の精い筆記は不日彼方から出すでありませうが、武士道といふ名前は徳川の泰平の時代に起つた語である、日本に古來武士道といふ語はない、學者達が好い加減にえらさうな名を付けたけれども、其時の武士はもはや泰平の武士であつて、眞正の大和武士ではない、其時には已に武士道は廢れて來て居る、そこで武士道衰へて任俠起る、武士といふやつが本來の面目を忘れて、强を恃んで弱を淩ぐと云ふやうな有樣になつたから、そこで所謂幡隨院長兵衞と云ふやうな、强を挫き弱を扶けると云ふ任俠が起つて來た。其時分に彼の山鹿素行とか、種々の學者達が形式的に武士を豪さうにしたけれども、此時の武士は旣に惰落して仕舞つて居つた。全く支那流儀である、支那は聲を高くして而して事實は無くなつて仕舞ふのである、支那の忠孝仁義と同じことである、全體さう云ふ性質のものではない、一たび劍を執れば武士である、劍を捨てれば紳士である、是れ日本民族に特有したものである、日本民族の特性は勇を尊ぶ、節義を貴ぶ。何故に節義を貴ぶかと云へば恥を知ると云ふことである、忠君と云ふことは何から起ると云へば則ち節義から起る、そこで所謂廉恥といふ、昔からの仁平以來の武門の語に『末代の恥辱』といふ事が一番の恥辱、言ひ換へれば則ち名譽の爲に命を捨てる、公義の爲に命を捨てると云ふことになる。そこで難に出遭ふ難に出遭ふと國民全體に其氣風が皆現れて來る。其の證據を見ると、小說軍談皆其意味を含んである、獨り僅に全國四十萬の武士が研究したばかりではない、日本全體の民族が義を貴ぶ、勇を貴ぶ、氣節を貴ぶと云ふ民族特有の性質を有つて居るのである、決して武を以て解釋することが出來るか。平日は法律を重んじて極く善良の民、孜々營々と自分の職業を營

んで居る、一たび國難に出遭へば直ちに死生の巷に立つて從容として居る、皆國民民族の風である。今日數十萬の農工商が兵を執つて居るに、昔の武士と違ひがあるか、少しも違ひはしない。封建時代の武士を形容する爲に、想ふに漢學者流が唯だ字を並べた丈の事である。そこで諸大家の所謂武士道なるものは、果してどう云ふ武士道があるか見ない、見たならば其全體を綜覽して、之に就いて批評を試みて見やう、其議論を見ずには分らぬから、私は此處で武士道と云ふものに對して、あまり攻撃することを悅ばんのであるが、兵器を取れば總て武士である、兵器を抛てば即ち士農工商である、民族悉く特有の性質を持つて居る。日本は舉國一致と云ふことを言ひ居る、既に日本は徴兵令を布き、國民皆兵である、私は今日の武士道と云ふものは、如何にも耳ざわりで堪らぬ。

それで總て日本の民族は平和の民族、武を好むと云ふよりは寧ろ文を好む、ごく泰平に安んじて最も善良なる平和的の民族である。それは決して日本の民族が世界にすぐれて平和的の民族と云ふ譯てはない、併しこれは國の地位か自らさう云ふ有樣になつたのてある。何故てあるかと云へば、大陸と隔つて居る島てある、生存競爭の激烈なる爭の必要が起らぬからである。そこで大陸であると、これはなか／＼生存競爭の爲に各部落互に相爭ふ。此時に當つては人間の一番貴ぶものは勇である、其時に當つて道德の最も主なるものは勇である。そこで道德と云ふものは時に依つて變ずる、善と云ふことも其通り、時に由る善と永久の善と二つある、其時代によつて違ふ。昔戰國の時には勇と云ふ言葉は一番人間の最大必要なものである、どう云ふ善良な人も、どう云ふ道德家も勇氣がなければいかぬ、其時に當つては――敵人相對して勝敗を決すると云ふ時に當つては、一の勇を措いて他にないのである。さう云ふ場合が日本にはない、外敵に出遭つたことがあるか、僅に國家開闢以來國難に一遍出遭つた、一遍出遭つた。所が大陸へ行つて見ると――一たび足を擧げて大陸へ行つて見ると、治亂廢興、實に歷史あつて以來概ね亂世、國の安危存亡、常に其の戰によつて決して居るのである、歐羅巴に於て然り、支那に於て然り、大陸皆其通りである。日本は實に安全に、平和に泰平を樂んで居ると云ふ民族である。併ながら其の民族特有の性質がある、それは何てあるかと云へば、一たび國難に出遭ふと皆忽ちに驚くべき勇氣を現はす、所謂

平時に噴火が熄んで居る、一たび國事に出遭ふとそれが噴火すると云ふ性質を持つて居る。それなんだ、其れを名つけて武士道といふ、實に分らぬ話である。學者達がどう云ふ解釋をして居るか知らんけれども、私は近來あまり日露戰爭に浮かされて、思慮なき武士道を喋々しては居ないかと疑ふものである。

それて私は既に今度日本の開國五十年史の書物を作つて居る、其序文に其意味を現はして居るが、實は封建の武士は大政維新で壞してしまつたんてある、而して此全國民に國家的自衞の責任をお持たせになつた譯てある、國民皆兵と云ふことは徵兵令によつて是は定めてある。それから元は武士と云ふものは泰平の時には政治をすると云ふことであつた、此も則ち大政維新によつて全く改めて、先つ第一に攝家の門領を廢し、續いて封建を廢し、人材登庸と云ふことになつて、どう云ふ事になつて來たかと云ふと、武士以外の總ての平民も政治に與かると云ふことになつて。而して遂に種々の法律は出來、憲法は發布せられ、とう〱國民に參政の權を與へる、地方自治の權を與へると云ふことになた。昔は鎌足公の子孫てなければ攝關になれなかつた、或は源氏の長者にあらざれば大將軍になれなかつた。今日は百姓でも町人でも大將軍になれるてはないか、それから鎌足公の子孫てない、殆と姓のないやうな土百姓でも總理大臣になれるてはないか、幾らても大臣大將になれる、何でもない。さう云ふ所に武士道などゝ云ふ支那人の付けたやうな名前を振舞して來ると云ふのは、實におかしな話と思ふ。凡そ物は人心に投ぜなければいかぬ、縱令店に並べて置いても、どう云ふ良い物を並べて置いても、人心に投ぜなければ買人がない、自分獨り乃公ほど良い物はないと思つて、幾ら何と觸れても人心に投ぜなければ買ふ者はないのである。それと同じ事て、小說でも軍談でも、或は演劇でも、ナンボ巧者振つてやつても時の風俗と人心に投ぜなければ一向人が喜ばない、演劇でも觀客がない。そこで忠臣藏をやれば何故に人がやたらに觀に行くかと云ふことを考へなければならぬ、是れ則ち日本民族の所謂義を貴ぶと云ふ、節義を貴ぶと云ふ人心があるからである、民族に固有の特長がある。それだから詰り敵討ちであるとか、若くは武者修業などゝ云ふやつが出て盜賊を平げるとか、何か弱い者を盜賊共がいぢめ居ると、それを酷い目に遭はすると云ふやうな事を皆軍談演劇などでやる、村芝居まて其れをやる

今一の田舎になると芝居だの軍談などと云ふものはない、そこでどう云ふ者がやるかと云ふと、祭文とか何とか色々なものに依つて其れを現はす、之を皆人心が喜ぶ。だから此民族の喜ぶ所が勇を貴ぶ、義を貴ぶと云ふ、此の人心があると云ふことを充分に證據立つる。さうすれば則ち買人がある、賣れる、人心か其方に趨くのである。そこで暗々裏にそれが國民教育となつて居る、人が喜ぶ方に向つて皆それが廣がつて行く、廣がつて行くうちに知らず識らずそれが國民教育となる。そこで五月幟でも、八幡太郎義家とか云ふやうな、皆さう云ふ戰さとか、節義の人であるとか云ふやうなものが用ゐられて、段々子供の時からそれを見て居るから、暗々裏にさう云ふものが國民教育の本をなして來る。是れ則ち民族の特長が其處に現れて來たので、喜ぶからさう云ふ物を拵へる、紙鳶でも幟でも何でもさう云ふものを作る、皆さう云ふ風になつて居る。それを何故に僅か二十萬か三十萬の武士を中心として武士道といふ一の道を唱へるのであるか分らぬぢやないか。

そこでどうなつたかと云ふと、私の演説を後とて御覧になると分るが、日本て平安朝に於て王權が段々衰へて、外戚に權門が移るに就いてどうなつて來たかと云ふと、外戚が次第に全國の王土王民を私して來た。殆と藤原氏の知行と云ふものは全國に廣がつて來て、そこで其れを支配する支配人をやらなければ成らぬ、所が段々王權が衰るに從つて盜賊が起つて來る、此の盜賊を平げる爲にはどうしても勇者を用ひなくてはならぬ、そこで藤原氏が皆全國の勇者を集めて自分の領地を守らする、税を取らする、同時に叛亂が起ると之を平げさせると云ふことになつた。そこで先づ大江山の酒呑童子などゝ云ふものは今の土匪だ、土匪が起つた、其の土匪の最も大なるものが前九年後三年の役などゝ云ふ最も大なる土匪が起つた、それから純友などゝ云ふ海賊が起つて來る、將門が關東に叛亂を圖るなどゝ云ふ、皆之を平らげる、此等皆所謂豪族若くは野武士、野武士を集めて藤原氏が征伐して行くのである、そこで其間に源平氏などゝ云ふものが皆何時の間にか藤原氏の家來になつて仕舞つた。源平氏は王室から出た大切な家柄である、それが何故に藤原氏の家來になつたか、餘程不思議である、餘程不思議であるが少しも怪むに足りない。當時王子王孫はどうなるかと云ふと、外戚に對しては外祖父と云ふ關係がある、親類、外

祖父になる。そこで直ぐ姓を賜はる、姓を賜つてどうするかと云ふと其時攝關は則ち藤原氏がやつた、さうして王子王孫は姓を賜つて大臣になる。大臣になる時にどうかと云ふと、右大臣にまでしか成れぬ、左大臣は鎌足公の子孫で取つて居る。太政大臣左大臣は鎌足公の子孫が取つて、右大臣に一人入れて、是れは何時でも伴食宰相。そこで外から來る伴食宰相は何時でも右大臣、菅原道實なども矢張りそれなんだ。さうして居るうちに王室が段々減耗して財政困難、藤原氏はなか／＼裕に富んで來たものであるから、藤原氏に仕へた方が先づ第一利己的に利益がある。そこで一方には王朝の官を貰つて、官の俸給は少ない、藤原氏の方が餘計呉れるから、遂に皆其家來となつた。家來といふ意味は、今日の君臣とか何とか云ふ意味とは餘程違ふ、主從といふ意味よりも餘程輕い、御承知の通りあの時分の家來といふ者は、家人の禮を以て遇すると云ふので家の一族、王孫達は皆藤原氏の親類。そこで阿母さんが實に見繼を盡す、其の一家族になつた方が利益の上から都合が好いと云ふので皆家來になつた。所で王室は次第々々に財政不如意になつて來て、とう／＼仕方なしに坊主になる、尼になると云ふことが起つて來た、是が即ち門跡の起る本である。其時に藤原氏は段々家が裕かであるから、又領地を呉れて行く、さう云ふ理窟で段々武門武士と云ふものが其時に端を爲したのである。デ村上帝などは度々勅詔を下して、諸國の武士が段々源平二氏に屬して、これが絶大になることを防がうと云ふことを餘程御努めになつたが、もう既に大勢去つてしまつて居る。而して遂に保元平治となつて見ると、實は源平氏は鎌足公の子孫の家來、所が家來にとう／＼勝手に扱はれるやうになつて、丁度前に外戚が王權を奪つた其の因果應報で、今度は藤原氏の家來が又藤原氏の權力を奪つて、藤原氏は段々零落して來た。そこで又藤原氏の息子さんなりお孃さん達が食へなくなつて來たから、まだ迷信の盛んな次第で、これが坊主になり出した、是れが今日まで殘つて居つた攝家門跡、鎌足公の子孫が到る處に坊主になつて居る。今でも澤山に殘つて居る。此れが宮門跡に攝家門跡。丁度さう云ふ理窟になつて居る。其時分から此武士と云ふものが成立つたもので、これが封建の本であるが、武士の氣象と必要に應じて是が現れて來たので、死生の巷に立つて從容死に就くと云ふ、節義を貴ぶと云ふ精神が皆其時分から養はれて來て居るのである。

なか〳〵此の八幡公などゝ云ふものが、今日に至つて山村僻邑まで之を幟に建てると云ふものは決して偶然でない、日本人が皆勇を貴び義を貴ぶと云ふことが本である。それを單に德川泰平の時代に、何事も形式を貴ぶ支那的の頭から、漢學者達が云ひ出した武士道などゝ云ふことを唱へるのは實におかしな話である。

列強の君主を評し奉る

福本日南

現今世界の大勢を支配する列強の名を擧ぐれば、歐洲にありては英、露、獨、佛、墺、伊の諸國及び新大陸の北米合衆國是れなり。而して以上七國の中、共和國なるもの僅かに佛米の二國にして、他の五國は悉く君主國なり、君主國に於ては假令其政體立憲なると非立憲なるとを問はず、其君主の意志が國政上に非常の影響を及ぼすべきこと素より論なし、かるが故に其君主の人と爲りを知るは、世界の大勢を察するに當りて必要缺くべからざることとなりといはざるべからず、是れ予が試みに以上五大國の君主の、性行の一班を評論し奉らんと欲する所以なり。

(一) 英王エドワード陛下

大英國の君主—詳言すれば英國王兼印度皇帝たるエドワード陛下の御性行に就ては、従來世界の人の多くが甚だ誤りたる觀察をなしたりしなり、陛下の未だ皇

太子にて在せし時は隨分御放逸にして英國人の性格に似合はしからぬ程の亂暴をなされたるもの丶如く見え、之が爲に英國の內外に於ける御評判は甚だ宜しからざりしもの丶如し。然るに幸にして皇后陛下の淑德の御譽れは皇太子の御不身持を保護するの力をあらはしたり、エドワード陛下の御身の上に就ては隨分いかゞはしき御評判多く、或時は久しく歐大陸にお遊びになり、容易に本國にお歸りなされざることもありしなり。其時分の事ならん、倫敦に面白きこと流行せり、貴婦人の頸に絹を卷くこと大流行となれり、而して此流行の本は實に皇后陛下より起りしなり、皇后陛下が絹の襟卷をなさる丶やうになりしは如何なる原因なるや確かに之を知ること難しと雖も、京童の傳ふる所によれば皇太子の御身持に就て深く御心配なされ度々苦諫なされしも御用ひなかりしを以て非常に痛切なる最後の苦諫をなされんが爲めに申すも畏き御措置に出てられたりとの話なり、幸にして左右に侍く人々之を見出して辛やくお止め申したるも其時お頸の邊に何等かの斑痕を殘せしにはあらざるか、それを隱さんが爲めに絹を以て頸をお卷きになるといふ評判が立ちたり、然るに何が扨才德容貌兼備の人が頸に襟卷をなされし其御風采は如何にも美しくしていふにいはれぬ所あり、それ故に英國の貴婦人連中が其眞似をして頸に絹を卷きたり、所謂西施の顰に倣ひしなり、之が爲めに一時歐大陸まで此流行を來たしたる次第、隨分面白き因緣なりといふべし。これは餘事として此痛切なる苦諫によつて爾後の皇太子の御身持は著しく變化を來たしたりとの取沙汰なり、是れ或は齊東野人の語ならんも又か丶ることなかりしとも斷言せられず、か丶る次第なれば皇后即ち當時の皇太子妃の御令名こそ中外に輝け、皇帝即ち當時の皇太子の御不評判は寧ろ皇后陛下の蔭に隱れたるの氣味あり、皇太子に對しては世界は餘り多くの注意を拂はざりしものに似たり、然るに一旦皇帝となりて以來の御言行を拜し奉るに流石に堂々たる大英國を代表せらる丶に餘りあるを見るなり。玆に於て予は大によめた事あり、か丶る高貴のお方の事例を以て一般下樣の父兄を律するは或は當らざるやも知るべからずと雖も、總ての父兄に向て注意を促したきことあり、世の頑固なる父兄には極めて有り勝のことにして伜や弟は何歳になるとも恰かも子供の如く考え、これに家事も委ねず、責任も負はさず、之が爲めに伜や弟は馬鹿〳〵しくして自暴自棄に陷るの弊は

國分少からず見ゆることあり、英國のエドワード陛下は恐らくこれと一班なりしと思はる、先代の女皇ビクトリア陛下は近世の名君なりしには相違なし、唯其御宇六十年近くに亘りて何時皇太子の御世に移るやわからざりき、皇太子と申し奉れば大層春秋に富めるお方の如く聞ゆれども先帝の末年には已に六十歳の皇太子なりき、而して何時天下がお手の中に來るや知るべからず、御放逸にならざらんとするも得ざりし氣味もありしならん、然るに一旦皇位を繼がせられて以來は全く見違ひ奉る程の御行狀なるのみならず、國際に對しても一世の平和の維持者を以て自ら任ぜらるゝこと歴々として見るべし。思ふに此君主も先帝と同じく現代平和の一源泉とならるゝお方なるべし、かゝる君主を戴ける國と同盟する我日本帝國の　天皇陛下は同じく常に世界の平和を以て御衷心の御欣榮となさるゝを以て兩皇帝陛下の御威德によりて享くる世界の幸福は實に多大ならんと信ずるなり。

(二) 露帝ニコラス二世陛下

去て露國皇帝ニコラス二世陛下を見奉るに、此お方は、御一個人の御性行としては甚だ敬服するに足るものあり、實に世界の人が知る如く解兵問題に就て世界列强の會議を海牙に催されたる如き全く陛下の思召より出たることを認む、其始め嘗て左右の大臣にも計らずして此れを御發案なされたることは確かなる事實なり、其お心持は誠に尊敬し奉るべきものなり、然れども彼の如き大國の君主としては君主の資格に多くの缺點を有せらるゝことは疑を容れず、第一非常の神經質にして物に甚しく感じ易し、第二甚だ優柔にして判斷力に乏し、第三かゝる專政國の君主の常として氣隨氣儘なり即ち下様の言葉を用ふれば甚だ氣まぐれなるお方なり、第四世界の大勢を達觀さるゝ明に於て甚だ疑はしき所あり、かるか故に其お心持は平和を愛せらるゝ誠に結構人なるに拘らず今回の如き大難を釀成するに至れり、而して大難の結果は露國をして前古未曾有の失敗を重ねしめつゝあるに拘らず、尙靦然として悟らず、左右のものに警衛せられて依然戰爭を繼續せらるゝは甚だ悲しむべきことなり。今其優柔不斷なる御性行の一端を擧ぐれば一方には武斷派の皇族、大臣、將軍、又は先きの聖シノードの管長ポビエドノスツェフ等に聽きて專政抑壓を人民に加へ、又無成算の戰爭を何處までも繼續せんとしつゝあり、と思へば又他方に

於て、スヴイアトポルク、ミルスキーの如き自由主義の宰相に聽て自由主義を立つることも厭にはあらず、人民が專政を愁訴して自由を請求し來れば、其れにも耳を傾けらる、と思へば又一方より兵を指し向けて本年一月二十二日の虐殺を行ふをも止められぬ如きことあり、手短かくいへば先づブルボン家の末路にルイ十六世のありし如きものにて兩君酷だ相似たる所あり。畢竟此君は世界を左右する丈けの力あることを將來に於て認め奉ることは難かるべし、加之其御性質は前述の如く神經質にして甚だ物に感じ易き人なれば、今日の如く內外多難にして、之が長く繼續する時は皇帝の心裡に最も悲しむべき變態を生ぜずとも限らず、かるが故に此皇帝の御前途は甚だ微茫なりといはざるべからず

(三) 獨帝ウヰルヘルム二世陛下

次ぎに見奉るべきは獨帝ウヰルヘルム二世陛下なり、此お方は皇帝として世に出でられたる最初の一步より世界の耳目を驚かされたり。之を歷史に徵せよ、凡そ有爲の君主と稱すべきは一として先代より殘されたる重臣權相の制裁を受くることを喜はず、必らず自分自身の意志を用ひて大政を出さんと思はざるものなし、帝の初めに位に即かれし時は有名なるビスマルク公が此國の宰相なりき、ビスマルクが帝を見ること誠に小兒の如くにして此小兒何が出來るものかといふ考なりしなり。然るに皇帝は一度手を擧げて此先代以來の大宰相ビスマルクの政權をお取り上げに成たり、此際に當りては全く世界の疑問なりき、新皇帝は狂氣なるか又英雄なるかと。若し英雄ならば非常の英雄にして左もなくば常識を缺ける年少の客氣に驅られたる輕佻浮薄の人物或はヒポコンデリーの殿樣ならんとの評判なりし、然るに爾後今日に至るまでの御言行に徵するに第二の場合の疑は漸々減少し、兎も角も當世第一流の英主なること確かとなれり、露國の君主の如きは眞の獨裁の君主にして一國の大勢は其君主御一人の御意志より發動すべき筈なりと雖も、事實に立ち入りて之を見れば前述の如く左右の皇族大臣の意に從て行動せらるゝに過ぎず、然るに獨乙は露國の如き專政國にあらずして立憲君主國なるを以て獨裁といふ譯には行かず、左りながら此皇帝の英明なる實に獨乙の國勢はカイゼル御一人の御意志より出づるものとなし了したり、若し現今の世に眞の獨裁君主を求むれば先づ此カ

イゼルを推さゞるを得ず、内治にあれ、外交にあれ、軍事にあれ、教育にあれ、カイゼル御自身の考の行はれざることなし、殊に驚嘆すべきは有名なるビスマルクの政權を取上げられたる以來如何なる政策をとらるゝかと見るにビスマルクよりも一層上手な所を行かるゝこと是れなり、尤もこれは時勢の關係も與て力あることにして世界の氣運や、獨乙の地位の異り來りしにもよると雖もビスマルクの一生取り來りしものは歐洲政略にして其目的は歐洲の列强を均衡して覇を歐洲に唱ふるにありしが、今やカイゼルの目的は覇を世界に稱するにあり、一言にして之を掩へばビスマルクの政策は歐洲政策にしてカイゼルの政策は世界政策なり、實に後世畏るべしにて青春の皇帝が鐵血宰相を踏み倒して世界政策を執つて來るべしとは一世の豫想せざる所なりき、今の世に口も八丁手も八丁といふものは此カイゼル陛下のことならんと考ふ、皇帝が今胸裡に描き居給ふ所の御政策を發き見れば、第一に三國同盟を維持し、其上露佛同盟を何とか形を附けて之を味方となし、先づ歐洲大陸をして獨乙帝國の命令に聽從せしめ、而して後に海上に於て彼の海王たる英國の前に立て彼と海權を爭ひ、英の海權を剝奪して獨の手中に收め、而して後世界に臨んで此大塊の兩球はカイゼルの知ろし召す所なりとやつつけやらうと思ひつゝあり、左樣參るか參らぬかは知るべからずと雖も兎も角もすばらしいお方といはざるべからず。殊に感服すべきは此政策に自らあらん限りの勢力を揮はれて十餘年來一日も止むことなく、常に此方面に向て其歩をお進めになることなり、世人は今に記憶せり支那の膠州灣をとるに當り、御舍弟ハインリヒ親王をして艦隊を率ゐて極東に派遣せしめらるゝに臨み彼の有名なる鎧袖演説をキール軍港に於てせられたることを、其御演説は極めて簡單なりしが、其簡單なるにも拘らず、平和の爲め、平和の爲めと仰せられたること演説中凡そ二十幾回かに及びたり、如何に平和を重んじ奉る皇帝なるかは之を以て見奉るに足ると同時に、其際御舍弟親王の御門出の御目的は理不盡にも他の邦土を奪ひ取らんが爲めなりき、誠に結構なる平和の爲めなるかな。現に今回の日露戰爭の如きも其主因に遡りて考ふれば三國干涉の結果日本が戰勝によりて得たる大陸の權利を剝奪したるにあることは何人も認むる所ならんが其三國同盟の發頭人は果して誰ぞや、又今回露國をして傲然日本の正當なる要求を拒絕して終に干戈を交ふるの止むを

得ざるに至らしめし其動機に與つて力あるものは誰ぞや、日露の戰爭を喜ぶべき機會として之によりて平常の雄圖を伸べんとする人は誰ぞや、平和を重んじ給ふカイゼルの將來こそ吾人日本人の一日も看過すべからざるものなれ。

(四) 墺匈帝ジョセフ陛下

次ぎに墺匈國皇帝ジョセフ陛下を見奉るに今の世界に於て最も溫厚篤實なる君主は此皇帝の右に出づるもの恐らくなかるべし、如何に此皇帝の仁慈に富まるゝかは一寸一つの例を以ても之を知るに足るべし、維納に於て或年觀兵式を行はれたり、今其名を記せざるも其日の指揮官は有名なる老將軍なりき、而して此老將軍の乘りたる馬は非常の奸馬にして頗る危險なり、皇帝之を御覽なされ、餘程氣遣はしく思召し、觀兵式を擧行せらるゝに臨み皇帝は其れとなく老將軍をお召しになり、其方の乘て居る馬は至極遲しき馬なるが朕が乘て居る馬と交換せずやと仰せられ、自ら其奸馬に乘て式を擧げられたり、これ將軍の老齡にして万一怪我てもなさしめては誠に氣の毒なりとのお考より玆に出てられたるものにて、其事をあからさまに口にこそ出して仰せられね、何人も其御趣意のある所を認め老將軍初め感泣せざるものなかりしといふ、何人も知る如く彼の國の現狀は極めて困難の位置にあり、匈牙利は如何にもして墺太利より離れて獨立せんと志すこと一日にあらず、加之匈牙利の勢力は年々加はり、而して反抗の意氣も益々高まり來れり、彼國には議會に見るも知らるゝ如く三種の黨派あり、一は急進黨にして一は漸進黨なり、而かも其急進たると漸進たるとを問はず、何れも獨立せんとするの目的は一なり、只其手段に急激なると溫和なるとの差あるのみ、かくの如き有樣なれば實に危き形勢にして譬へば一髮千鈞を繫ぐが如し、而して此一髮となる方は即ち此ジョセフ陛下なり、此陛下の御德望によりて墺匈聯合國は一致せらるゝなり、然るに天は如何なればかゝる善良なる君を助け給はざるか、此ハプスブルグ家の御不幸は近年頻りに打續き、皇太子は篤に先ちて御薨去なされ、又世に稀なる淑德の譽高き皇后陛下は兇手に御倒れになり、而して皇帝陛下は今や非常の御高齡にして、又國内の有樣はかくの如く是れ非なり、皇帝の御心裡に立ち入りて見れば如何ばかり悲しく思召さるゝか、推し奉るだに瞼の濕ふるを覺ゆるなり、此國は最早や到底

前獨乙の盟主たりしハウスブルグ家の當年を恢復することは望なかるべきなり。

(五) 伊王エンマニエル陛下

次ぎは伊太利皇帝の評なるが、彼國の獨立して舊伊太利王國を一統せられしは恰かも昨日の如く思ひしが我日本の維新と同じく早くも四十年となりぬ。今の皇帝ヴィクトル、エンマニエルも御祖王エンマニエルの御氣風を承けさせられ、誠に平民主義の君主なるかの如く見受けらる、予は最もかゝる王樣を愛し奉るなり、陛下が未だ皇太子なりしとき南方の軍團長をお勤めなされしことあり、其際當時の皇太子妃即ち今の皇后陛下と任地に在せしが其御生活の簡易なること實に意想の外にあり、御別莊と申すものゝ極めて質素なる御殿をある風景佳なる島の中に建てられ、皇太子妃は僅かに下婢一人を使ひ、軍團長即ち今の陛下の朝夕の御食事より總ての雜務に至るまで悉く皇后のお手づから御調理又は御辨じなされたりといふ、且つ他の將校などの御見舞に來りて二人三人卓を連ねて陪食を賜ふ時に當りても矢張り皇后自ら御料理をなされて御食事を共にせられたりといふを見ても以て其御生活の一班を窺ひ奉るに足るべし、かゝる御質素なるお方なれば皇帝とならせられてより後も益々其御質德を輝かされたり、此陛下は先きのカイゼル陛下と異なり、仰せられざるべからざる場合の外は平和といふ言葉の御連發をなさるゝことはなしと雖も眞に平和を愛し給ふ所の君主とは實にかゝるお方のことなるべしと考ふ。

右は日南氏の口述を其儘錄にせしものなれども文責は記者にあり

戰後改革意見(上)

島田三郎

戰後の經營の意見と云ひましても其幅が廣ふございますので、いろ／＼な方面から考へましたならば實に重大な意見が續々と起るでございませう、又其人の所見に依つては其改革の意見の大體が異なるであらうと思ひます、私は誰も是に付いては一考を加へなければならぬと思ふもの、三箇條を心に持つて居ります、其三箇條は各々聯關して居りまして、頗る日本の社會に變動を與へる改革意見でございますが自分が信じて居つたから必ず其通りに往かうと云ふことは出來ないの

て其點に於て極めて大膽であると同時に極めて謙遜の心を持たなければならぬ。申すまでもなく

戰爭は國家の共同の災厄

てございますから、之を防ぎますのにやはり共同の大事であつて共同防禦の務めを盡さなければならぬ、今日に於て其務めに直接服して居ります人は軍人であります、其軍人に專門に志願をして從事する人と國民として徴兵の年限の間此務に服する人がございますが、何れにしましても專門の軍人並に徴兵の現役に服しまする人も御同樣國民から見ますれば吾々に代りて災害の防禦に當つて居る代人であると私は思ふて居ります、此の如く國家全體の上に關係して誰も此務に間接直接に服さなければならぬものでございますから共同の災厄であれば共同の義務がなければならぬのでございまするが、實地の上には非常な差違のあることで、即ち此席に居ります私も諸君も直接には戰爭に從事して居りませぬ、何か機會があれば其後援となつて働くとか同情を表するとか云ふことに止つて居りまして直接危難危險を冒す場合になつて居りませぬ、併ながら戰のために國の災厄を防ぐと云ふことの利益は事實防いて居る人も其人に依りて防いで貰つて居る吾々も同一の災害でありながら同一の務に服さないで、さうして同一の利益を占めて居ると云ふことを私は信ずる、若し一朝戰が破れて防禦が行屆かず國家の一大難が頭上に加はりました時は戰に服して居らぬ吾々も其災を受けるのである、戰に從事して居る代人者の務に依りて吾々は間接に大變利益を蒙つて居る、消極に言へば其災を受けないだけの利益を蒙つて居る、此事が首尾克く職務を終りましてそれから受ける利益は誰が受けると申しますると、是又日本の名譽と日本の利益と日本の勢力が伸びますれば日本を形造つて居る人が悉く此利益を分ち得るのでございまして、戰が共同の災厄であれば、其災厄に當るのは

共同の義務

てあらねばならぬ、是に依て得たるところの利益は國家全躰が受けるので、其一部分を皆人々が受けるのでございますから共同の仕事であると云ふことは誰も疑はぬことでございます、定めて私は戰が終りましたならば非常な日本の勢力が伸るてあらうと思ふて居ります、是までの過去の事蹟に徴して見ましても日清の

戰後に日本の勢力が世界に伸びたことは著しいことであつて、一時は大層な災害を受けましたけれども、其後に起りましたところの利益は其災害を償ふて尚ほ是より大なる勢力が伸びたと云ふことは十年前の役に徵して明かであります、其後に起りました（比較して小なるものでございますが）義和團の事件に於て日本の軍隊が勇氣と品性に於て歐羅巴諸國の軍隊に劣らなかつたと云ふことが實は日本の信用を高めまして日英同盟と云ふものが成就したのでございまして、此日英同盟の成就した當時に英國の政府黨並に統一黨は賛成致しましたけれども、英國の自由黨は頗る異論があつたのでございます、近頃の報告に依りますと英國の政府反對黨も日英同盟の期限が過ぎたらば更に繼續しやうと云ふことを公に言つて居る、尚其區域を擴めてもう些と廣く且つ緊要なる契約をしやうと言つて居るので英國の輿論も今回の戰の未だ終らざるに已に得たる勝利に依つて日本の共同の友たるべきことを確信するのが英國の全體の數となつて來たやうに考へられます、或は南の方を覗いて見まするとまだ戰の終らぬ中に濠太利亞の英領では日本人の待遇を改めると云ふ議が議會の中に起らんとして居る報告も聞いて居ります、今回の戰に依りて日本の人々の勇氣と並に公に對するところの忠節と、非戰鬪員に對しまして亂暴をしなかつた並に昔の東洋の半開國であると見て居りました此日本國民が決してさうでなくして守るべき約束を守り、愼むべき事柄を愼むと云ふことで大に日本人民の價値を揚げて居りますので、此戰が首尾克く終りまして跡に手落なく順當に往きましたならば日本の勢力は一層大なる度合を以て加はるてあらうと思ひます、二十七八年の役既に然り義和團の役既に然りと見ますと、それより大なる艱難を受け大なる危險を冒して日本國民が首尾克く往きましたならばもう一層の利益を受けるだらうと思ひます、さうして此利益を受ける人は何人であるか、ずつと生殘つた日本國民が受けるのであります、誠に氣の毒で同情に堪へぬ痛ましいことであるが戰爭に出た人は國民に代つて自分が犧牲になつて、其犧牲となつた死を以て日本國民の後來の安寧と現在の勢力を增益する仕事に身を捧げた人である、斯う考へて見ますと是より起るところの利益は殘る人が受け死したる人は唯だ其義務を盡したと云ふことで人の尊敬と同情を償するだけのことで直接身體の上に利益を受けずして此世を去るところの誠に痛ましいところ

の仕末である、斯う云ふことは國民が年々忘るゝことの出來ないことであらうと思ひます、萬一之を忘れまして放逸に流れて戰の後に其終りを全ふすることがなくして戰に依りて得るところの名聲を濫用するか信用を濫用するか其勢力を濫用するか、是等のことがございましたならば國のために其反動の災を受けるのみならず吾々に代つて死したるところの犧牲の精神に對し犧牲の靈魂に對して

背德の行

てあらうと私は思ふのであります、そこで戰後の經營には先づ第一に道德を高尙にしなければならぬと云ふ大義務がある、何故ならば人に代りて死することは人の最も崇敬すべきところの道德の絕頂であると思ひます、即ち此道德の絕頂に從事したのは今日滿洲の野に危險を冒し滿洲の野に屍を曝したるところの吾々の同胞であるならば殘るところの人は是等の人に依つて受けたる利益を順當に用ゐて其人々の志を空しくしないと云ふところの覺悟を今日から極めなければならぬ、此根底の覺悟があつてあらゆる改革と云ふものが遂げることが出來ると思ふて居ります、第一今日戰に依つて受けて居るものは共同の危難であつて之を防ぐところのことは共同の義務である、是に依つて直接損害を受けるところの人は吾々の代人であつて、此代人を出して殘つたる人が利益を受けると云ふ此關係はしつかりと定めて置かなければならぬ、斯う私は思ひます、尙古いところのことを私は論ずるの必要がないと思ひますから三十八年前に遡つて維新の亂並に其以後十年に起りました西南の亂其以後に起りました二十七八年の亂、其戰に依つて其後國家が如何になつたらう云ふ經歷を顧みますと無論前代の束縛を解いて少くとも國民同權となつて自由の空氣を呼吸して、其ために歐羅巴諸國の人も日本を尊敬するに至り吾々今代の民も稍々國民らしき生活を遂るに至つた、此起元は維新の戰に基ひを開いたものであつて、維新の戰以前彼のいろ〱な議論がございましたけれども與つて大なる起元を開いたのは明治元年でございます其時の戰の度合は今日の大戰ではなかつた、內亂であつたのでございますけれども、併ながら其時は戰の力が乏しかつたから今日是だけの力を以て今日の戰をやる困難と維新の時の力を以て維新の犧牲を供するとは殆ど同じであつたらうと私は想像します、此維新の亂に犧牲となつた

人の餘德は國民が永く忘れることが出來ない、是がために日本が一新した、それならば此戰に依つて日本が稍々平等の位地を國民に與へ新局面を啓いてさうして新社會を現出するに至つた維新後の形勢はどうであつたかと云ひますと難に直接に當つた人が損害を受けて殘り留つた人が餘德を受けた、併しながら歷史上、亂に依りて何時でも買つたる犧牲と云ふものがあとで善く用ゐられたか用ゐられないかと云ふことを考へて見ると或る場合には謹んで用ゐられ或る場合には濫用せられたと云ふことが維新以後の形勢に徵して見ることが出來る、二十七八年も其通りて、二十七八年に日本の勢力が伸びまして日本は大なる利益を此亂に依りて得た、此亂に依りて日本の富を消費しましたけれども此亂に依つて又富を回復して尙餘りある日本の活動が生じましたから日本の經濟上にも二十七八年以後は餘程發達が多かつた、其以後の政治と云ふものは制限するには議會を以てすべき時代であつて最早形に於て立憲政體は成つて居りましたけれども、此立憲政體が無くしても、當時にあつて立憲政體を維持する民間の力がまた薄弱を免かれぬがために年を積んで根據の座つた政府と新に起つて其勢力の未だ確定しないところの議會との權衡が取れぬために二十七八年の政治の平均は議會を以て政府の謙愼を維持することが出來ずして放縱に流れたと云ふことがあると云ふやうな譯でございますから是等を考へて見ると今回愈々露國に勝つて日本の勢力が世界に擴がつた後の日本國は如何であるかと云へば、日本國民が警戒をして前に私が述べました如く難に當つて倒れたる人の艱難を殘つたる國民が一刻も忘れずして同じく此難に倒れた如くの覺悟警戒を加へなければならぬ。然らざれば此勢力を用ゐるところの保證が附かぬと思ふ今日に於て戰後の經營は寧ろ之を事柄に求めんよりは、又之を制度に求めんよりは

日本國民の覺悟と道德

の位地を高めて物質の力を適當に用ゆる見据を附けねばならぬと思ふのである、先つ戰後の改革を論ずる時には人の心に立入つて議論をしなければ本統の議論を立ることは出來ないと思つて居りますから前以て概論として此の如く述べた、然らば今回の戰に於てどう云ふ關係で日本が此の如く滿足なる結果を得んとするに近いたかと云ふことを考へて見ますと是はいろ／＼な關係で、詰り文明の機關の備つて居る國と文明の機

鬪のまだ備らずして調子の揃はぬ國との爭で、調子の揃ふた國が勝利を占めたと說明して宜からうと思ふて居ります、例へば無學の露人は戰の意味を理解もせず唯だ號令が然らしむるので戰に從事する、物事を辨へた人は此戰は國家必要の戰でないと云ふことが分りますから戰に向て不平がある、敎育のある不平の人と、戰に向つて何の意識もない無學の者とを滿洲の野に移して日本國民と戰はしめたのが露國の敗れた原因であると思ふ、日本はどうであるかと云へば津々浦々の僻村の人までも今回の戰の意味は理解せざる者なしと說明して宜からうと思ふ、婦人も又之を理解し小兒も又之を理解し、村の內より軍人が出ました時には其同鄕の人が是に同情を表して兵になるのを祝すると云つて後ろに立つて此人々の戰に赴くのを勇ましく見送ると云ふ此形勢が日本國家の露國に勝つ根底であつて前に申しました通り日本國民は自衞のため國の安寧のために同胞に代つて此職務に從事すると理解して戰に赴くのであつて、無論人情として此危險に近くのは好む譯でもなく、又人情としても親族を危險な地に送ると云ふとは悲く思はぬでもなけれども、是より大きな道德が尙ほ存するために國民全體のために、爲さねばならぬ代人の義務を務めるのであると云ふ此意味が胸中に滿ちて居りまして此意味を理解して親戚朋友に送られ親族に送られて此戰場に赴く、斯う云ふ軍人と戰の何事たるをも知らずして唯だ命令のために赴く此露軍と戰つて日本國民が機械的並に形而下のいろ〳〵の不利を算用に入れずして此精神に於ての比較に於ていろ〳〵な不足を補ひ得て尙餘りあると云ふことが日本の勝つ所以である露國の敗るゝ所以であると理解して宜からうと思ふ、然らば如何にして日本國民が此一致を得此理解を得たかと申しますといろ〳〵理由があつて文明の調子の整ふて居る國と言つたのは是であつて日本の文明日尙淺しと雖もそれだけに至つたのは御同樣大慶であると思ひます、唯だ是は無形の仕事と云へば餘り漠然に過ぎますから私は之を形の上に現はしたるところの箇條に依つて說明して見ますと云ふと敎育の上に我國が勝つて居る、徵兵制度の上に我國が勝つたのであつて、並に憲法の實施國會開設に依りて我國が勝つたと斯う私は

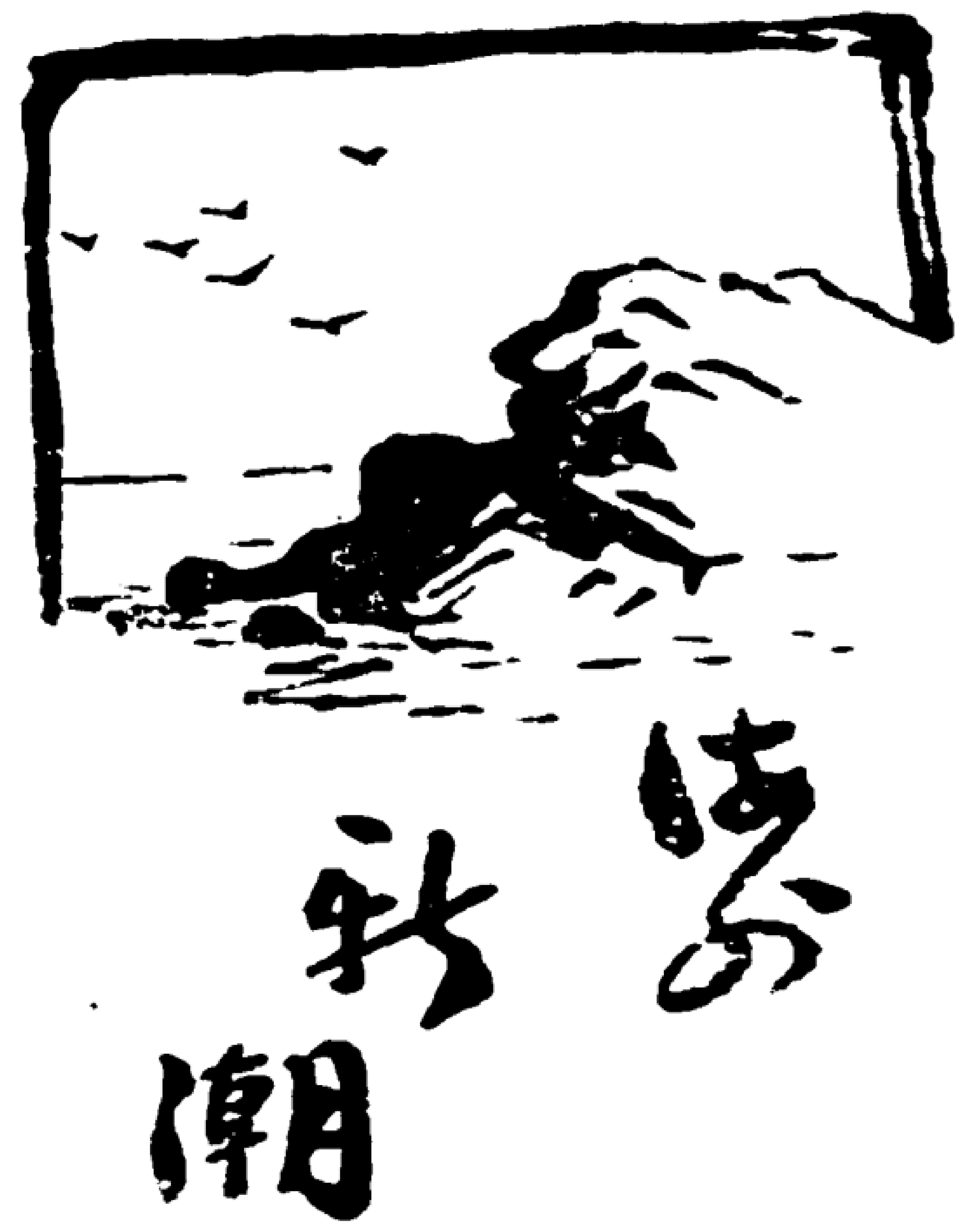
三箇條

を許して居るので、徵兵制度に依る、敎育制度に依

る、並に自由制度に依る、此三つが國民をして戰の何たることを理解せしめたものである、若しも徴兵の制度が無くして昔の如く武士以上の者が國の安危を請負ふと云ふ封建制度であつて國民は一向國事に與らぬと云ふ昔の組織であつたならば戰と云ふものは士以上のものであつて決して國民は深い關係を持たず同情を表するの機會はなかつたらうと思ひます、私は維新以前の樣子を幼年の時に見聞したのでございますが、生蕃の騷動があつて英國の人が怒つて江戸灣を砲撃する、何日迄に此事を片附けて呉れなければ江戸灣を砲撃すると手詰の掛合をしました時に舊江戸即ち今日の東京の有樣はどうであるかと云ふと皆な荷物を片附けて近在へ逃げて丁度今日他國の人民が支那に參りますと支那の人民は危險を冒して商賣氣ある者は品物を敵軍に賣る商賣氣のない弱い人は自分が家族と共に荷物を片附けて逃げるのが今日の有樣、日本はまさかに敵軍に品物を賣ると云ふ程の日本國民ではなかつたけれども、荷物を片附けて近在へ逃込んだ、其國民が變じて今日は徴兵の制度の下に國の護衛をする、殘らず國の安寧を委任することになりましたのは一方には全體に兵隊の權利を與へて國は民と共に守ると云ふ精神が洽くなつたのと、是と同時にそれをするのは一般の人の義務であつて丁年に達すれば此職分を執ると云ふ徴兵令が詰り國民を改造したのである、斯う見ますと今回露國に勝つたのは徴兵令の勝利であると思ひます、併ながら唯だ徴兵令を布いたところが決してそれだけで國民に戰の意味を理解せしむることにはいかない、戰を理解せしむるのは智惠の働きであるから普通教育に依つてあらゆる人が皆な同じ教育の利益を或る程度まで受ける、其制度が國民をして此事理を悟らしめる根底となつたと私は思ふ、昔の教育制度に依りましては藩で學校を建てましても或は將軍が學校を建てましても或は公卿の間に學校が出來ましても皆な階級に依りて學校に這入る特權を與へたのでありますから、一般の國民は教育の利益を受けることが出來なかつた、出來なかつたのみならず教育を受けてそれを活用するところの四民平等の社會でなかつたから道樂に詩を作り文を作る者がありましたけれども一般の國民の人格を養ふために教育を受けなければならぬと云ふところの心が國民に無かた、（次號完結）

（文責在記者）

▲中村進午氏の論文は紙面の都合により次號に掲載することゝせり



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と精力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ諡し我國現時の急務なりと信ず。

平和條件と日本の要求

「サー、チヤールス、ヂルク氏」

極東に於ける戰爭の繼續は、今後幾何の歲月を要すべきかは今玆に之を論ぜず、又之を論ずること能はざるを以て、假りに今日に於て日本が平和を締結すべきものとせば如何なる要求をなすべきかを見、之に向て些か論評の筆を加へんと欲す。

吾人は先づ日本が開戰前朝鮮及び滿洲に就て露國に向て要求したる事の何なりしかを問ふの必要あり、勿論其際に於ける日本の要求は現今に於ては彼の最少（ミニマム）なる要求となりしならん、而かも兎に角其際彼の主張したるものは朝鮮に於ける日本の特別なる利權を認めしめ、其の代りとして滿洲に於ける鐵道に向て露國の特別なる利益を認むるといふにありき、而かも露都に於ける栗野公使に向て日本政府の發したる電報は全く此申込を破却したり、電文に曰く「露國が無條件にして永久滿洲鐵道を有するは日本の安全と利益とを害するものたり、これ權力の平均を破り、支那の獨立を危くするものなり」と、然れども日本政府にとりて之よりも重大なることあり、若し露國を朝鮮の横側にあらしめば是れ實に日本の第一の敵にして、少くも朝鮮をして露國の手に落ちるに至らしむべし、朝鮮は日本の防備上に於ける最重の地なり、日本は朝鮮の獨立を以て全く自國の安危の繫る所なりと信ずるものなり、日本は到底朝鮮内に他の勢力を附植せしめ、又朝鮮を强迫するを許し能はざるなり、これ故に朝鮮問題は日本要求の第一に來るものなり。

然れども此等の要求を外にして日本が戰後施行すべき根本政策の如何なるべきを考ふるは實に重大なることなりといはざるべからず、故に彼がとらんとする三つの方針あり、第一は所謂亞細亞の指導者と稱すべき政策にして直接に支那を管轄指導する勢力を得んとすることなり、日本が果して支那を管轄する程の實力ありや是れ第一の疑問なり、第二日本は露西亞と協同して支那を管理すべや、協同して管理すとは日露同盟との謂にあらず、世或は日露同盟を唱へ、日英同盟を破りて日露同盟を結ぶの利なるを說くものありと雖も、之れ思はざるの甚しきものゝみ、かゝる人は恐らく日本の海軍力について一考だも費やせしことなきなるべし、日本の海軍は露國海軍と合併するも決して英國の海軍に當るの力なし、而して日本の如き島國は其國防全く海軍力によるべくして、若し海軍の敗れたる曉は國の獨立得て保つべからざるは少しく思慮あるものゝ認むる所なり、然れども日露協議して支那を管理することが必ず日露同盟を來たし、日露同盟が必ず又他國と戰爭を來すべしとの意にはあらず、

兩國協議して支那問題を議するも恐らく、商業上或る特別なる利益を得るといふことに止るべきなり。

然れども露國と協議して斯る事業に着手するは恐らく日本の不利益なるべし、何となれば若し露國政府にして鞏固且つ安全ならば必ずしも不可なりとせざるも露國の國勢を見れば其變動未だ容易に察すべからず、若し一旦露國にして益々否運に陥るが如きことあらんか、日本は遂に孤立援なきに至り、臍を嚙むも益なかるべし、第三の政策は戰略の意味を含めるものにして、日本の亞細亞に於て眞に要求し、必要とする所の何なるかにあり、彼は前述の如く朝鮮を保持し、其方面に向て發展を試みんと望みつゝあり、されど朝鮮を保持するには必らず朝鮮と腹背相接する滿洲に他國民を置くべからざること明かなり、故に彼れ若し平和の條件を提出せんか、其他の項目を後廻はしとするも先づ滿洲に於ける露國人を成るべき丈け退けざるべからず、若し此事にして成就せんか、鐵道の所有、旅順租借、土地の讓有等亦いふに足らざるなり。

平和問題を議するにあたりては日本人は全く感情を郤けざる可らず、



THE RUSSIAN BEGINNING.
—*Floh* (Vienna)

旅順は日本が多大の犧牲を拂へたる所、感情上より之を見る彼等の之を保持せんと欲するは無理ならぬことなり、然れども感情上より離れて之を見る、若し滿洲より來るべき敵なければ旅順は軍港として日本に何の必要ありや、その保有は日本にとつて却て費用を要する厄介物なりといはざるべからず、かるが故に日本の政治家にして感情に支配せられずんば我等はたゞ滿洲の中立を主張し、未來決して敵の侵すなからんことを保證し、成るべく露國をして黑龍江の舊領に復歸せしむることを以て平和の第一要件となすべきことを主張するものなり。(譯者曰く成程英國には最も好都合の條件なり)

されど平和條約は畢竟賣る人と買ふ人なり、日本利あれば露國損あり、露國が果してかゝる條件に服すべきや否やは頗る疑はしけれども、之をなすも其損害は想像する程大いなるものにはあらじ、何となれば滿洲は露國にとりて必須の地にあらず或政治家は商業上露國の利益となること極めて少しと斷言せり、露國の巨大なる資本が此地に埋められたるとは事實なり、鐵道の費用凡そ二億七千ルーブルにして其他の費用五億ルーブルなりといひ傳へらる、而して其費用は概れ支那人の懷中を肥やせり、

露國はかく滿洲に資金を投ぜりと雖も事實に於て同じく支那人の滿洲なりき、今日まで其處に移住せる者ゝ多くは支那人なり、露國人にあらず、露國人は若し此處に移住するも久しからずして他に轉ずるなり、黄色人種百万以上にして而して益々増加しつゝあり、若し露國平和條件として此地を捨て去るも事實に於ては經濟上何等の影響なかるべし、

露國にとりては政治上の犠牲！、日本にとりては經濟上の利益と、政治上の安全！然らばこれ滿洲の中立によりて定めらるべき平和條件なるべきか、然れども今後若し戰爭繼續せば如何なるべき。

日本の連勝にして今日の儘にて進行し、太西洋岸全く露人の影を見ざるに至れば樺太の讓與、漁業の獨占、浦鹽斯德の占有等起るへき問題なりと雖もこは今日の平和條件には未だ入り得べからざることといはざるべからず。

償金問題

「デーリー、ニュース」

露國が平和の克復を望み、日本の提出すべき種々なる條件を受認せんとしつゝあれども、只一つ彼が苦心しつゝあるの障礙は實に償金問題なりといふ風說は全く信ずべき價値あるが如し。げに償金問題は近世の戰爭に於て最も重大なる意義を有するに至れり。戰爭の費用は新武器及び新器械の發明と共に益々其額を増加したり、かるが故に若し一旦戰爭に敗れて償金を出さゞるべからざるに至らんか、戰敗國の負擔苦痛や益し少々ならざるなり。

多くの戰爭に於て、兩敵國の勝敗の數已に定まり、劣敗國の人民が戰爭の繼續を以て、空しく人命を絕ち、徒らに金錢を費やし、而かも益々己れの國運をして非ならしむることを悟り、如何なる損失を蒙るも平和の克復を希望するに至れば、玆に初めて休戰の約が結ばれ、平和の條件が提議せらるゝに至るべし。

一八一四年ナポレオンが同盟軍に敗れて捕虜とせられ、英王及び歐洲聯合軍が正統の君主を迎へて佛王の位に即かしめしとき、巴里第一條約が締結せられたり、而して此條約も歐洲の他の多くの基督教國に見るが如く聖なる神の名によつて誓はれ、歐洲の長き混亂を鎮め、人類の不幸を救ふて永久の平和を來さんが爲めと宣言せられたり。而して此條約の内容を見るに白耳義及び獨乙の方面に於て



IN HIS CONFIDENCE.

The Czar consults those whom he trusts as to whether he ought to give Russia a constitution.
—*Simplicissimus* (Munich).

幾干の土地を增し、一七九二年の佛國の古き國境を回復し、セネヴアの通商、ライン及び其他の河川の航行、マルタ、和蘭及び一部の伊太利諸州の主權、獨乙の聯合、瑞西の獨立等論議せられ、而して條約に與かりし各國民は二十年間權力を逞うせし共和の爲めに失はれたる殖民地及び地面を佛王に還附することを許容したり。英國は多く殖民地及び漁業場を佛國に還したりと雖も其代りとして西印度に於ける佛の領地を讓り受け、瑞典はグアダルーフを、葡萄牙はギアナを佛國に還附せり。然れども一八一五年ナポレオンがエルバ島を脫して再び兵を擧げたる時は實に歐洲一般の驚愕を惹起し、佛王は七億フラン即ち二千八百万磅を同盟國に償金として出したり。

一八四九年サルヂニアがロンバルヂー、及びヴイニスを助けて墺太利に敗れたる時も同じく償金を以て其局を結びたり。

一八四二年吾人が支那と戰爭を開しや、吾人は二千弗即ち四百万磅の償金を支那に請求したるも皇帝は條約に調印せず、吾人を罵りて野蠻人は實に莫大なる費用を奪はんとするものなりとなせり。

其後クリミヤ戰爭あり、一八五六年巴里の條約ありしも此條約には一錢一厘も償金は問題とならざりしなり。

償金問題が平和問題の最大條件となりたるは實に普佛戰爭以後なりとす。一八七一年二月ヴエルサーユに於て定められたる償金の額は實に五十億フラン即ち二億磅にして世人が佛國民の一代を赤貧ならしむべしと考へたる程なりき、然るに驚くべきかな、佛は一八七三年九月五日此巨額の償金を支拂ひ、獨兵をして佛の國境より退かしめたり。

露土戰爭に於て露國は獨逸のなしゝ所に從ひ巨額の償金を土耳古に求めたり、一八七八年二月に於けるサン、ステファノの條約に於て土耳古はモンテネグロ、セルヴイア、ルーマニアの獨立を承認し、ブルガリア及びクリートの自治權を許し、且つ左の如き露國の費用を支拂はんことを約束せざる能はざりき。

戰爭の費用……………………九億ルーブル
露國海岸の損害………………四億ルーブル
コーカサスの損害……………一億ルーブル
在土耳古の露民の損害………一千万ルーブル
合計……………………………十四億一千万ルーブル

即ち殆んど一億五千万磅なり。然れども伯林會議に於て我等は此提出に反對し、到底土耳古の負擔に堪へざるべきを抗言せり、之を以て露國は一八七九年一月二十七日コンスタンチノープルの條約に於て其償金の高を減じて八億〇二百五十万フラン即ち三千三百万磅及び土耳古に於ける露國民の損害を受取ることを以て滿足せり。然れども此償金さへ土耳古の爲めには實に非常なる苦痛にして屢々露國の苛酷なる請求に惱まされたり。

一八九四年の日淸戰爭に於て支那は二十三億テール即ち三千四百五十万磅の償金を日本に出すべく、歐洲の市場に於て外債を募集せり。

北米合衆國は西班牙との戰爭に於て償金に向て最も適宜にして人道的なる例を置けり、一八九八年の平和條約に於て米國は比利賓及び其他の島を取り、西をしてキューバの獨立を承認せしめ、四千六百万磅に上るキューバ及び比利賓の負債を拂はしめたり、然れども彼は決して償金を請求せざりき、否單に請求せざりしのみならず彼は西班牙に向て其損失を償ふべく四百万磅を與へたり。

今回の日露戰爭に於て日本は普佛戰爭の如き巨額の償金を請求せざるべきは論なし。日本は如何に露國を破るとも未だ獨逸の佛蘭西に於けるが如くなること能はず、且つ今日まで日本の費せし金額は未だ五千万磅

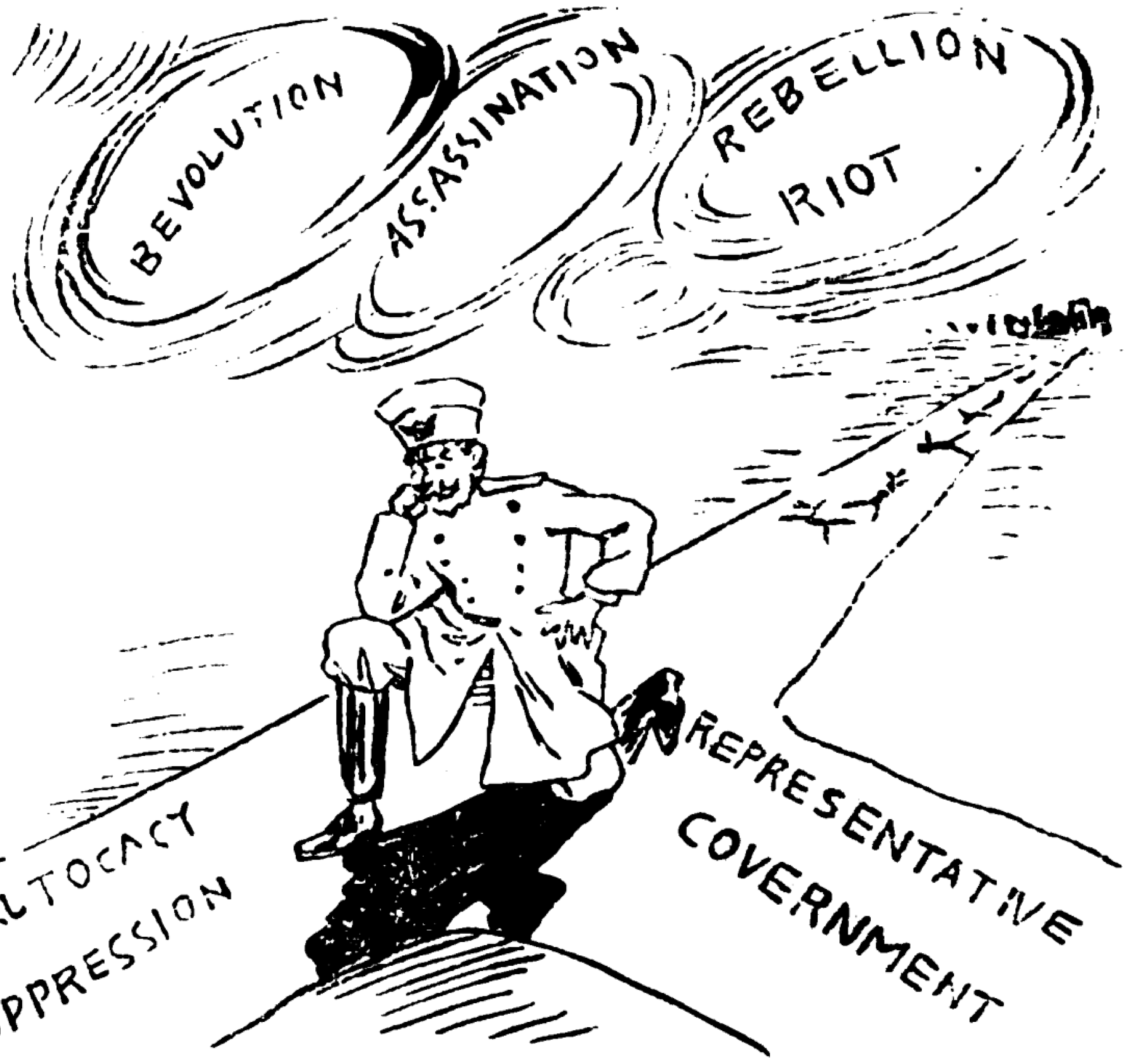
に上らざるなり。若し日本にして旅順及び遼東半島を得ば極めて適宜なる支撑を以て平和を承諾すべきこと疑なし。

極東戰亂の一年間

「スペクテートル誌」

駐露日本公使が皇帝の命を奉じて談判破裂の上は日本政府は斷然たる處置に出づべしと宣言してより巳に一年の歳月を經たり、一年の歳月は極東の戰亂について反省を促がすべき絶好の期會を與ふ。

一年前露國は列强の中にありて最も恐怖すべく最も實力ある國と思惟せられたり、大英國に次て地球の最大範圍を有するは實に露西亞帝國なりき、彼は近世史に於て其比を見ざる發展をなし、益々其願望を逞ふすべく暖水港を有し、極東の通商も當さに彼の手中に落ちんとするの有樣なりき、彼の外交はあらゆる國民の恐怖する所となり、且つ何れにも其功を奏せざるはなく見受けられたり、普通人の眼より見れば彼は數代の間同一の目的を追うて進み、あらゆる忍耐をなし、あらゆる障礙を排し、以て漸々其目的に近きつゝあるものゝ如く見えたり。露國は實に君主專制の好模範にして、其大いなる官局政治は代々唯一の目的を指して益々其の勢力を擴張したるか如く見えたり。而かも日本の實驗に試みらるゝや、此謬想は殘りなく破られたり、彼の有名なる昔話に、或王が衣服を着せずして人民の間を乘り廻せるに追從なる人民等は皆皇帝の衣服の美なるを贊賞せり、然るに道に一小兒あり、突然叫んで曰く「王はなぜ衣服を着せざるか」と、此言葉を聞いて人民一同眼を開いて始めて王の裸體なるを見たりといふ話あり、露國の外交も又之と相似たるものあり、何人も之を疑はざる故强大なりと思惟せられしのみ、而かも一度其實力を問ふものあれば全く砂上の家に等しきことがあらはれたり、歐洲の諸國が久しく彼の眞相を知らず、偏へに迷妄の中に彼の聲名を畏怖したりしは實に奇怪なりといはざるべからず、吾人にとつて第一の教訓は實に軍事的外交を以て成功せんとする時代の過ぎ去りたること之れなり。



WHICH WAY, CZAR?
—Westerman in *The Ohio State Journal.*

又顧て露國の陸海軍の如何を見ん、一年以前彼は世界に於て第二或は第三の陸軍を有し最も科學的なる訓練と最も新式なる武器とを有するも

のとせられたり、彼は武斷國なるを以て一日戰あらんか、全國の兵皆命に従て動くものと信ぜられたり、彼は敵よりも多數の兵を有し、敵よりも數多くして質優れる砲銃を有したり、而して其富は敵より遙かに優れるを以て假令六千哩の遠きに出兵するも容易に敵を屈伏し得べしと信じたり、且つ旅順の要塞には前古未曾有の城壁を作りて難攻不拔と稱したり。又之を海軍に見るも日本より優勢にして且つ之を增加すべき無限の勢力を有したり、且つ露國は數次戰爭をなしたる經驗國にして日本は僅かに弱き支那と戰ひたることあるのみ。然るに一年間の狀態を見れば其形勢果して如何ぞや。露國の兵は自國の優勢なるを恃みて奮戰し、其將卒亦名將に乏しからずと雖も、露國艦隊は殆んど全滅の悲運に沈み、日本は全く海上の權力を占有せり、而して第二バルチック艦隊の運命は未だ推することは能はざるも之れ又殊功を奏すべしとは思はれず、難攻不拔の城は已に決死の突激によりて開城せられ、朝鮮は全く日本人の手中に落ち、滿洲軍は一歩〱退却をなし、日本人を海岸まで擊退することは到底望なきに至りたり、露國は現今尙一大勢力たるに相違なきも又昔日の威信なく、日本は科學、智力、愛國心及び不屈の精神によりて非常なる成功を贏ち得たり、單なる物質的文明は一種の影法師の如く、眞の活動は全く精神的の訓練に待たざるべからざることが證明せられたり。

又露國內部の國情に就ても一年前の觀念は全く其の根底より覆されたり、露國人民は皇帝の威信に服して忠勇なるべく見えしに事實は全く之に反し、露兵は其働くこと花々しきも器械の如く、常に國を思ふよりも身を思ひ家を懷ふの念の盛なるを見るなり、若し露國民にして眞に忠勇ならばかゝる時國の爲めに振つて身命を抛つべきに、さはなくて却て戰を嫌忌するが如くに見ゆ、露國にて戰爭をなしつゝあるものは國民にあらずして政府なり。かるが故に國民は漸く戰爭の無意義にして厭ふべきを覺え、政府に對して益々反抗の氣を高めつゝあり、各洲に於ける同盟罷工、聖彼得都の虐殺、教育ある人士の請願等續々としてあらはるゝ以ても彼の國情を見るべきにあらずや、兎に角極東に於ける一年間の戰亂は世界の大勢の上に大いなる影響を及ぼしたるものといふべく、識者の熟考を要すべきものたる素より論なきなり。

佛國漸く露國を疎んず

「倫敦タイムス」

聖彼得堡に於ける學生集會の運動が佛國民を驚かしたること彼の莫斯科に於ける慘劇よりも甚しきものあり、ツアールの肖像を破壞し、激烈なる決議を發同し、革命的運動に取掛らんとすといふ佛國新聞の通信は眞に佛國民として深く驚愕せしむべき事件たり、佛國民が他國よりも一層深く驚愕する所以のもの彼等の祖先が之と相似たる經歷を有したるが爲めのみならず又露國の國情如何は直ちに彼の財政上の利害に影響すること極めて多大なるべければなり、露佛同盟に關しては如何なる贔負目を以て見る人と雖も近來甚だしく其勢力を弱めたることは蔽ふべからざる事實なり、此同盟は再び最初の勢力に服すべき論なかるべしと雖も、そは少くとも一世紀の四分一を經たる後ならざるべからず、今後露國は此同盟の利益を蒙ること極めて少かるべく、暫し殆んど孤立の姿に陷らざるべからざるべし。

總ての思慮ある佛國人は皆如何なる事情あるも兵馬を貸して滿洲軍を助けざることに一致するが如し、而して前述の學生會合は益々佛國民の警醒を促がし、下等なる勞働者に至るまで、皆露國の戰に敗れたるを知り、此戰爭は實に厭はしく嫌はしきものなることを認めたり。

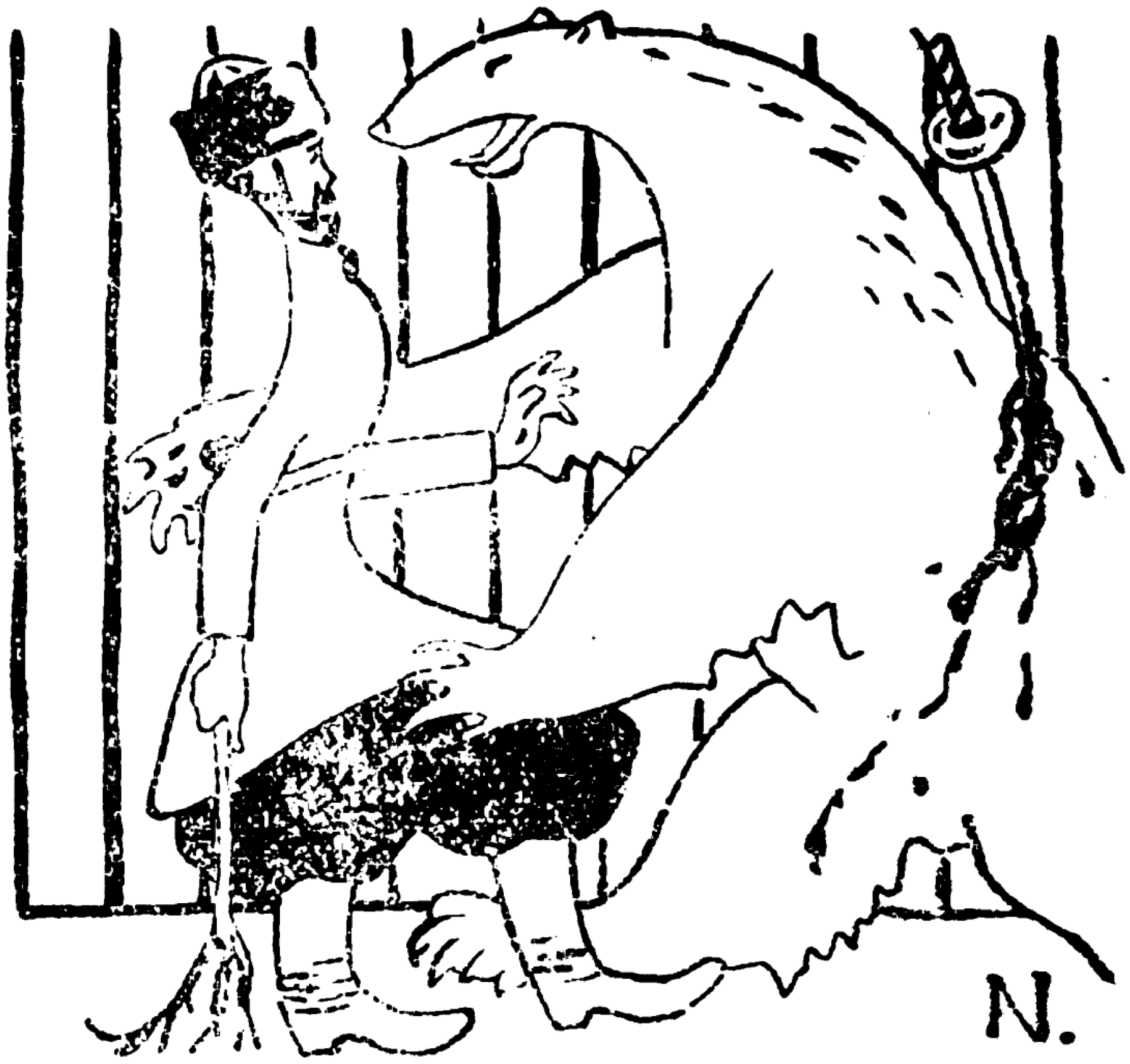
開戰前に當りて佛國人は他の諸外國人と等しく露國の内情に就て多く知る所なかりしなり、然れ共一旦戰爭の開始せられてより露國の形勢日に非なるにより少しく不安の念を抱きつゝありし彼等は近來に至り益々露國の國情を明かにするにつれ、未來に對する懸念實に甚しくなりたるが如し、佛國の露國を疎ずること之より漸く甚しからんとする毫も疑を容れざるなり。

ウヰッテ氏と露政府

「デーリー、メール」

露國新任内務大臣が就職するや、直ちにウヰッテ氏の家宅を捜索せしめたりといふ通知は實に重大なる意義を含める問題なりといはざるべからず。これ即ち新任内務大臣がウヰッテ氏を以て革命黨員に同情を表し露政府に對して奸計を廻しつゝあるにあらずやとの疑を抱きたるが故にして、この事は獨り新内務大臣のみならず、多數の露國官吏の疑ひつゝありし所なり。

露國の内情を知れるものはウヰッテ氏が現今露國の最有力なる人物なることは何人も一致する所なり、然れども彼は不幸にしてツアールに嫌はれ、而かも那翁のフーゼを見たるが如く、何事にも干渉して奸計を廻らすものと思惟せられつゝあり、彼は全力を以て今回の戰爭に反對し、日本の正當なる要求を拒絶することの如何ばかり不幸なる結果を來すべきかを極言せり、而して彼の意見は將さに用ひられんとし、一時露國が滿洲を放棄し、旅順までの鐵道を支那に渡すべしとの風説まで起りし程なりしなり、故に今露國人が彼の意見の用ひられざりしを悔恨するもの多く怪しむに足らざるなり。



Wounded Russian Bear (to the Czar): "How would you prefer to be eaten?"

—*Rire* (Paris).

ウヰッテ氏と露政府との相反目しつゝあるは今日の場合重大なる意義を有するものなり、聖彼得堡に於て老幼男女の不安、又は他の大都及び波蘭の市都に於ける人民は皆貪慾にして短見なる大侯等の措置を嫌忌し、露國の不幸なる源は此大侯等にありとなすもの丶如し、同盟罷工は一時勢を潜めたりしが如きも又激發して騷擾を極め、ペテロフ砲兵工廠に於ける職工は露軍に向て砲彈を放ち、彈藥製造所なるテンテレフ工場に於ても再び非常の不安を起したり。莫斯科人民の激抗は益々甚しく、波蘭は終始動搖して武器さへあれば大亂に至らんとするの形勢なり。政府

の壓制威嚇は到底其功を奏せず、益々反抗の勢を盛にするに過ぎざる也。

露國内部の勢斯の如きのみならず、外にあるの將卒も又甚だ不安の念を抱きつゝあり、クロパトキン將軍は已に政府の信用を失へたり、彼は多くを約束して何事をも成功せざる人を以て呪はれたり。然れども内實に立ち入りて之を見れば如何なる將軍と雖も彼れ以上のことを行ふことは到底不可能のことなるべし、彼は敷に於て優りたるのみならず、多くの名將と白旗を揭ぐるよりは寧ろ死を選ぶ所の兵士より成れる日本軍に向ふの難役に當りつゝあり、日本兵は自國の自由獨立の爲めには眼中自己の生命なきなり、世界歴史あつてより以來未だ彼が如き勇敢決心を以て戰ひたるものなし「信仰はあらゆるものに勝つ」これ實に昨年來日本兵の連勝したる所以なり。

近來英米の間に於て日露の平和問題は頻りに噂されつゝあるが如し、然れども日本が提出する條件にして滿足せられざる限りは日本は決して之を肯ぜざるべきなり。日本は今后極東に於て露國と戰端を開かざるに足る條件に非ざれば平和を締結する者に非ず、然れ共露國側より之れを見る、日本とかゝる平和條約を締結するこれ極東に於ける露國の降服を意味するものなり、今日迄露國の有せし威信を失墜せしむるものなり、而して一層恐るべきは露國人民に向て立憲代議政体の專政獨裁政治に隠ることを知らしむるものたり、ひとり露國政策の打擊のみならず、露國政府の危殆を來すものなり、これ露國が容易に此條件に一致せざるべき所以なり、ウヰッテ氏と露政府とが今後如何なる關係に立つべきやは實に露國の一大問題なりといはざるべからず。

捕縛せられたる露國婦人の書簡

「デーリー、ミルロア」

自由なる國に住み給ふ自由なる御婦人達に申上候、我等露國婦人にとりては生くるといふ單なる事實のいかばかり難きかをお知らせ申したしと存じ候。

諸外國に於ては婦人達は民事又は政治上の權利を求め居り候、彼等は男子の壓制を免れ、男子と同等の地位に身を置かんものと勤めつゝあり候、而して其等の國の男子は勿論皆政治上自由の權利を有し居り候。我等の國に於ては男子も女子と同じく奴隸同樣の有樣に候、夫れ故我等婦人は婦人の權利を求むるよりも！己れの權利を求むるよりも―先づ人間の權利、個人の權利を求めざるべからず候、我等露國人には眞の自由なるもの決して御座なく候、故に先づ國をして自由ならしめ、幸福ならしめんとするは男子と同じく我等婦人の希望に御座候、

露國の政治的運動にて婦人の加入せざるもの是迄一つも無之候、露國の自由運動に於て婦人は常に其大部分に與かり候、或は牢獄に、或は地役に、或は西比利亞に、或は流罪に、生命を捧げて人道の爲めに露さんとしたる婦人の運命は男子と同一に御座候。

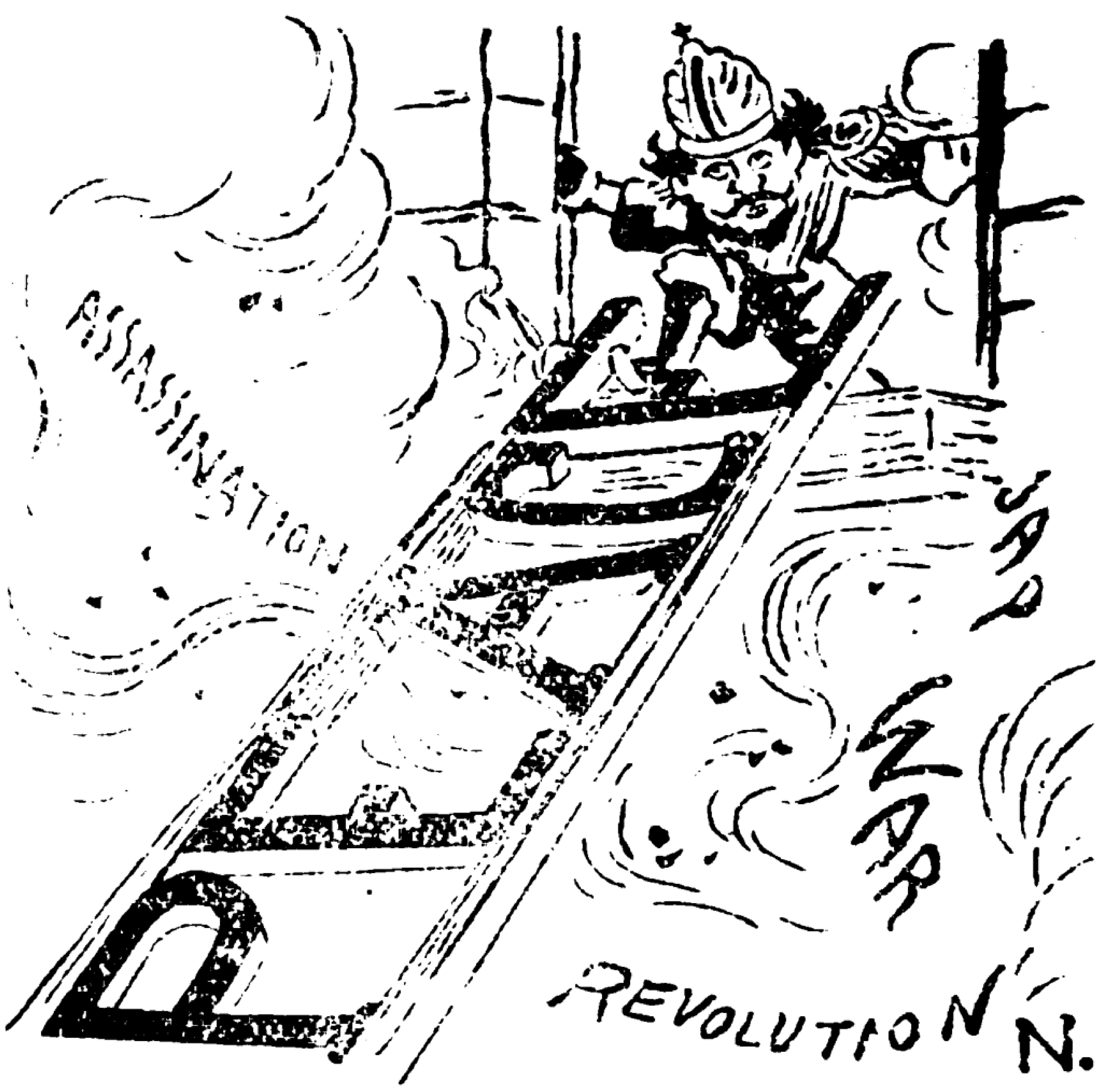
勿論かゝる企てを起す婦人は中等教育を受けたるものに最も多く御座候、而して殊に自由の職業、即ち醫者、教師、などを致せしものに多く、最も多きは文學的階級に属するものに御座候。露國の文學的事業に渉り居り候ものは殆ど全く自由派の人なりと稱して宜しかるべしと存じ候、

夫れ故に政府に恐れられ、常に迫害と壓制を受け居り候、少しの過失あれば直ちに牢獄に投ぜられ、又た平時にて、政府の探偵が附き纏ひ居り候。

文學者は夜に於て寢室に入るときは明朝まで安かに寢室の中にあり得るや否や甚だ疑問に御座候、何となれば夜中に警吏が家宅に侵入し戸を破り、彼を起し、彼を捉へ、家族の懸痛心配をかまはず、彼を牢屋に引き行くこと珍らしからざればに候、

婦人と雖も毫も男子と異ることなく候、其一例として妾の身に起りし事を皆樣に申し上べく候、然し妾の場合の如きことも決して珍らしきと申す事には無之、かゝる事は日々限りなく起る事柄のたゞ一つなりと御承知下され度候。

一月二十二日の血腥き騷動ありし僅かに五日後の事に御座候、朝の五時頃に警吏は妾の部屋に入り來り候、他の國に於ては警吏の來るは法律の名に於て致し候へ共我國に於てはよい加減の口實を設けて偽りて家宅に入り來り候、下女は何事も知り申さず候へば何氣なく戸を開き候ものと見え、十二人の男が家に入り込み、直ちに妾の部屋に入り來り候、妾は幼き娘と共に眠り居り候へしが、其音に寢覺め候處、巡査二人枕元に立ち居り候へば、妾は巡査の前にて衣服を身に着け申候。



ABOUT THE ONLY WAY LEFT.
—Morgan in the Philadelphia *Inquirer*.

憲兵の大佐が妾のポケットを捜索すべきことを命じ、且つ室内に於けるあらゆるものをほじくり出し候、彼は妾の机を開き、私書までも讀み、寫眞を改め、本を開き、衣服簞笥まで開き申候。妾も娘も無言にして此恐ろしき亂暴を注視致し居り候處、巡査は其汚き手もて、我等の大切なる大事に致しおき候ものに容赦もなく觸れ申候。

我等は力なければ逆はずじつとして居り候、彼等の目より視れば我等は罪人と見え申候、其譯は我等は奴隷たるを願はず、我國の自由にして幸福ならんことを祈りしが故に御座候。

五時間の間あらゆる捜索を續け候、我等は捕縛せられ候、世間が少し矢釜しく相成候へばかゝることは極めて有り勝ちの事に候、我等は友人又は知己のかゝる目に合ひ候といくらも實見致候へば己れの身に起り候とて格別驚きも致さず候、露西亞の少し上流にありて少しく物の理屈にてもわかり候へば皆なかゝる目に合ひ候。

教育ある社會が自由の運動を起せしことは久しき以前よりの事にて又其數も極めて多く候へしも何れもいろ〳〵の障礙の爲めに其功を奏せず、其効果は極めて微々たるものに有之候へし。されど今回は勞働者も少からず動かされ候趣に候へば我等の望む方向に數歩を進むべきは疑なきことに候、それを以てせめてもの心遣りとして慰め居るべく候。あら〳〵かしこ。

イー、ヒメノフより。

日本の學生を評す

「リテラリー、ダイセスト誌」

七年間東京大學の教師たりし佛人リーフォン氏は日本の學生を評して非常に勤勉にして餘り過度なるに失せずやと思はるゝ程なりといへり、今彼の意見の大要を紹介せんに

「日本の學生の勤勉なる、若し燈火のなき時は螢籠の光にて書を讀まんとする程なり、彼は教師の口より耳を放たず、熱心に其いふ所を筆記し且つ講義の後澤山の質問を試むるなり、彼には勉强せよと勸むるよりは寧ろジョンソンがいへる如く少し暢氣となれといはんことを要するなり、リーフォンの學生の一人は狂人となり、又病死せるもの數人なるが之れ皆過度の勉强によりてなり、種々なる體育運動の方法は大學內に設けられありといへども、過度の勉强は日本學生をして早老せしめ病氣勝のものとならしめつゝあり。過度の壓抑は幼時より始まりて學校を卒はるまで長く繼續せり、大學に入る前、中等教育を終り、高等學校に入り三四年の年月、三四の外國語を學び、又後來專問に入るに必要なる各學科とを合せ學び、然る後大學に入らざるべからず、學科の多くして年限の長きが爲めに日本の學生は概して歐米の學生よりも年長なり、彼等の多くは結婚し又長くの子女を有せり、彼等は熱心にして教師も又親切なれば學問上の進步は速かなり、師弟の間の禮義は厚くして其交際も密なり、日本の子弟は幼時より「父母を視ること天地の如く、君師を視ること日月の如し」といふ諺を教へられたり、而して此感情は又「氏より育ち」即ち「教育は門閥に勝る」といふ俗諺と相待ちて日本學生の精神を陶治したるものなり、日本學生の行儀よくして勤勉なる謂ありといふべし。

文士初對面錄（その十一）　天中天

▲泉鏡花氏（ノ一）　僕は今迄鏡花の逸話だといつて聞いて居たは、其作物を讀んで感ずると仝一の、恰も一種異様の性格の、早くいへば狂人染みた、此世の人とは思へない戀人のやうて、人に話しかけられても空嘯いて居るか、又は調子外づれの答でもするやうな男に相違ないと考へられたが、扨逢つ見ると聞いたり思つたりしたのとは全て反對、如才がなくて、ハキ〳〵として、常識の非常に發達した快男子、而も僕は其家の門前まで行つたときは、想像に違はぬ人だなと、思ひ當るやうに覺えたといふのは、場所が神樂阪の中腹て、家の搆へがオツに出來、軒に吊られた瓦斯燈が、ぶらりと下つて竪の横廣て四角なのに、それにゴシック風の崩した字て泉とある擅梅式が、どう見てもたゞ者の好みてない、その上に案内を乞ふと庭の方に細君の姿がちらりとして、グッと碎けた美人と來て居るので、最早自分の想像を疑ぐる餘地がない、然り而るに其人に接すれば、案外々々又案外てあるのには實に案外だ（ツヾク）

雜錄

土俗雜話（一）

理學博士　坪井正五郎

○理科大學人類學教室附屬標本陳列場の一部には內外諸種族の風俗を示す物品が置いて有る。曾て多數の人を一度に案内してそれ此れと說明を試みた事が有りましたが中央公論記者某氏も來觀者中に居られ、後に至つて彼の時の話しを個條書きの樣に爲て貰ひ度い、公論の讀者にも斯かる事に趣味を有する人が有らうと思ふから其儘之を誌上に揭げる事と爲よう、どうか執筆を賴むと望まれました。此所に記す所は卽ち主として當時の事を思ひ出しての記述て有りますが多少の增減は有るものと御承知を願ひます。（揷畫と對照すべし）

○第一室に在るのは北海道現住アイヌ種族の使用品。先づ服飾の事から申しませう。アイヌは男女共帽子笠の類を用ゐませんが、髮の毛の亂れるのを防ぐ爲めに鉢卷き樣の物を頭に纏ふ事は有ります。元來自製のアツシと稱する布で作つたのですが今では內地人から得る手拭を使ふ事が少く有りません。眞中を額に當て兩端を後て結ぶのです。何か儀式に臨むとか貴人の前に出るとか云ふ樣な場合に男子は特別の鉢卷を用ゐます。心(しん)は藤蔓の類を編んで作つて有つて、頭を取り卷いて餘りの部は兩側から後の方に突き出た樣に成つて居る。此輪の外側にはミヅキ或はヤナギを削つて作つた細い鉋屑樣のものを澤山束ねて結び着け後の方は苞の葉の餘りの樣に出た儘に爲て有る。額に當たる所卽ち輪の前の部の眞中には木彫りの熊の全身或は熊の頭の形が付けて有り、時としては被る者の頭の兩側に當る所には小さい布切れや總(ふさ)が下げて有る。此鉢卷きをアイヌ語ではサパウンベと申しますが、之を直譯すると「髮の物」と成る。卽ち被り物の意で有ります。削り掛けは神を祭る時の必要品で丁度內地で行はれる御幣に相當する物で有りますから夫れと同形のものを鉢卷きに結び着けるのは其物の貴さを增すと云ふ趣意で有りませう。熊の全形や熊の頭の形を飾とするものも熊を靈獸とするに基くので、詰まり、頭に戴く物を神

埀にする爲たる事疑ひ有ません。鉋屑樣の物が削り掛けと同樣てあるとすれば、木刻りの飾りの所は削り掛けの頭部に當たる。或は熊の形は後の發達て元は簡單な捧の端て有つたらうかと思はれる。

○婦人は髮飾りを持たないが、頸と胸とを飾る事は有る。頸飾りはレクッンペと云つて、子供の腹懸けの紐の樣な物て前から回はして後て結ぶ。原料としては多く内地人から得た紺木綿を用ゐ、眞中の所即ち喉に當つて襟の間から見える部には鉛て作つた丸い飾りや内地人から得た瀬戸物の白ボタン抔を幾つも並べて着けて置く。鉛の飾りは何れも自製て、之を作るには木片にマキリと云ふ小刀て隨意の形を刻みて其所に鉛を熔かし込むのて有ります。中には只鉛の玉を結び着けたのも有ります。白ボタンを實用に供せずに、否、實用に供する事を知らずに、樣々の裝飾に用ゐると云ふ事は他の未開種族の間にも行はれて居ます。異地方の物を用ゐるに當つて其用途を變ずると云ふは間々見る所て土俗調査上甚だ面白い事て有りますがレクッンペの飾りに白ボタンを用ゐるのも其一例て有ります。

○婦人の胸飾りは通常シトキと申します。レクッンペは平常着ける物て有りますがシトキは盛粧と云ふ樣な場合にのみ用ゐるので有ります。全體大きな數珠の樣な形てガラスの玉や瀬戸物の玉を連ね下の端に何か平たい圓い物を付ける。金屬製の鏡が最も貴いとして有るのですが、多く有るのは刀の鍔、椀の蓋抔て有ります。椀の蓋は固より椀の蓋其儘ては飾りと認め兼ねますが、摘みを削り取つて其部を平坦にし眞鍮或はブリキて作つた一錢銅貨又は二錢銅貨位の圓盤を數個、梅鉢とか九曜とか云ふ樣な形に嵌め込んで裝飾に變ずるのて有ります。是亦用途變更の例中に算ふべきものて有ります。シトキを頸から懸けると鍔なり椀の蓋なりが腹の邊に來る。多く所有する者は一度に二つも三つも懸ける。扨紐に貫いて有る玉は何所の物かと云ふに決してアイヌの自製では無く、内地人から得たり大陸方面から轉々して手に入れたりしたので有ります。青色の玉にカラフト玉の名の有るのは、其の地方から來たと云ふまでの事て其所で作つたと云ぶのでは有りません。玉に混じて錢が繋いて有る事が往々有りますが、これは、元アイヌ間に錢が通用しなかつたので、偶ま内地人からでも之を貰へば他に遣ひ途が無いので裝飾に利用したので有ります。之に反してアイヌは或る事の報酬としてシトキの玉を人に與へる事が有る。

錢が裝飾に用ゐられ、玉が貨幣の用を辨ずる。此事實は交換媒介の發達を說くに當つて大に參考と成ると思ひます。

高等學校入學受驗者に對する注意

高等學校の入學試驗は今の學生諸君の最も苦しむ處である、或は及第者よりも落第者の方が學力のあるものがあるやうな事も珍らしくない、それはつまり試驗が下手てあつたり、試驗準備に無駄骨を折つたりする結果て甚だ氣の毒に堪へぬものがある、そこで記者は其人々の爲めに玆に第一高等學校の各主任敎師に乞ふて 高等學校入學志願者の心得となるべきことを話して貰つた、入學試驗は獨り高等學校のみでない、同じ程度ては高等商業だとか 高等工業だとか、其他澤山ある、心得となるべき事は又何處の學校へ入るのにも同じてあるから、各學校の入學志願者は之を一讀して試驗の準備をするやうにしたまへ、各科目に亘つて悉く意見を聞かうと思つたが、何れの科目ても心得となるべき事は大差はないので、先づ英語と國語と數學とだけにした、此談話の責任は全部記者にあることは申すまでもない。



○外國語

畔柳都太郎氏

△英語で注意すべき事を二三ケ條擧げて見ましやう。第一今の學生は單語の數を知ることが少い、ヴオキヤブラリーが足りないのですね、御存じの通り日本の英學は今日迄三期に分

人の餘德は國民が永く忘れることが出來ない、是がために日本が一新した、それならば此戰に依つて日本が稍々平等の位地を國民に與へ新局面を啓いてさうして新社會を現出するに至つた維新後の形勢はどうであつたかと云ひますと難に直接に當つた人が損害を受けて殘り留つた人が餘德を受けた、併しながら歷史上、亂に依りて何時でも買つたる犧牲と云ふものがあとで善く用ゐられたか用ゐられないかと云ふことを考へて見ると或る場合には躊んで用ゐられ或る場合には濫用せられたと云ふことが維新以後の形勢に徵して見ることが出來る、二十七八年も其通りて、二十七八年に日本の勢力が伸びまして日本は大なる利益を此亂に依りて得た、此亂に依りて日本の富を消費しましたけれども此亂に依つて又富を回復して尙餘りある日本の活動が生じましたから日本の經濟上にも二十七八年以後は餘程發達が多かつた、其以後の政治と云ふものは制限するには議會を以てすべき時代であつて最早形に於て立憲政體は成つて居りましたけれども、此立憲政體が無くしても、當時にあつて立憲政體を維持する民間の力がまた薄弱を免かれぬがために年を積んで根據の座つた政府と新に起つて其勢力の未だ確定しないところの議會との權衡が取れぬために二十七八年の政治の平均は議會を以て政府の謹愼を維持することが出來ずして放縱に流れたと云ふことがあると云ふやうな譯でございますから是等を考へて見ると今回愈々露國に勝つて日本の勢力が世界に擴がつた後の日本國は如何であるかと云へば、日本國民が警戒をして前に私が述べました如く難に當つて倒れたる人の艱難を殘つたる國民が一刻も忘れずして同じく此難に倒れた如くの覺悟警戒を加へなければならぬ。然らざれば此勢力を用ゐるところの保證が附かぬと思ふ今日に於て戰後の經營は寧ろ之を事柄に求めんよりは、又之を制度に求めんよりは

日本國民の覺悟と道德

の位地を高めて物質の力を適當に用ゆる見据を附けねばならぬと思ふのである、先つ戰後の改革を論ずる時には人の心に立入つて議論をしなければ本統の議論を立ることは出來ないと思つて居りますから前以て概論として此の如く述べた、然らば今回の戰に於てどう云ふ關係で日本が此の如く滿足なる結果を得んとするに近いたかと云ふことを考へて見ますと是はいろ〱な關係で、詰り文明の機關の備つて居る國と文明の機

闘のまだ備らずして調子の揃はぬ國との爭で、調子の揃ふた國が勝利を占めたと說明して宜からうと思ふて居ります、例へば無學の露人は戰の意味を理解もせず唯だ號令が然らしむるので戰に從事する、物事を辨へた人は此戰は國家必要の戰でないと云ふとが分りますから戰に向て不平がある、敎育のある不平の人と、戰に向つて何の意識もない無學の者とを滿洲の野に移して日本國民と戰はしめたのが露國の敗れた原因であると思ふ、日本はどうであるかと云へば津々浦々の僻村の人までも今回の戰の意味は理解せざる者なしと說明して宜からうと思ふ、婦人も又之を理解し小兒も又之を理解し、村の內より軍人が出ました時には其同鄕の人が是に同情を表して兵になるのを祝すると云つて後ろに立つて此人々の戰に赴くのを勇ましく見送ると云ふ此形勢が日本國家の露國に勝つ根底であつて前に申しました通り日本國民は自衛のため國の安寧のために同胞に代つて此職務に從事すると理解して戰に赴くのであつて、無論人情として此危險に近くのは好む譯でもなく、又人情としても親族を危險な地に送ると云ふとは悲く思はぬでもなけれども、是より大きな道德が尙ほ存するために國民全體のために、爲さねばならぬ代人の義務を務めるのであると云ふ此意味が胸中に滿ちて居りまして此意味を理解して鄕黨朋友に送られ親族に送られて此戰場に赴く、斯う云ふ軍人と戰の何事たるをも知らずして唯だ命令のために赴く此露軍と戰つて日本國民が機械的並に形而下のいろ／＼の不利を算用に入れずして此精神に於ての比較に於ていろ／＼な不足を補ひ得て尙餘りあると云ふことが日本の勝つ所以である露國の敗るゝ所以であると理解して宜からうと思ふ、然らば如何にして日本國民が此一致を得此理解を得たかと申しますといろ／＼理由があつて文明の調子の整ふて居る國と言つたのは是であつて日本の文明日尙淺しと雖もそれだけに至つたのは御同樣大慶であると思ひます、唯だ是は無形の仕事と云へば餘り漠然に過ぎますから私は之を形の上に現はしたるところの箇條に依つて說明して見ますと云ふと敎育の上に我國が勝つて居る、徵兵制度の上に我國が勝つたのであつて、並に憲法の實施國會開設に依りて我國が勝つたと斯う私は

三箇條

を許して居るので、徵兵制度に依る、敎育制度に依

る、並に自由制度に依る、此三つが國民をして戰の何たることを理解せしめたものである、若しも徴兵の制度が無くして昔の如く武士以上の者が國の安危を請負ふと云ふ封建制度であつて國民は一向國事に與らぬと云ふ昔の組織であつたならば戰と云ふものは士以上のものであつて決して國民は深い關係を持たず同情を表するの機會はなかつたらうと思ひます、私は維新以前の樣子を幼年の時に見ましたのでございますが、生蕃の騷動があつて英國の人が怒つて江戸灣を砲擊する、何日迄に此事を片附けて呉れなければ江戸灣を砲擊すると手詰め掛合をしました時に舊江戸即ち今日の東京の有樣はどうであるかと云ふと皆な荷物を片附けて近在へ逃げて丁度今日他國の人民が支那に參りますと支那の人民は危險を冒して商賣氣ある者は品物を敵軍に賣る商賣氣のない弱い人は自分が家族と共に荷物を片附けて逃げるのが今日の有樣、日本はまさかに敵軍に品物を賣ると云ふ程の日本國民ではなかつたけれども、荷物を片附けて近在へ逃込んだ、其國民が變じて今日は徴兵の制度の下に國の護衛をする、殘らず國の安寧を委任することになりましたのは一方には全體に兵隊の權利を與へて國は民と共に守ると云ふ精神が洽くなつたのと、是と同時にそれをするのは一般の人の義務であつて丁年に達すれば此職分を執ると云ふ徴兵令が詰り國民を改造したのである、斯う見ますと今回露國に勝つたのは徴兵令の勝利であると思ひます、併ながら唯だ徴兵令を布いたところが決してそれだけで國民に戰の意味を理解せしむることにはいかない、戰を理解せしむるのは智惠の働きであるから普通敎育に依つてあらゆる人が皆な同じ敎育の利益を或る程度まで受ける、其制度が國民をして此事理を悟らしめる根底となつたと私は思ふ、昔の敎育制度に依りましては藩で學校を建てましても或は將軍が學校を建てましても或は公卿の間に學校が出來ましても皆な階級に依りて學校に這入る特權を與へたのでありますから、一般の國民は敎育の利益を受ることが出來なかつた、出來なかつたのみならず敎育を受けてそれを活用するところの四民平等の社會でなかつたから道樂に詩を作り文を作る者がありましたけれども一般の國民の人格を養ふために敎育を受けなければならぬと云ふところの心が國民に無かた、(次號完結)

(文責在記者)

▲中村進午氏の論文は紙面の都合により次號に掲載することゝせり



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と精力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず。

平和條件と日本の要求

「サー、チャールス、ヂルク氏」

極東に於ける戰爭の終結は、今後幾何の歳月を要すべきかは今茲に之を論ぜず、又之を論ずること能はざるを以て、假りに今日に於て日本が平和を締結すべきものとせば如何なる要求をなすべきかを見、之に向て些か論評の鋒を加へんと欲す。

吾人は先づ日本が開戰前朝鮮及び滿洲に就て露國に向て要求したる事の何なりしかを問ふの必要あり、勿論其際に於ける日本の要求は現今に於ては彼の最少(ミニマム)なる要求となりしならん、而かも兎に角其際彼の主張したるものは朝鮮に於ける日本の特別なる利權を認めしめ、其の代りとして滿洲に於ける鐵道に向て露國の特別なる利益を認むるといふにありき、而かも露都に於ける栗野公使に向て日本政府の發したる電報は全く此申込を破却したり、電文に曰く「露國が無條件にして永久滿洲鐵道を有するは日本の安全と利益とを害するものたり、これ權力の平均を破り、支那の獨立を危くするものなり」と、然れども日本政府にとりて之よりも重大なることあり、若し露國を朝鮮の横側にあらしめば是れ實に日本の第一の敵にして、少くも朝鮮をして露國の手に落ちるに至らしむべし、朝鮮は日本の防備上に於ける最重の地なり、日本は朝鮮の獨立を以て全く自國の安危の繫る所なりと信ずるものなり、日本は到底朝鮮内に他の勢力を附植せしめ、又朝鮮を强迫するを許し能はざるなり、これ故に朝鮮問題は日本要求の第一に來るものなり。

然れども此等の要求を外にして日本が戰後施行すべき根本政策の如何なるべきを考ふるは實に重大なることなりといはざるべからず、茲に彼がとらんとする三つの方針あり、第一は所謂亞細亞の指導者と稱すべき政策にして直接に支那を管轄指導する勢力を得んとすることなり、日本が果して支那を管轄する程の實力ありや是れ第一の疑問なり、第二日本は露西亞と協同して支那を管理すべや、協同して管理すとは日露同盟との謂にあらず、世或は日露同盟を唱へ、日英同盟を破りて日露同盟を結ぶの利なるを説くものありと雖も、之れ思はざるの甚しきものゝみ、かゝる人は恐らく日本の海軍力について一考だも費やせしことなきなるべし、日本の海軍は露國海軍と合併するも決して英國の海軍に當るの力なし、而して日本の如き島國は其國防全く海軍力によるべくして、若し海軍の敗れたる曉は國の獨立得て保つべからざるは少しく思慮あるものゝ認むる所なり、然れども日露協議して支那を管理することが必ず日露同盟を來たし、日露同盟が必ず又他國と戰爭を來すべしとの意にはあらず、

兩國協議して支那問題を議するも恐らく、商業上或る特別なる利益を得るといふことに止るべきなり。

然れども露國と協議して斯る事業に着手するは恐らく日本の不利益なるべし、何となれば若し露國政府にして鞏固且つ安全ならば必ずしも不可なりとせざるも露國の國勢を見れば其變動未だ容易に察すべからず、若し一旦露國にして益々否運に陥るが如きことあらんか、日本は遂に孤立援なきに至り、臍を噬むも益なかるべし、第三の政策は戰略の意味を含めるものにして、日本の亞細亞に於て眞に要求し、必要とする所の何なるかにあり、彼は前述の如く朝鮮を保持し、其方面に向て發展を試みんと望みつゝあり、されど朝鮮を保持するには必らず朝鮮と腹背相接する滿洲に他國民を置くべからざること明かなり、故に彼れ若し平和の條件を提出せんか、其他の項目を後廻はしとするも先づ滿洲に於ける露國人を成るべき丈け退けざるべからず、若し此事にして成就せんか、鐵道の所有、旅順租借、土地の讓有等亦いふに足らざるなり。



THE RUSSIAN BEGINNING.
—*Floh* (Vienna)

平和問題を議するにあたりては日本人は全く感情を郤けざる可らず、旅順は日本が多大の犠牲を拂へたる所、感情上より之を見る彼等の之を保持せんと欲するは無理ならぬことなり、然れども感情上より離れて之を見る、若し滿洲より來るべき敵なければ旅順は軍港として日本に何の必要ありや、その保有は日本にとつて却て費用を要する厄介物なりといはざるべからず、かるが故に日本の政治家にして感情に支配せられずんば我等はたゞ滿洲の中立を主張し、未來決して敵の侵すなからんことを保證し、成るべく露國をして黒龍江の舊領に復歸せしむることを以て平和の第一要件となすべきことを主張するものなり。(譯者曰く成程英國には最も好都合の條件なり）

されど平和條約は畢竟賣る人と買ふ人なり、日本利あれば露國損あり、露國が果してかゝる條件に服すべきや否やは頗る疑はしけれども、之をなすも其損害は想像する程大いなるものにはあらじ、何となれば滿洲は露國にとりて必須の地にあらず或政治家は商業上露國の利益となること極めて少しと斷言せり、露國の巨大なる資本が此地に埋められたるとは事實なり、鐵道の費用凡そ二億七千ルーブルにして其他の費用五億ルーブルなりといひ傳へらる、而して其費用は概ね支那人の懷中を肥やせり、

露國はかく滿洲に資金を投ぜりと雖も事實に於て同じく支那人の滿洲なりき、今日まで其處に移住せる者ゝ多くは支那人なり、露國人にあらず、露國人は若し此處に移住するも久しからずして他に轉ずるなり、黄色人種百万以上にして而して益々增加しつゝあり、若し露國平和條件として此地を捨て去るも事實に於ては經濟上何等の影響なかるべし、

露國にとりては政治上の犧牲！、日本にとりては經濟上の利益と、政治上の安全！然らばこれ滿洲の中立によりて定めらるべき平和條件なるべきか、然れども今後若し戰爭繼續せば如何なるべき。

日本の連勝にして今日の儘にて進行し、太西洋岸全く露人の影を見ざるに至れば樺太の讓與、漁業の獨占、浦鹽斯德の占有等起るへき問題なりと雖もこは今日の平和條件には未だ入り得べからざることといはざるべからず。

償金問題

「デーリー、ニユース」

露國が平和の克復を望み、日本の提出すべき種々なる條件を受認せんとしつゝあれども、只一つ彼が苦心しつゝあるの障礙は實に償金問題なりといふ風說は全く信ずべき價値あるが如し。げに償金問題は近世の戰爭に於て最も重大なる意義を有するに至れり。戰爭の費用は新武器及び新器械の發明と共に益々其額を增加したり、かるが故に若し一旦戰爭に敗れて償金を出さゞるべからざるに至らんか、戰敗國の負擔苦痛や益し少々ならざるなり。



IN HIS CONFIDENCE.

The Czar consults those whom he trusts as to whether he ought to give Russia a constitution.
—*Simplicissimus* (Munich).

多くの戰爭に於て、兩敵國の勝敗の數已に定まり、劣敗國の人民が戰爭の繼續を以て、空しく人命を絕ち、徒らに金錢を費やし、而かも益々己れの國運をして非ならしむることを悟り、如何なる損失を蒙るも平和の克復を希望するに至れば、玆に初めて休戰の約が結ばれ、平和の條件が提議せらるゝに至るべし。

一八一四年ナポレオンが同盟軍に敗れて捕虜とせられ、英王及び歐洲聯合軍が正統の君主を迎へて佛王の位に即かしめしとき、巴里第一條約が締結せられたり、而して此條約も他の多くの基督敎國に見るが如く聖なる神の名によつて誓はれ、歐洲の長き混亂を鎭め、人類の不幸を救ふて永久の平和を來さんが爲めと宣言せられたり。而して此條約の內容を見るに白耳義及び獨乙の方面に於て

幾干の土地を増し、一七九二年の佛國の古き國境を回復し、ゼネヴアの通商、ライン及び其他の河川の航行、マルタ、和蘭及び一部の伊太利諸州の主權、獨乙の聯合、瑞西の獨立等論議せられ、而して條約に與かりし各國民は二十年間權力を逞うせし共和の爲めに失はれたる殖民地及び地面を佛王に還附することを許容したり。英國は多く殖民地及び漁業場を佛國に還したりと雖も其代りとして西印度に於ける佛の領地を讓り受け、瑞典はグアダルーフを、葡萄牙はギアナを佛國に還附せり。然れども翌一八一五年ナポレオンがエルバ島を脱して再び兵を舉げたる時は實に歐洲一般の驚愕を惹起し、佛王は七億フラン即ち二千八百万磅を同盟國に償金として出したり。

一八四九年サルヂニアがロンバルデー、及びヴイニスを助けて墺太利に敗れたる時も同じく償金を以て其局を結びたり。

一八四二年吾人が支那と戰爭を開しや、吾人は二千弗即ち四百万磅の償金を支那に請求したるも皇帝は條約に調印せず、吾人を罵りて野蠻人は實に莫大なる費用を奪はんとするものなりとなせり。

其後クリミヤ戰爭あり、一八五六年巴里の條約ありしも此條約には一錢一厘も償金は問題とならざりしなり。

償金問題が平和問題の最大條件となりたるは實に普佛戰爭以後なりとす。一八七一年二月ヴエルサーユに於て定められたる償金の額は實に五十億フラン即ち二億磅にして世人が佛國民の一代を赤貧ならしむべしと考へたる程なりき、然るに驚くべきかな、佛は一八七三年九月五日此巨額の償金を支拂ひ、獨兵をして佛の國境より退かしめたり。

露土戰爭に於て露國は獨逸のなしゝ所に從ひ巨額の償金を土耳古に求めたり、一八七八年二月に於けるサン、ステフアノの條約に於て土耳古はモンテネグロ、セルヴイア、ルーマニアの獨立を承認し、ブルガリア及びクリートの自治權を許し、且つ左の如き露國の費用を支拂はんことを約束せざる能はざりき。

戰爭の費用……………………九億ルーブル
露國海岸の損害………………四億ルーブル
コーカサスの損害……………一億ルーブル
在土耳古の露民の損害………一千万ルーブル
合計……………………………十四億一千万ルーブル

即ち殆んど一億五千万磅なり。然れども伯林會議に於て我等は此提出に反對し、到底土耳古の負擔に堪へざるべきを抗言せり、之を以て露國は一八七九年一月二十七日コンスタンチノープルの條約に於て其償金の高を減じて八億〇二百五十万フラン即ち三千三百万磅及び土耳古に於ける露國民の損害を受取ることを以て滿足せり。然れども此償金さへ土耳古の爲めには實に非常なる苦痛にして屢々露國の苛酷なる請求に惱まされたり。

一八九四年の日清戰爭に於て支那は二十三億テール即ち三千四百五十万磅の償金を日本に出すべく、歐洲の市場に於て外債を募集せり。

北米合衆國は西班牙との戰爭に於て償金に向て最も適宜にして人道的なる例を置けり、一八九八年の平和條約に於て米國は比利賓及び其他の島を取り、西をしてキューバの獨立を承認せしめ、四千六百万磅に上るキューバ及び比利賓の負債を拂はしめたり、然れども彼は決して償金を請求せざりき、否單に請求せざりしのみならず彼は西班牙に向て其損失を償ふべく四百万磅を與へたり。

今回の日露戰爭に於て日本は普佛戰爭の如き巨額の償金を請求せざるべきは論なし。日本は如何に露國を破るとも未だ獨逸の佛蘭西に於けるが如くなること能はず、且つ今日まで日本の費せし金額は未だ五千万磅

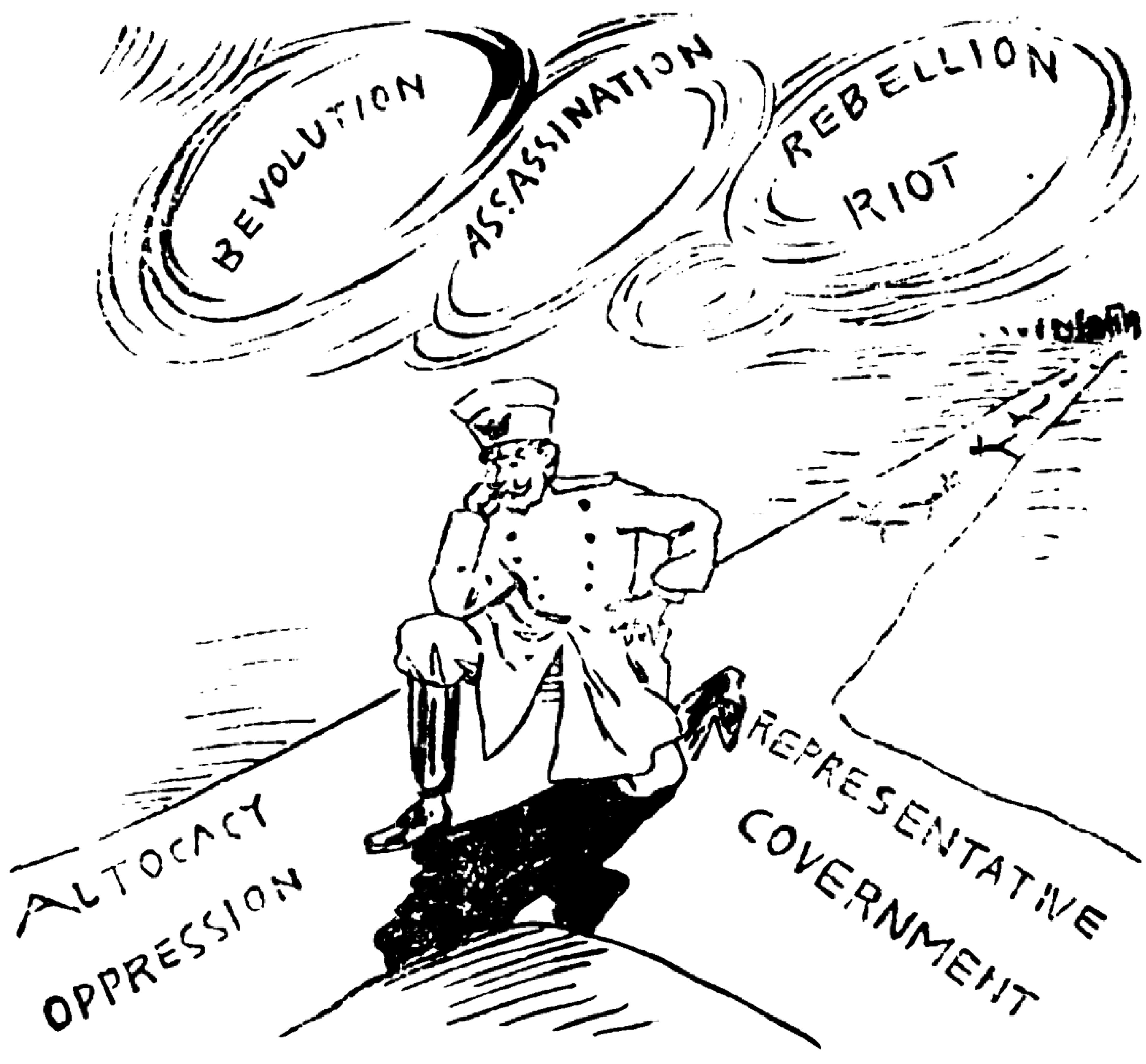
に上らざるなり。若し日本にて旅順及び遼東半島を得ば極めて適宜なる支拂を以て平和を承諾すべきこと疑なし。

極東戰亂の一年間

「スペクテートル誌」

駐露日本公使が皇帝の命を奉じて談判破裂の上は日本政府は斷然たる處置に出づべしと宣言してより已に一年の歳月を經たり、一年の歳月は極東の戰亂について反省を促がすべき絶好の期會を與ふ。

一年前露國は列强の中にありて最も恐怖すべく最も實力ある國と思惟せられたり、大英國に次て地球の最大範圍を有するは實に露西亞帝國なりき、彼は近世史に於て其比を見ざる發展をなし、益々其願望を逞ふすべく暖水港を有し、極東の通商も當さに彼の手中に落ちんとするの有様なりき、彼の外交はあらゆる國民の恐怖する所となり、且つ何れにも其功を奏せざるはなく見受けられたり、普通人の眼より見れば彼は數代の間同一の目的を追うて進み、あらゆる忍耐をなし、あらゆる障礙を排し、以て漸々其目的に近きつゝあるものゝ如く見えたり。露國は實に君主專制の好模範にして、其大いなる官局政治は代々唯一の目的を指して益々其の勢力を擴張したるか如く見えたり。而かも日本の實驗に試みらるゝや、此謬想は殘りなく破られたり、彼の有名なる昔話に、或王が衣服を着せずして人民の間を乘り廻せるに追從なる人民等は皆皇帝の衣服の美なるを賞贊せり、然るに道に一小兒あり、突然叫んで曰く「王はなぜ衣服を着せざるか」と、此言葉を聞いて人民一同眼を開いて始めて王の裸体なるを見たりといふ話あり、露國の外交も又之と相似たるものあり、何人も之を疑はざる故强大なりと思惟せられしのみ、而かも一度其實力を問ふものあれば全く砂上の家に等しきことがあらはれたり、歐洲の諸國が久しく彼の眞相を知らず、偏へに迷妄の中に彼の聲名を畏怖したりしは實に奇怪なりといはざるべからず、吾人にとつて第一の敎訓は實に軍事的外交を以て成功せんとする時代の過ぎ去りたること之れなり。



WHICH WAY, CZAR?
—Westerman in *The Ohio State Journal.*

又讀て露國の陸海軍の如何を見ん、一年以前彼は世界に於て第二或は第三の陸軍を有し最も科學的なる訓練と最も新式なる武器とを有するも

のとせられたり、彼は武斷國なるを以て一旦戰あらんか、全國の兵皆命に從て動くものと信ぜられたり、彼は敵よりも多數の兵を有し、敵よりも數多くして質優れる砲銃を有したり、而して其質は敵より遙かに優れるを以て假令六千哩の遠きに出兵するも容易に敵を屈伏し得べしと信じたり、且つ旅順の要塞には前古未曾有の城壁を作りて難攻不拔と稱したり。又之を海軍に見るも日本より優勢にして且つ之を增加すべき無限の勢力を有したり、且つ露國は數次戰爭をなしたる經驗國にして日本は僅かに弱き支那と戰ひたることあるのみ。然るに一年間の狀態を見れば其形勢果して如何ぞや。露國の兵は自國の優勢なるを恃みて奮戰し、其將卒亦名將に乏しからずと雖も、露國艦隊は殆んど全滅の悲運に沈み、日本は全く海上の權力を占有せり、而して第二バルチック艦隊の運命は未だ推すること能はざるも之れ又殊功を奏すべしとは思はれず、難攻不拔の城は已に決死の突激によりて開城せられ、朝鮮は全く日本人の手中に落ち、滿洲軍は一歩〳〵退却をなし、日本人を海岸まで驅退することは到底望なきに至りたり、露國は現今尚一大勢力たるに相違なきも又昔日の威信なく、日本は科學、智力、愛國心及び不屈の精神によりて非常なる成功を贏ち得たり、單なる物質的文明は一種の影法師の如く、眞の活動は全く精神的の訓錬に待たざるべからざることが證明せられたり。

又露國內部の國情に就ても一年前の觀念は全く其の根底より覆されたり、露國人民は皇帝の威信に服して忠勇なるべく見えしに事實は全く之に反し、露兵は其働くこと花々しきも器械の如く、常に國を思ふよりも身を思ひ家を甚ふの念の盛なるを見るなり、若し露國民にして眞に忠勇ならばかゝる時局の爲めに振つて身命を抛つべきに、さはなくて却て戰を嫌忌するが如くに見ゆ、露國にて戰爭をなしつゝあるものは國民にあらずして政府なり。かるが故に國民は漸く戰爭の無意義にして厭ふべきを覺え、政府に對して益々反抗の氣を高めつゝあり、各洲に於ける同盟罷工、聖彼得都の虐殺、教育ある人士の請願等續々としてあらはるゝ以ても彼の國情を見るべきにあらずや、兎に角極東に於ける一年間の戰亂は世界の大勢の上に大いなる影響を及ぼしたるものといふべく、識者の熟考を要すべきものたる素より論なきなり。

佛國漸く露國を疎んず

「倫敦タイムス」

聖彼得堡に於ける學生集會の運動が佛國民を驚かしたること彼の莫斯科に於ける慘劇よりも甚しきものあり、ツアールの肖像を破毀し、激烈なる決議を贊同し、革命的運動に取掛らんとすといふ佛國新聞の通信は眞に佛國民として深く驚愕せしむべき事件たり、佛國民が他國よりも一層深く驚愕する所以のもの彼等の祖先が之と相似たる經歷を有したるが爲めのみならず又露國の國情如何は直ちに彼の財政上の利害に影響すること極めて多大なるべければなり、露佛同盟に關しては如何なる最頁目を以て見る人と雖も近來甚だしく其勢力を弱めたることは蔽ふべからざる事實なり、此同盟は再び最初の勢力に服すべき論なかるべしと雖も、そは少くとも一世紀の四分一を經たる後ならざるべからず、今後露國は此同盟の利益を蒙ること極めて少かるべく、暫し殆んど孤立の姿に陷らざるべからざるべし。

總ての思慮ある佛國人は皆如何なる事情あるも兵馬を貸して滿洲軍を助けざることに一致するが如し、而して前述の學生會合は益々佛國民の警醒を促がし、下等なる勞働者に至るまで、皆露國の戰に敗れたるを知り、此戰爭は實に厭はしく嫌はしきものなることを認めたり。

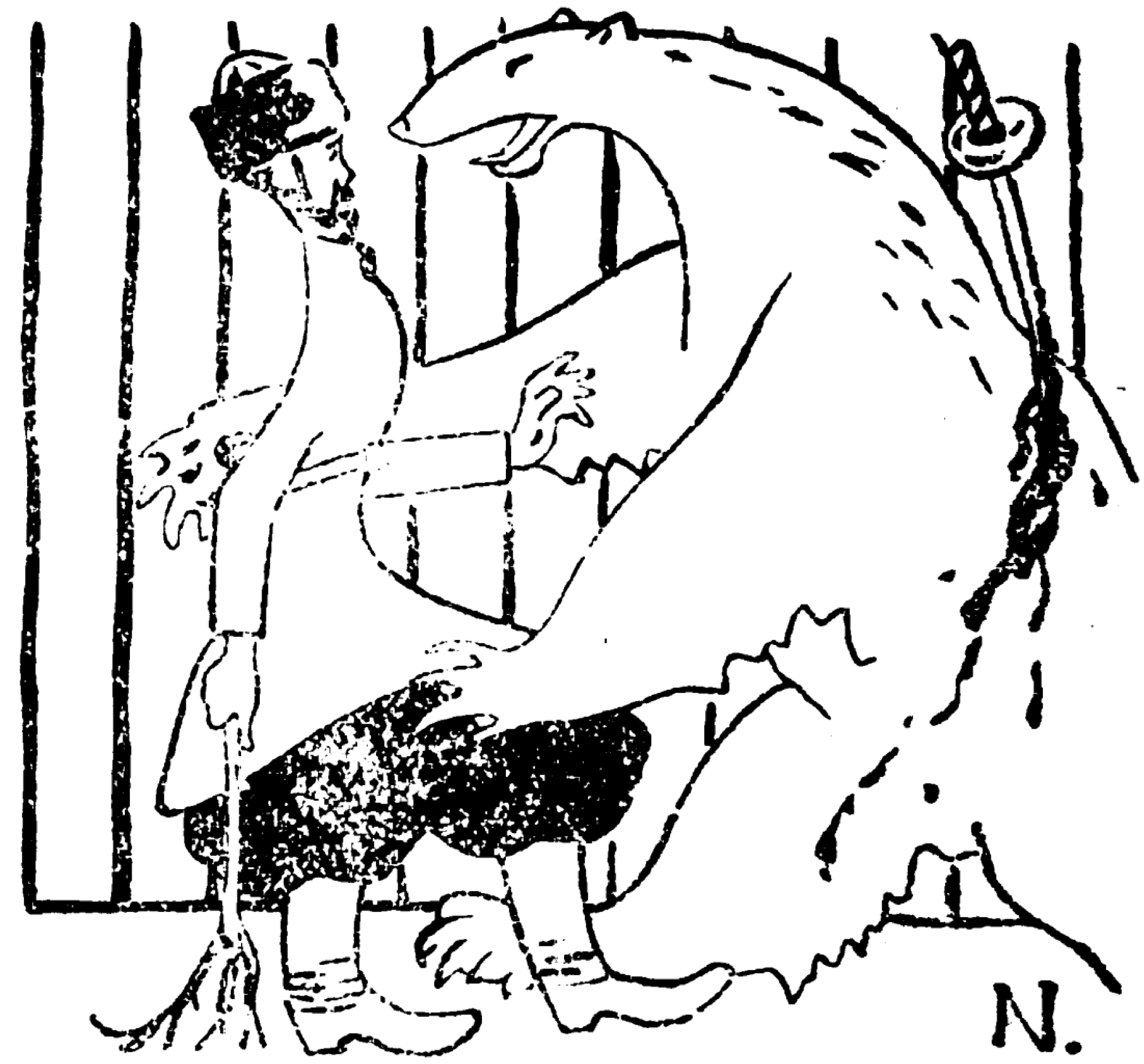
開戰前に當りて佛國人は他の諸外國人と等しく露國の内情に就て多く知る所なかりしなり、然れ共一旦戰爭の開始せられてより露國の形勢日に非なるにより少しく不安の念を抱きつゝありし彼等は近來に至り益々露國の國情を明かにするにつれ、未來に對する懸念實に甚しくなりたるが如し、佛國の露國を疎ずることと之より漸く甚しからんとする毫も疑を容れざるなり。

ウヰッテ氏と露政府

「デーリー、メール」

露國新任内務大臣が就職するや、直ちにウヰッテ氏の家宅を捜索せしめたりといふ通知は實に重大なる意義を含める問題なりといはざるべからず。これ即ち新任内務大臣がウヰッテ氏を以て革命黨員に同情を表し露政府に對して奸計を廻しつゝあるにあらずやとの疑を抱きたるが故にして、この事は獨り新内務大臣のみならず、多數の露國官吏の疑ひつゝありし所なり。

露國の内情を知れるものはウヰッテ氏が現今露國の最有力なる人物なることは何人も一致する所なり、然れども彼は不幸にしてツアールに遠ざけられ、而かも那翁のフーゼを見たるが如く、何事にも干渉して奸計を廻らすものと思惟せられつゝあり、彼は全力を以て今回の戰爭に反對し、日本の正當なる要求を拒絶することの如何ばかり不幸なる結果を來すべきかを極言せり、而して彼の意見は將さに用ひられんとし、一時露國が滿洲を放棄し、旅順までの鐵道を支那に渡すべしとの風説まで起りし程なりしなり、故に今露國人が彼の意見の用ひられざりしを悔恨するもの多く怪しむに足らざるなり。



Wounded Russian Bear (to the Czar): "How would you prefer to be eaten?"

—*Rire* (Paris).

ウヰッテ氏と露政府との相反目しつゝあるは今日の場合重大なる意義を有するものなり、駐彼得堡に於て老幼男女の不安、又は他の大都及び波蘭の市都に於ける人民は皆貪慾にして短見なる大侯等の措置を嫌忌し、露國の不幸なる源は此大侯等にありとなすもの〻如し、同盟罷工は一時勢を潜めたりしが如きも又激發して騒擾を極め、ペテロフ砲兵工廠に於ける職工は露軍に向て砲彈を放ち、彈藥製造所なるテンテレフ工場に於ても再び非常の不安を起したり。莫斯科人民の激抗は益々甚しく、波蘭は終始動搖して武器さへあれば大亂に至らんとするの形勢なり。政府

の壓制威嚇は到底其功を奏せず、益々反抗の勢を盛にするに過ぎざる也。

露國内部の形勢斯の如きのみならず、外にある將卒も又甚だ不安の念を抱きつゝあり、クロパトキン將軍は已に政府の信用を失へたり、彼は多くを約束して何事をも成功せざる人を以て呪はれたり。然れども內實に立ち入りて之を見れば如何なる將軍と雖も彼れ以上のことを行ふことは到底不可能のことなるべし、彼は數に於て優りたるのみならず、多くの名將と白旗を掲ぐるよりは寧ろ死を選ぶ所の兵士より成れる日本軍に向ふの難役に當りつゝあり、日本兵は自國の自由獨立の爲めには眼中自己の生命なきなり、世界歷史あつてより以來未だ彼が如き勇敢決心を以て戰ひたるものなし「信仰はあらゆるものに勝つ」これ實に昨年來日本兵の連勝したる所以なり。

近來英米の間に於て日露の平和問題は頻りに噂されつゝあるが如し、然れども日本が提出する條件にして滿足せられざる限りは日本は決して之を肯ぜざるべきなり。日本は今后極東に於て露國と戰端を開かざるに足る條件に非ざれば平和を締結する者に非ず、然れ共露國側より之れを見る、日本とかゝる平和條約を締結するこれ極東に於ける露國の降服を意味するものなり、今日迄露國の有せし威信を失墜せしむるものなり、而して一層恐るべきは露國人民に向て立憲代議政体の專政獨裁政治に優ることを知らしむるものたり、ひとり露國政策の打擊のみならず、露國政府の危殆を來すものなり、これ露國が容易に此條件に一致せざるべき所以なり、ウキッテ氏と露政府とが今後如何なる關係に立つべきやは實に露國の一大問題なりといはざるべからず。

捕縛せられたる露國婦人の書簡

「デーリー、ミルロア」

自由なる國に住み給ふ自由なる御婦人達に申上候、我等露國婦人にとりては生くるといふ單なる事實のいかばかり難きかをお知らせ申したしと存じ候。

諸外國に於ては婦人達は民事又は政治上の權利を求め居り候、彼等は男子の壓制を免れ、男子と同等の地位に身を置かんものと勤めつゝあり候、而して其他の國の男子は勿論皆政治上自由の權利を有し居り候。我等の國に於ては男子も女子と同じく奴隸同樣の有樣に候、夫れ故我等婦人は婦人の權利を求むるよりも！己れの權利を求むるよりも！先づ人間の權利、個人の權利を求めざるべからず候、我等露國人には眞の自由なるもの決して御座なく候、故に先づ國をして自由ならしめ、幸福ならしめんとするは男子と同じく我等婦人の希望に御座候、

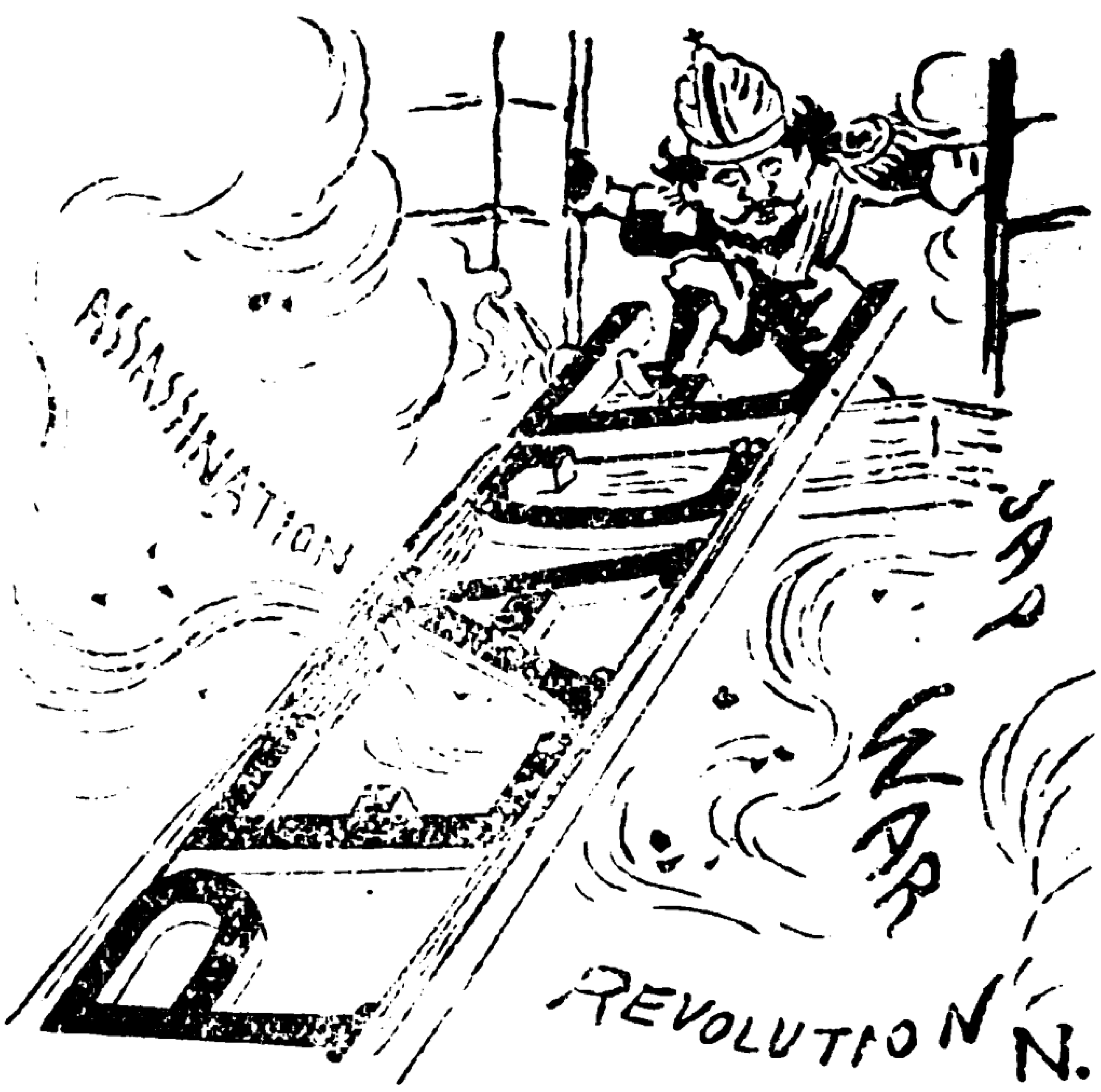
露國の政治的運動にて婦人の加入せざるもの是迄一つも無之候、露國の自由運動に於て婦人は常に其大部分に與かり候、或は牢獄に、或は地役に、或は西比利亞に、或は流罪に、生命を捧げて人道の爲めに盡さんとしたる婦人の運命は男子と同一に御座候。

勿論かゝる企てを起す婦人は中等教育を受けたるものに最も多く御座候、而して殊に自由の職業、即ち醫者、教師、などを致せしものに多く、最も多きは文學的階級に屬するものに御座候。露國の文學的事業に渉り居り候ものは殆ど全く自由派の人なりと稱して宜しかろべしと存じ候、

夫れ故に政府に恐れられ、常に迫害と壓制を受け居り候、少しの過失あれば直ちに牢獄に投ぜられ、又た平時にても政府の探偵が附き纏ひ居り候。

文學者は夜に於て寢室に入るときは明朝まで安かに寢室の中にあり得るや否や甚だ疑問に御座候、何となれば夜中に警吏が家宅に侵入し戸を破り、彼を起し、彼を捉へ、家族の悲痛心配をかまはず、彼を牢屋に引き行くこと珍らしからざればに候、婦人と雖も老も男子と異ることなく候、其一例として妾の身に起りし事を皆様に申し上べく候、然し妾の場合の如きことも決して珍らしきと申す事には無之、かゝる事は日々限りなく起る事柄のたゞ一つなりと御承知下され度候。

一月二十二日の血腥き騒動ありし僅かに五日後の事に御座候、朝の五時頃に警吏は妾の部屋に入り來り候他の國に於ては警吏の來るは法律の名に於て致し候へ共我國に於てはよい加減の口實を設けて偽りて家宅に入り來り候、下女は何事も知り申さず候へば何氣なく戸を開き候ものと見え、十二人の男が家に入り込み、直ちに妾の部屋に入り來り候、妾は幼き娘と共に眠り居り候へしが、其音に寢覺め候處、巡査二人枕元に立ち居り候へば、妾は巡査の前にて衣服を身に着け申候。



ABOUT THE ONLY WAY LEFT.
—Morgan in the Philadelphia *Inquirer*.

憲兵の大佐が妾のポケットを捜索すべきことを命じ、且つ室内に於けるあらゆるものをほじくり出し候、彼は妾の机を開き、私書までも讀み、寫眞を改め、本を開き、衣服簞笥まで開き申候。妾も娘も無言にして此恐ろしき亂暴を注視致し居り候處、巡査は其汚き手もて、我等の大切なる大事に致しおき候ものに容赦もなく觸れ申候。

我等は力なければ逆はずじつとして居り候、彼等の目より視れば我等は罪人と見え申候、其譯は我等は奴隷たるを願はず、我國の自由にして幸福ならんことを祈りしが故に御座候。

五時間の間あらゆる捜索を續け候我等は捕縛せられ候、世間が少し矢釜しく相成候へばかゝることは極めて有り勝ちの事に候、我等は友人又は知己のかゝる目に合ひ候といくらも實見致候へば己れの身に起り候とて格別驚きも致さず候、露西亞の少し上流にありて少しく物の理屈にてもわかり候へば皆なかゝる目に合ひ候。

教育ある社會が自由の運動を起せしことは久しき以前よりの事にて又其數も極めて多く候へしも何れもいろ／＼の障礙の爲めに其功を奏せず、其効果は極めて微々たるものに有之候へし。されど今回は勞働者も少からず動かされ候趣に候へば我等の望む方向に數歩を進むべきは疑なきことに候、それを以てせめてもの心遣りとして慰め居るべく候。あらく／＼かしこ。

イー、ヒメノフより。

日本の學生を評す

「リテラリー、ダイゼスト誌」

七年間東京大學の教師たりし佛人リーフオン氏は日本の學生を評して非常に勤勉にして餘り過度なるに失せずやと思はるゝ程なりといへり、今彼の意見の大要を紹介せんに

「日本の學生の勤勉なる、若し燈火のなき時は螢籠の光にて書を讀まんとする程なり、彼は教師の口より耳を放たず、熱心に其いふ所を筆記し且つ講義の後澤山の質問を試むるなり、彼には勉强せよと勸むるよりは寧ろジヨンソンがいへる如く少し暢氣となれといはんことを要するなり、リーフオンの學生の一人は狂人となり、又病死せるもの數人なるが之れ皆過度の勉强によりてなり、種々なる體育運動の方法は大學內に設けられありといへども、過度の勉强は日本學生をして早老せしめ病氣勝のものとならしめつゝあり。過度の壓抑は幼時より始まりて學校を卒はるまで長く繼續せり、大學に入る前、中等教育を終り、高等學校に入り三四年の年月、三四の外國語を學び、又後來專門に入るに必要なる各學科とを合せ學び、然る後大學に入らざるべからず、學科の多くして年限の長きが爲めに日本の學生は概して歐米の學生よりも年長なり、彼等の多くは結婚し又長くの子女を有せり、彼等は熱心にして教師も又親切なれば學問上の進歩は速かなり、師弟の間の禮義は厚くして其交際も密なり、日本の子弟は幼時より「父母を視ること天地の如く、君師を視ること日月の如し」といふ諺を敎へられたり、而して此感情は又「氏より育ち」即ち「教育は門閥に勝る」といふ俗諺と相待ちて日本學生の精神を陶治したるものなり、日本學生の行儀よくして勤勉なる謂ありといふべし。

文士初對面錄（その十一）　天中天

▲泉鏡花氏（ノ一）　僕は今迄鏡花の逸話だといつて聞いて居たは、其作物を讀んで感ずると全一の、恰も一種異樣の性格の、早くいへば狂人染みた、此世の人とは思へない變人のやうで、人に話しかけられても空嘯いて居るか、又は調子外づれの答でもするやうな男に相違ないと考へられたが、扨逢つ見ると聞いたり思つたりしたのとは全て反對、如才がなくて、ハキ／＼として、常識の非常に發達した快男子、而も僕は其家の門前まで行つたときは、想像に違はぬ人だなと、思ひ當るやうに覺えたといふのは、場所が神樂阪の中腹で、家の構へがオツに出來、軒に吊られた瓦斯燈が、ぶらりと下つて竪に横廣で四角なのに、それにゴシック風の崩した字で泉とある塩梅式が、どう見てもたゞ者の好みでない、その上に案内を乞ふと庭の方に細君の姿がちらりとして、ガツと碎けた美人と來て居るので、最早自分の想像を疑ぐる餘地がない、然り而るに其人に接すれば、案外々々又案外であるのには實に案外だ（ツヾク）



土俗雜話(一)

理學博士 坪井正五郎

◎理科大學人類學教室附屬標本陳列場の一部には內外諸種族の風俗を示す物品が置いて有る。曾て多數の人を一度に案內してそれ此れと說明を試みた事が有りましたが中央公論記者某氏も來觀者中に居られ、後に至つて彼の時の話しを個條書きの樣に爲て貰ひ度い、公論の讀者にも斯かる事に趣味を有する人が有らうと思ふから其儘之を誌上に揭げる事と爲よう、どうか執筆を賴むと望まれました。此所に記す所は卽ち主として當時の事を思ひ出しての記述て有りますが多少の增減は有るものと御承知を願ひます。(揷畫と對照すべし)

◎第一室に在るのは北海道現住アイヌ種族の使用品。先づ服飾の事から申しませう。アイヌは男女共帽子笠の類を用ゐませんが、髮の毛の亂れるのを防ぐ爲めに鉢卷き樣の物を頭に纏ふ事は有ります。元來自製のアッシと稱する布て作つたのてすが今ては內地人から得る手拭を使ふ事が少く有りません。眞中を額に當て兩端を後て結ぶのてす。何か儀式に臨むとか貴人の前に出るとか云ふ樣な場合に男子は特別の鉢卷を用ゐます。心は藤蔓の類を編んて作つて有つて、頭を取り卷いて餘りの部は兩側から後の方に突き出た樣に成つて居る。此輪の外側にはミヅキ或はヤナギを削つて作つた細い鉋屑樣のものを澤山束ねて結び着け後の方は苞の葉の餘りの樣に出た儘に爲て有る。額に當たる所卽ち輪の前の部の眞中には木彫りの熊の全身或は熊の頭の形が付けて有り、時としては被る者の頭の兩側に當る所には小さい布切れや總が下げて有る。此鉢卷きをアイヌ語てはサパウンペと申しますが、之を直譯すると「髮の物」と成る。卽ち被り物の意て有ります。削り掛けは神を祭る時の必要品て丁度內地て行はれる御幣に相當する物て有りますから夫れと同形のものを鉢卷きに結び着けるのは其物の貴さを增すと云ふ趣意て有りませう。熊の全形や熊の頭の形を飾とするものも熊を靈獸とするに基くのて、詰まり、頭に戴く物を神

型にする爲たる事疑ひ有ません。鉋屑樣の物が削り掛けと同樣であるとすれば、木刻りの飾りの所は削り掛けの頭部に當たる。或は熊の形は後の發達で元は簡單な捧の端で有つたらうかと思はれる。

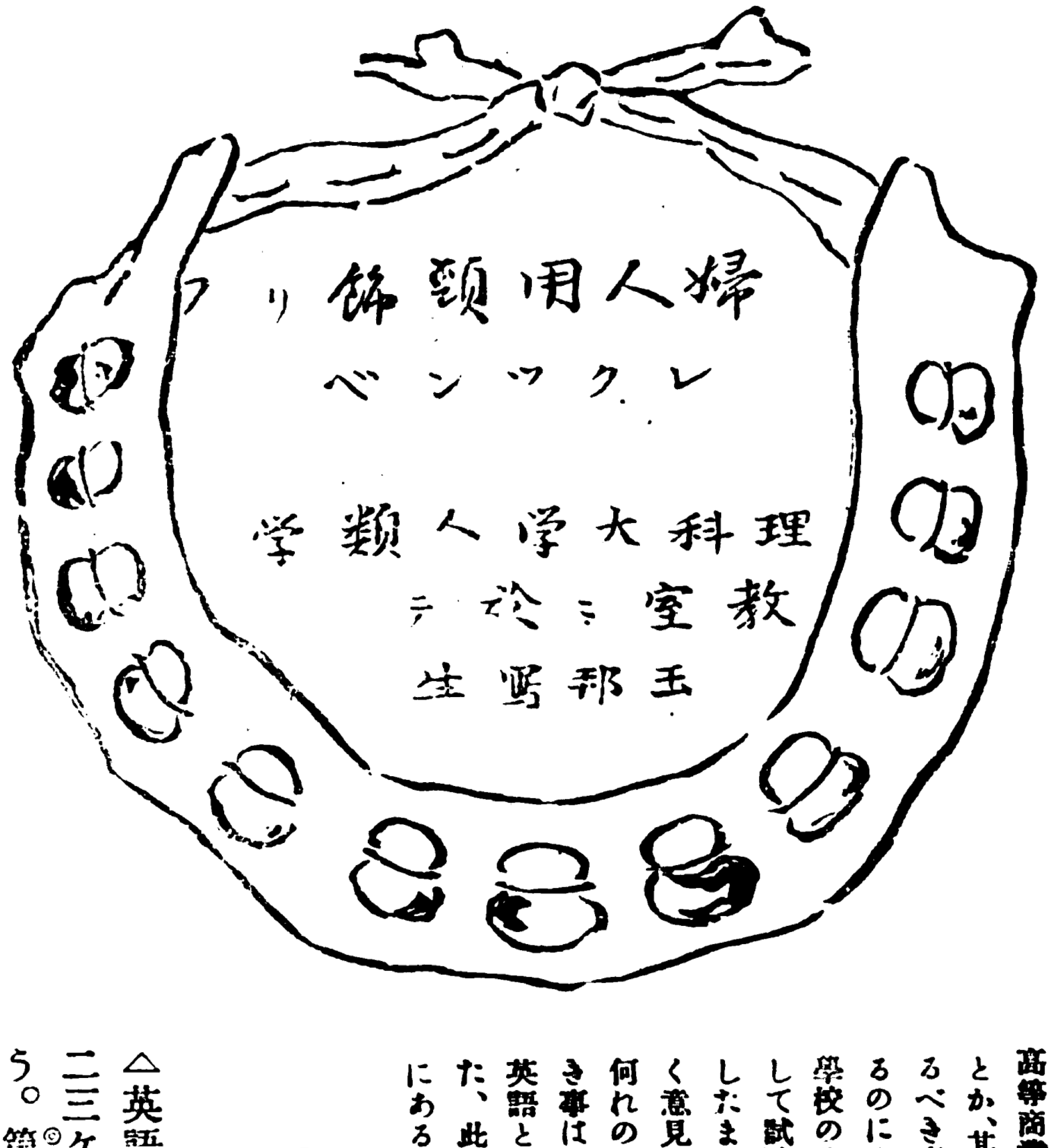
○婦人は髮飾りを持たないが、頸と胸とを飾る事は有る。頸飾りはレクツンペと云つて、子供の腹懸けの紐の樣な物で前から回はして後で結ぶ。原料としては多く內地人から得た紺木綿を用ゐ、眞中の所即ち喉に當つて襟の間から見える部には鉛で作つた丸い飾りや內地人から得た瀨戸物の白ボタン杯を幾つも並べて着けて置く。鉛の飾りは何れも自製で、之を作るには木片にマキリと云ふ小刀で隨意の形を刻みて其所に鉛を熔かし込むので有ります。中には只鉛の玉を結び着けたのも有ります。白ボタンを實用に供せずに、否、實用に供する事を知らずに、樣々の裝飾に用ゐると云ふ事は他の未開種族の間にも行はれて居ます。異地方の物を用ゐるに當つて其用途を變ずると云ふは間々見る所で土俗調査上甚だ面白い事で有りますがレクツンペの飾りに白ボタンを用ゐるのも其一例で有ります。

○婦人の胸飾りは通常シトキと申します。レクツンペは平常着ける物で有りますがシトキは盛粧と云ふ樣な場合にのみ用ゐるので有ります。全體大きな數珠の樣な形でガラスの玉や瀨戸物の玉を連ね下の端に何か平たい圓い物を付ける。金屬製の鏡が最も貴いとして有るのですが、多く有るのは刀の鍔、椀の蓋杯で有ります。椀の蓋は固より椀の蓋其儘では飾りと認め兼ねますが、摘みを削り取つて其部を平坦にし眞鍮或はブリキで作つた一錢銅貨又は二錢銅貨位の圓盤を數個、梅鉢とか九曜とか云ふ樣な形に嵌め込んで裝飾に變ずるので有ります。是亦用途變更の例中に算ふべきもので有ります。シトキを頸から懸けると鍔なり椀の蓋なりが腹の邊に來る。多く所有する者は一度に二つも三つも懸ける。捩紐に貫いて有る玉は何所の物かと云ふに決してアイヌの自製では無く、內地人から得たり大陸方面から轉々して手に入れたりしたので有ります。青色の玉にカラフト玉の名の有るのは、其の地方から來たと云ふまでの事で其所で作つたと云ふのでは有りません。玉に混じて錢が繫いて有る事が往々有りますが、これは、元アイヌ間に錢が通用しなかつたので、偶ま內地人からでも之を貰へば他に遣ひ途が無いので裝飾に利用したので有ります。之に反してアイヌは或る事の報酬としてシトキの玉を人に與へる事が有る。

錢が裝飾に用ゐられ、玉が貨幣の用を辨ずる。此事實は交換媒介の發達を說くに當つて大に參考と成ると思ひます。

高等學校入學受驗者に對する注意

高等學校の入學試驗は今の學生諸君の最も苦しむ處である、或は及第者よりも落第者の方が學力のあるものがあるやうな事も珍らしくない、それはつまり試驗が下手であつたり、試驗準備に無駄骨を折つたりする結果で甚だ氣の毒に堪へぬものがある、そこで記者は其人々の爲めに玆に第一高等學校の各主任教師に乞ふて 高等學校入學志願者の心得となるべきことを話して貰つた、入學試驗は獨り高等學校のみでない、同じ程度では高等商業だとか 高等工業だとか、其他澤山ある、心得となるべき事は又何處の學校へ入るのにも同じであるから、各學校の入學志願者は之を一讀して試驗の準備をするやうにしたまへ、各科目に亘つて悉く意見を聞かうと思つたが、何れの科目でも心得となるべき事は大差はないので、先づ英語と國語と數學とだけにした、此談話の責任は全部記者にあることは申すまでもない。



○外國語

畔柳都太郎氏

△英語で注意すべき事を二三ケ條擧げて見ましやう。第一今の學生は單語の數を知ることが少い、ヴォキャブラリーが足りないのですね、御存じの通り日本の英學は今日迄三期に分

れて發達して居る、第一期は直接外國人から敎はつたもので、地理でござれ歴史でござれ數學でも物理でも悉く英字で書いた本を讀んだのでした、此時代には未だ日本人として英語を學ぶには如何なる具合にした可いかといふ樣な事は解らない、譯語も不完全であり旁々不具であつたことは云ふまでもありません、けれども英語を知つて居るといふ方から云へば恐ろしいものであつたのです、これが今の英學の大家といはれて居る人々です、第二期は我々の學んだ時代、此時は既に外國人から直接に敎はると云ふやうな事は出來なかつた、中學を卒業して其後外國人に付く位の有樣で、從つて原書で他の學科を敎はる事は少い、唯重要な言葉に原語が挿入れてあるばかりでした、此時分にも英語の敎へ方は不完全なものであつて、スキントンの文典の如き英國人の讀むべきやうに作られたものを、暗誦するやうに無暗につめ込んだのです、併し廣く亘つただけに語は多く知つて居たと云へるのです、それが第三期の今日になつて見ると、リーダーにしろ文典にしろ日本人に適當する處の書物が出來て、英語を學ぶことが非常に易しくなつた、小さいスケールの中で完全に出來上つたのです、それだから英語の形を知ることは早いが、其代り狹い、言葉を知ることが極めて少い、殆んど馬鹿々々しい程言葉の數を知つて居ない、さういふ欠點がある、例へば born poet の born を骨(bone)と譯し、poet を哲學者と思つて、骨だらけの、所謂形容枯稿の哲學者と書いたり、window glass を widow grass と讀んでヤモメ草と譯す滑稽なのもあつて、日常使用する單語を知ることが極めて少いのです。

△第二は句(Phrase)を知らない缺點があります、そんなに六ケしいフレース、イデイオムを覺える必要はない、ありふれた易しいものさへ知つて居れば澤山です、いくら語を知つて居てもイディオマチック、エキスプレッションを知らないでは何んにもならぬ、He is at hom ein Garman. といふのを、彼は獨乙に家があつてそこに居ると譯すなぞは甚しい、ヂアマンとヂアマニーとを混同するのは可いが、at home といふフレースを知らないから飛んでもないことになる、要するに言葉でも何でも、六ヶ敷ものを覺える必要はない、ありふれたものをよく覺え込んで置くのが第一です、そんなに六ヶしい問題を出しはしない、中學で敎はつた以上のものはありはしません

△第三にはセンテンスです、問題は大抵短い文章です、

こいつて、又滑稽の答案が出るのです、由來日本の學生は理屈が好きで、一の論文を讀んでも矛盾してるとか論理が立つて居ないとか、恐ろしく氣が着く、そんなことは何うでも可い、英語をやつて居るので議論をやつてるのではないと云つても中々に承知しない、理屈では敎師も凹まされる、それだから試驗の問題なぞと來ると、何處かに陷穽が拵へてはないか、此文章には何ういふ意味が含まれ居るか、と詮索する、これは犬であると云ふ文章があつても、只犬であるとばかりでは承知が出來ぬ、物足りないやうな氣になつて、そこで何か理屈を考へ出して當て拑める、其理屈のコジ付けやうが實



に旨い、チャンと理屈が合はしてある、が其文章とはかけ離れた事になつて居る、殆んど凡てが恁ういふ有樣です、誰が好んで陷穽なんぞ拵へて手間のかゝつた事をするもんですか、唯犬であると讀めたら犬であるで十分です、深く考へるのが惡い

△其他和文英譯でも頻りに雜句集あたりから引張り出したやうな句を使ふ弊があるが、こいつは何うも仕方がない、會話は會話らしく易しくすれば可いのだが、それは西洋人ならぬ者には出來ないことて、ブックから學べばブッキシュになるのは自然の理で、我々とても西洋人のいふやうなことは云へない、先づ易しい言葉を使

ふといふ事に心懸けたら可いてしやう。

記者曰、獨乙語でも英語でも、注意すべき處は大差はない、獨乙語の人も畔柳氏の談話を讀めば自然悟る處があらうと思ふのです。

○國語　杉敏介氏

△國語の試驗に就いては、注意したいことが澤山ありますが、只漫然とお話しても解り難いから、去年の文法の問題の一二を擧げて、それに就いて云つて見ましやう。國語の試驗は我々の方でも其點をつけるのに大に苦むので、時によると答案者の精神を見て形式を捨てねばならぬやうな場合もあり、只管形式によらねばならぬこともあつて、數學や物理化學のやうに容易く見分けがつかぬのに困るのです、例へば

左ノ例中誤謬アルモノアラバ訂正スベシ但シ説明ヲ要セス

病せし人　きならせし衣　言ひいだせし折　かたりつくしゝ時

とある場合、問題の善惡は問はずとして、若し受驗者が凡きり手をつけないで何れも正しいとして置くか、又は凡てせしをしゝ、しゝをせしと訂正すると假定します、かゝる場合にはさて如何考へたら可いてしやうか、此問題を十點とすれば、どちらにしても五點づゝは形式の上で點を得て居る、而も答案者の精神を考へて見ると、凡て訂正した人はいゝ加減に山を張つて見たのかも知れんと思はれ、凡て手をつけない人は全然知らないから藪蛇を恐れて其の儘にして置いたとも思はれる、受驗者の中には中々ズルイ事をするものがあるから、かう云ふ問題に出會すと直ぐ山を張つて見るやうです、こんなのは先づ零とするより外はない、併しこれと同じやうな問題でも依然形式に從はねばならぬこともあります、故に受驗者に注意したいのは誤魔化してやらうなどゝいふ野心を起さないで、正直にやつて貰ひたいことてす

△次に問題の意味を常識を以て正確に考へて、それから答案を書かぬと、大に不利益があるといふことを注意したいのです、例へば

ハタラク語トハタラカヌ語トノ區別ハイカニ　「あめ」（雨）ガ「あまぐも」「あまやどり」等ニ於テ「あま」トナル如キハ如何ニ説明セラルベキカ

といふやうな問題があります、一寸打見た處恰も二問の樣ですが、よく前後を考へて見れば、此二問は相聯

關して居つて、其結論は一に歸するのてあります、そ れを受驗者は別々に離して了つて二ッの答を書く、「あめ」が「あま」となるのは所謂ハタラクのであるかハタラカヌのであるか、そんなことは一向お關ひなしてです、正確にいへば問題が惡いのかも知れんが、それは論ずる限てないのてす

◁それから特に注意して置きたいのは、各中學によつて各々敎授法が異なり、敎科書が異つて居ますから、動詞の法の名目などが從つて一定して居ませぬ、例へば一楷二楷などゝいふことがあるが、これはアイウエオに從つて呼ぶのもあれば、西洋流に終止格ウ列を以つて一楷と立て、其順て二楷三楷と云ふのもあるから、單に受驗者が一楷二楷と書いた場合には、甚だ明瞭でない、これは受驗者も不利なら、我々も大に困る、かゝる時は是非アイウエオの順て楷を云ふとか、終止格の例へば「咲く」といふ場合を一楷と定めてとか、一寸說明を加へて置かねばならぬ、問題の方ではかゝる間違を避けて色々な名のある詞は出題せぬやうにしてあるのですが、答案には往々必要なことがあります



理科大学人類学教室ニ於テ玉邪寫生

◁要するに第一に問題を能く呑み込み、第二に誤魔化しをせぬやう、第三に誤解を生じないやう、明瞭に書く、先づ私の注文はこれだけでござゐます。

○數學

飯島正之助氏

△多くの學生を見ますのに、皆難解なものを〳〵と稽古する風があります、これが第一試驗に落第する基です、高が高等學校の入學試驗ですから、そんなに六ヶしい問題を出さう筈がない、中學でやつたと以上のものは出さない、而も中學で教はつた中の容易い處が出るといつても差支ないのです、數學は誰も出來ないと見えて得點が甚だ少い、普通の試驗なら悉く落第と云つても可い程少いのです

△それに問題のうちで過半は誰にでも出來得る、極めて易しいのがあるのだら、正確にやりさへすれば出來ないのが二つや三つあつても結構及第になるのです

△處が其易しいのが出來ない、出來ないのではない、間違ふのです、數學は一目瞭然、間違と正しいとが知れるのですから、一問を繰り返してやつて見れば自分でも直ぐ分る、頭から知らない問題に力を入れて、いゝ加減なことをする暇に、自分に易いのを充分間違なくして置くが可いのです

△中學を卒業して補習科等へ入つても、あの補習科といふのが大した功能のあるものでないのです、補習科でも既に中學で學んだ事を復習的にやれば可いが、それてはどちらも面白くないやうな感じが生徒の頭にあるから自然六ヶしい事を教へるやうになる、教師も六ヶしい事を教へる方が樂であるし、生徒の人望を得るには、あんな六ヶしい事でも出來ると云はせねばならぬから、折角の試驗準備も遂に無効になるのです、外國語でも數學でも同じです、平易なとを正確に知つて置くといふのが試驗準備の第一義で、飛び離れた六ヶしい事を知つて居たからといつて、試驗には易しい事しか出ないのだから、中學でも補習科でも、教師たる人が此邊によく注意せねばならんことゝ思ひます、易しい事を面白く倦かしぬやうに教授するのは一に教師の腕にあるのです

△由來數學は正確なのを貴ぶのですから、平易なのを間違なくするのが最も其人の爲めにもなるし、試驗の準備としても一番好い方法であると思ひます。

軍國雜記（下）

丁字樓

◎顧みれば去年三四月頃●●のは、非常の雜沓であつたが、最も多く金を費つたのは赤帽て、「拾五萬圓位は落したらう」と云ふことてある。

◎さう云ふ勢ひだから、郵便局の内庭は、今汽車が出るステーションの改札口の樣に、いつても兵士がズラリと並んて、電報受付口と爲替拂渡口とは閑な時がないのてあつた。

◎そこて兵士の爲めには、爲替受取時間も、一時間延して、可成便利を圖ることにしたけれども、なかく追ッつかない。殊に電報爲替などは、出すもの受取るもの、共に不馴の爲、其間に齟齬を來したことも、隨分あつた。

◎サア然うなると、さなきだに勝手の分らぬ兵士は、彌々氣をいらつ、いらつても係員は忙しいので、夫ばかりに取合つては居られない、そこて時々「不親切」だとの苦情も起り、又双方の間に、小衝突の起るのも、已むを得ぬ事てあつた。

◎僕も或時、郵便局と衝突したことがあつた。それは僕の家に入舍した兵士が出發の後、書留郵便が來たので、それを「差出人へ（差出人からの依賴もあつたから）へ還付して吳れよ」、と云つたにも拘はらず、配達人は強て「戰地へ遣る」と云ふから、「そんな附箋は出來ない」と云つたら、何の角のと小言を云ひながら歸り去つて、不埒にも夫れを戰地へ遣つて了つた。僕は郵便局に就て、其事を確かめた上、「何故差出人の依賴して來た通り、本人出發の後は、還付して吳れよと云ふ、要求に應ぜられないか、あれは必定爲替だ、爲替は戰地では受取れない、受取れないことを知りつゝ、あちらへ遣つたと云ふのは、彌々不都合だ、之にはどんな間違が起らうも知れぬ、何故そんな事を爲たのか」、と喧ましく言つたら、「書留は必らず爲替だと限つては居ない、それで戰地へ遣つた」、との一點張りて、どうも忠實に、郵便物を保護すると云ふ精神が、乏しいと見て取つたから、どこ迄も追窮す可しだと思つて、先づ配達人の錯誤に依り、戰地へ發送したりとの證明を求め、次に戰地に於ては、何者に配達したるかの、證明をも受けることにして、漸く落着させたのであつた。その事は實に、九月初旬に始まつて、翌年一月下旬頃に終つたのである。

◎想ふに此事は、たしかに郵便局の失策であつた。けれども、僕は寧ろ配達人が、書留封皮の一端を切つて、爲替券を拔出した、其あきがらを戰地へ遣る樣な、曲事を行ふのではあるまいかと疑つたのである。假に然いふ事が行はれたとしても、まんの惡い時は、宛名本人が戰死してもすれば、それなりけりて知らずに了ふだらうし、又よし本人が戰死しないにしても、戰時多忙の折柄とて、彼等は爲替券封入の有無に付、彼此照會を重ねることを、甚だ煩はしく感ずるに相違ない。そこて右の樣な場合には、差出人及其關係者に於て、充分實際を取糺して置かれればならぬのである。

◎宿舍の中にも、橫着な者があつて、兵士出發後に接手した、爲替をごまかしたものも有るらしいが、是等をこそ充分取調べて、懲して遣りたいと思ふ。

◎兵士が戰地に居て、何よりも喜ぶのは、郷信であるが、僕の知る所に依ると、或る宿舍は、一枚のはがきも、兵士に出したことが無いので、兵士から、「どうか一度でもよいから、はがきを吳れ」と言つて來たさうだ、それでも遣らないて、「壹錢五厘あれば、湯に一度入れる」などゝ云つて、澄して居る者もある。

◉公證人に聞くと、戰時になつてから、よく有る公證は、御用商人などの諸契約、それから戰爭に付て入込んで來るもの丶諸契約、花柳社會の諸契約に付ての公證であつて、どこにも時局の影響を持込んで居るから可笑しい。

◉花柳社會と云へば、この非常の場合、人入込の事から考へたが、人身保護と云ふ上からして、是非共設けて欲しのは、娼妓などの保護法である。●●では、營業に逐はれて、昏倒したものも有つたとやら云ふが、之には二つの目的を以て、保護を加へたいと思ふ。

一は現在の境遇に伴ふ保護。

(イ)營業時間に制限を加ふること。

(ロ)身體保護上必要の注意を與ふること。

二は將來身を處するに付ての保護。

(ハ)彼等に手工其他の教育を施すこと。

(ニ)樓主をして彼等に步割を與へしめ相應の積立をなさしむること。

◉監獄を出る免囚は、大抵幾分かの作業工錢を貰つて歸るが、滿期の娼妓はそれにも劣つて居て、すこしの貯蓄も無いとは、實に憫然の至りである。然るに人入込の多い時、人入込の多い處では、屹度忙しい彼等の營業が、たゞ樓主を肥すのみで、昏倒するに至つても、顧みられないと云ふ事になつては、實に言ふに忍びない事であるから、是非共相應なる保護を加へたいものである。

◉いつぞや戰爭の前の年には、女の兒が多く生れて、戰爭の年には、男の兒が多く生れるとやら云ふ、或る專門家の話が、新聞に出てあつたと思ふが、或人は、「戰爭の後には、畸形兒が多く生れる」と言つて居る。威程、全く道理のない事でもないと思ふ、しかし尚、之は專門家の實驗に依て確かめたいものである。

◉こどもと云へば、戰爭の兒童に及ぼして居る影響は、實に著しいものである。●●では、十一二歲以下六七歲迄の兒童が、背嚢を負ひ、竹銃を擔ぎ「伏せ」と云へば地に伏し、「打て」と云へば齊しく打ち、行進し停止し、整列し分列する其有樣、宛として小兵士である。シテ野外要務令中にある、簡易なる兵語は、ちよつとした大人も及ばぬ程にも能く、兒童が記憶して居て、進退動作も法に叶つて居るらしいから、なかなか可笑しい。

◉それに又、能く露助の名などを覺えて居るのは、感心だ。僕の二男はことし滿五歲になるが、一日「畫報」を見ながら「お父さん之は誰」と問ふたら「これはクロパトキン、これはステツセル」と教へた處、「どつちが好いの」と問ふから、「クロパトキンが上だが、おまへ何方(どちら)がよいか」と云ふと、「クロパトキンにも、ステツセルにもならん、わしや大山大將になる」と云つた。その舌の廻り樣、なかなかに柔利であつて、決して外人の名を言ふのを難(かた)んじないのも、全く戰爭の餘響こゝに至つたものである。況して「クロパトキンにも、ステツセルにもならぬ」と云ふところは、確かに此國民の本性を現はして居るから、彌々可笑しい。

◉又驚くべきは、玩具に及んで居る、戰爭の影響である。軍艦、水雷艇、大砲、鐵砲、背嚢その他すべて、時好に適する玩具は、或ひは在來のを改良し、或ひは全く新奇なのを製作して、盛んに兒童の好奇心に投ず可く、用意して居るのである。

◉さて玩具としての武器は、兒童の精神に及ぼす感化が(若し注意しないと)、或る面白からぬ傾向を生ずるともあらうけれども、概して(一)その音(おと)などの快活なる爲、兒童の精神を引立て、又(二)玩具それ自身の性質として、活潑の動作を起させるものであるから、その點に於ては、他の玩具に優つて居るかと思ふ。

◎此度の戰爭に付て、文士としての志賀重昂氏の熱心と其奮發とは、實に敬服すべき至りてあるが、畫家に至つては、熱心遠く氏に及ばないかの樣てある。僕は敵國の人ながら、ペトロパウロスク爆沈の時に死したる、ヴエレスチヤギンの熱心を、稱嘆せざるを得ない。
◎露助に學ぶ可からざるもの、(一)好んて惡聲を出すと、(二)最後に至る迄、その職に盡すとを知らざると、(三)貧にして廉ならざると(旅順開城當時、現金の少かつたことの如きは、大いに譏す可き所てある)、(四)眞面目なる點に於て、遠く邦人に及ばざると、(五)俘虜の如きは、往々恥を知らざると等てあつて、實例は多きに堪へない。僕は邦人の間にも、近時著しく「眞面目」と云ふことが、欠乏して居るのを見て、いけしやあ〳〵として居る、かの露助の不眞面目を學んで呉れては、彌々困つたものだと思ふ。マア之れは、こんな事て一先づおしまひにして置かう。(終)

大塚楠緒子女史を訪ふ(婦人問題に就ての談話)

茅原ふじ子

紅塵を避けたる、西片町の片側、いとも閑靜なる御住居、門を潜れば、左側には今を盛りと咲き誇りたる姫椿の淡紅なるが人待ち顔に、そよとだにせず、一本の松は千歳を祝ふへく、雲をつかんばかりに、繁れり、請ぜられて通りたる客間は十疊、床の間には姫椿のなげさし、わざとならぬ趣、ばんせ、緋桃の二三輪、此間を飾りて美し、平常の御心意氣も如何ばかりと推せられぬ

何時も御元氣でと申せば、靑年老やすしとやら申すから、私は可成年を取らない樣に心掛けて居ります、男女共に老い易い傾向がありますね、早く老大ぶると大成は出來ません、好くないことだと思つて居ります、其爲めか十歳を長らに二人のお子持とは、どう見ても見えぬ

◎女子と文學　平常考へて居ないこともありませんが、纏まつた話も出來ません、何に此頃は書くよりも、批評をする樣になつて參りまして、自分は少しも進むことが出來ないのです、女子の方では一葉女史などは、實に豪い方だと思ひます、然し女子は小說を書くにしても、境遇、地位に關係をしまして、自分の考を十分に書くことの、出來ないことがあります、一葉女史は固々秀才の方でしたろうが、彼迄發展なさることの出來たのは、一つは境遇だろうと存じます、女子は家庭を造りますと、俗務は多うくなりまして、机にばかり向ふて居るといふ譯にいきません、小金井さん、三宅さんなども一時は盛にお書きになりましたが、近頃は拜見しない樣です、夫でも彼の方々は、既に一家の風をなしていらしやいますが私共はとても駄目です

◎戰爭と小說　軍事小說を大分に見受けますが、別して大作もない樣です、忠君愛國を縱緯にして、あみ出してありますから、皆千篇一律です、トルストイ伯は戰爭の裏面を書きましたが、實に日々の新聞に見るだけでも酸鼻に堪えんことがありますから、隱れて居る事實を探しましたら、隨分多う御座いませう、まさか日本では左樣もなりませんからね

◎和歌の體も幾派にも分れて參りました、鐵幹風もありますし、竹柏會派もありますが、何れもよからうと存じて居ります、晶子さんは中々豪い方ですね、「君死にたまふな」の句では隨分攻擊があつた樣ですが、戰爭の裏面は彼樣だらうと思ひますよ、晶子さんなんかは頑くるしい漢字をこて〱並べてありますが、讀んで少しも、耳障りが致しませんのが、上手なので御座いませう

◎漢籍を學ぶことに就ては、種々八かましく申して、小學校では、漢字は大變節減してあるそうですが、一寸新聞を見るにしても、漢字を知らなければ、讀むことは、出來ません、私は漢字の素養がなくて、誠に不自由で困りますから、子供には十分させたいと思て居ります、假名つかひも、彼是と申しますが、全くの改良をすることが、出來るのでせうか、一つ學校でも敎員に依つて、一定して居ない樣ですが、何たかーがうの化身かと思ふと心細い樣です、日本の歷史的文字かなくなるのですもの

◎女學生の墮落は烈しい樣です、新聞でも見えますが、實際でせうか、女子の學問に志さすものが多くなりましたから、其中には又惡い人もあるのでせう、海老茶と申すと何んだか、元祿時代の權妻とでも申す樣に人がいひますが、まさか左樣でもありますまい、昨日も上野に行きましたら、二人の海老茶袴をつけた花柳社會の者の樣なのが居りました、此惰落て女子敎育が、又首をたゝかれはしないかと心配でたまりません、然只今の樣に理想〱て架空の望みを書いて居る樣なのも、駄目です、私共では二人とも女子ですから、心配でたまりません、どうすれば、ハイカラでない女らしい女が出來るだらうと思つて居ります

◎女子と職業　女子の職業も多くあります、相當に學識のある方ならば、家庭敎師などが宜からうと思ひます、當時は家庭敎師を要求なさる方が多い樣で御座います、又學校の敎師も適當でせう、學校に居りました時分には、女敎員よりも、男敎員の方が好い樣でした、

夫れは學識の上からいふのではありませんが同性てすから、觀察の點などが同じで、教員も緻密なれば、自分も緻密であるといふ風があるからでせう

幼稚園の保姆だけは、男子では出來ないでしやうと思ひます

◎女子と獨立　世の中に男女が出來て居る以上は、女子は家庭の人として働らくのが、天職だらうと存じます、三十歳前後の人で未婚の方がありますが、女子の獨身の方は、氣質が偏頗になる樣です、邪推といふ樣なのは、獨身の方にある樣です、私は行先彼樣なお姑を持つお嫁さんは骨だろうと存じます、事情のために獨身をつゝけて行かなければ、いけない場合もありませう、一概にはいはれません、先達高師の教員の或人に尋ねた事がありますが、卒業生は獨身の方が多いでせうと申ますと、否、結婚するものが多いと云ひますが、多くは皆後妻の樣です、女子の學問は婚期がどうも遲れる樣です

丁度其時お子樣二人は、女中を連れだつてのお花見、障子を開けて母君へのお挨拶、お二階へもとのお差圖、小さき足音は、梯子段を辿られた、夫を機に辭して門外に出づれば、緋桃の花片一つ二つ。

明治闇黑史

(禁轉載)

有磯逸郎

○林有造等の政府顚覆陰謀(上)

『民權運動に入る前に今一ッ、丁度日露戰爭の起つてゐる幸先であるから、最初に話した明治六年の、征韓論の破裂を受け、天下に磅礴してゐた暗流――西南戰爭を中心として、東京、京都、大阪、和歌山、高知の間を縫ふて、幾多の人物が、覆面して、活劇を演ぜんとした、明治年間最も痛快な然かもその終局は幽靈のやうに不得要領に終つた一二の陰謀事件を聞かさう』

『考へて見ると、明治の社會も、政府も、三十八年の今日に至る迄、色んな徑路を經過して來て居る、あの、西南戰役も、ちよいと表面から見れば、西郷隆盛が、門下の壯士原に擁せられて、桐野、篠原、村田等と、當時の政府に反抗した爭亂に過ぎなかつたやうであるが、之を機會に、天下の英雄――といへば仰山ぢやが、明治初年に出損つた四方の風雲兒は、手に唾して、黑幕の裡に暗闘を試みた側を見ると、當時の日本

國は、頗る妙な舞臺に立つてゐたのぢや、妖雲慘として、今にも第二の革命は演ぜらるゝやうに聲えられたが、官軍が熊本に連絡を通ぜると聞くや、ヒユードロ〳〵と消えて仕舞つたのは、日本國の僥倖ではあつたが、また一方から言へば、日本人は、生氣地がないやうにも思はれる』

『今、その黑幕を拂つて、我輩等の間に、盛に噂に上つた二三の事實を擧げて見ると、福岡の越智彥四郎武部小四郎等は、福岡分營を襲ふたのを最初として、福澤諭吉の出た豐前の中津でも、今に同地の靑年に慕はれてゐる彼の增田宗太郎が、大分の市街に火を放つて、舊城を圍んだのなぞは、著しい例ぢやらう、長州の萩にも、町田梅之進といふ男は、同志を率ゐて、萩警察署を襲ふたやうに聞いてゐた、此の外、西鄕の起つたのを幸機會にして、諸方に陰謀は企てられたので、若し西鄕の軍にして、熊本城を拔くやうなことが有つたならば、此の關中の惡戲者は、一時に四方に起つたてあらうと思ふ、爾して當時最も耳目を惹いて痛快であつたのは、土佐人の陰謀さ』

『土佐人の陰謀は、今更珍らしく說く迄もないが、幕末の頃より隨分と有名なものであつた、明治三年にも、板垣等は、新政府の遣り方に不快を懷き、四國會議を作つたことあり、明治四年の愛宕道旭、外山光輔等の陰謀には、海援隊の岡崎恭助等は、有栖川宮の密書を携へて、秋田の佐竹侯を說いたことあり、明治七年には、征韓論者の意を受けて、支那の牛莊に行つてゐた武市熊吉等は、大臣暗殺を企だてゝ、東京燒拂の計畫を立てた彼の千屋歸一等も土佐人、數へ立てると。民權運動前の陰謀は、大抵土佐人が遣つて居る、その中で最も著しいのは、林有造が、元老院幹事の陸奧宗光と手を握つて企てた、政府顚覆の大陰謀であらうが、土佐人の陰謀は、仕掛は大きいが、何時も尻が拔けて居るわい』

『林有造といへば、此頃は遣り掛けた自由黨も、持ち切れず、又候政友會へ復へるとか何とか、新聞紙で笑はれて居るが、彼でも、一度は、我物顏に橫梁してゐる薩長の才子原を逐ひ退けて、天下を奪はんとした豪の者ぢや、其れが今日は當時小倅のやうに冷視してゐた大浦の兼武や、清浦の奎吾などの鼻息を窺つてゐるとは、何といふ事ぢや、蒼田變じて、碧海と爲る、といふことは聞いて居るが、當年の豪傑林有造が、今日の狀態に落ちやうとは、我輩も豫期しなかつた、ナニ、

林ばかりぢやない……成程、我輩もその一人てあるわひ、アハ

「一體、林は君も知つとるぢやらうが、土佐は伊豫に近かい宿毛の产で　家老の伊賀家の家來てあつたから、高知藩では、餘り幅の利かない陪臣の身の上てあつたが、人物は宿毛の出身である丈け、小供の折より一寸面白い處があつたやうに聞いてをる——宿毛といへば、あの人口二千足らずの小さな土地から、色んな人物が出て居る、竹内綱も宿毛人てあれば、大江卓も宿毛人、前の日本鐵道會社長の小野義眞も、小野梓も、皆な宿毛の出身ぢやから、妙てはないか、之は林の父親が豪かつたのぢや」

『林の父親か隨分利かぬ氣の爺様よ、本藩の高知侍から輕蔑さるゝのが面白くないといふので、三味線の外は、歌ても、俳諧でも、詩でも、碁でも有らゆる技藝に通じてゐた、岩村礫水先生といへば、維新前は、土佐では響いた老人、岩村通俊、林有造、岩村高俊、と斯う揃つた子供を持つたのを見ても、大抵その人物が想像されるぢやらう、ホ、まだ林の長兄に羽田左膳といふのが居つた、頗る逸物であつたが、若年で死んだのが、惜しいとてあつた、啻に子供ばかりでない、小野義眞でも、竹内綱でも、宿毛から出た連中は、大抵此の老人の感化を受けたやうに聞いて居る、維新前後には、世に顯はれず、歴史には遺らないが、地方には、隨分俊傑が居た、林の父親もその一人であらう、

韜略撑レ膓世所レ知　狂傾二杯酒一且吟レ詩　私聞
上國攘夷策　正是臥龍眠覺時

之は礫水翁の詩ぢや「狂げて杯酒を傾け且つ詩を吟ず」と、すねて、然かも悠々として、正に是れ臥龍眠覺むる時、なぞと氣取つてゐる、礫水其の人の人物が現はれて居るではないか、此の礫水老人には、まだ色々面白い逸話はあるが、之は後に讓つて、子息の林有造の陰謀談に移らう』

『林有造といへば、明治三四年頃は、兄の通俊や、弟の高俊等と同じく、政府に入り、外務の四等出仕かを遣つてゐたが、洋行して、歸ると、大久保等の遣り方が、面白くないといふので、土佐に歸つて、曾て陸軍大佐であつた片岡健吉等と、立志社といふものを立てゝ、社長に爲つてゐた、立志社！、南海の一角に立てられた、眇たる地方の一團體であつたが、當時は民間の思潮に、大刺戟を與へた旋風で、日本全國を風靡したあの民權自由の論も、皆んな此の立志社より醞釀

して出たのぢや、であるから、立志社といへば、その一擧一動は、天下の指目する所と爲つてゐた、林は此の立志社々長を笠に冠り、傲然と、明治政府に對抗してゐたのであるが、一日も無事でゐるとの出來ない林の事であるから、地方の事は大抵片岡に任せ、自身は東京に出て、政府の罅隙を睨んでゐた

『例の征韓論が破れて、西鄕等が東京を引き拂ふと、さア世間が騷ぎ初めた、手を拍つて、時機の到れるを喜んだものは、日本全國、幾人あつたか知れぬ、林もその一人で、西鄕が鹿兒島に歸つたと聞くや、後に後藤新平と棒を組んだ山中一郎と連れ立ち、遙々鹿兒島に出向ひて、西鄕に會つた、爾うして征韓論破裂後は林の入京は、ます〳〵頻繁と爲つたのぢや、之は白髮山の買上運動に奔走してゐたのであるといふとてあつたが何んでも十五萬兩で、土佐の白髮山を政府に買はせる筈であつたので、此時より既に林の胸中に一物が有つたのぢや、林といへば、明治六七年頃から、最うヤマに因緣がある』

『當時十五萬兩といへば、大した金高で、今日の金にすると、左樣さ五十萬圓位にも當るぢやらう、林は一人窃に、或計畫を貯へて、一方では陸奥等に合鎚を打たせ、自分は素知らぬ顏で、表面から士族の窮乏を救ふといふのを名にして、政府に迫つて居たのぢや、明治九年の十二月、林は矢張白髮山一件で、三菱會社て、小野義眞と會談してゐると、丁度その處へ、鹿兒島表から電報が來た、見ると、西鄕は兵を擧げた、といふ電報であつたのぢや、林は山の運動で愚圖〳〵してゐる間に、時機は來りて、鹿兒島には西鄕は起つたのぢや、尤も林は遙然と以前より、評論新聞社の海老原穆から、鹿兒島の動靜を聞いてゐたさうであるが、斯う早く、西鄕が起たうとは思はなかつたので、足を宙にして、陸奥宗光を尋ねたさうぢや。海老原といふ男が、今の青年には知つたものはあるまいが、此男は東京で新聞を發行して、傍ら密かに西鄕に政府の動靜を報じてゐた。當時ちよと名の知られた男ぢや』

『爰に、簡略に林の當時の計畫を話さう、林は最初より西鄕の起つのを豫期してゐたので、此の騷擾を機として、高知和歌山の兵を以て、大阪城を衝き、關西の要衝を扼して、天下に號令せんと考へてゐたのぢやが、林は桐野や、篠原や、村田等のやうに、西鄕の爲に殉ぜんとする氣は無論無かつたので、斯くて國內を擾亂の中に置き、その虛に乘じて、政府を顚覆せんと

したので、薩摩男兒のやうに、一地方の變亂を以て甘んじなかつたのは殊勝であるが、土佐人であるだけ、計畫は遠大で、思慮は周密であつたが、理屈を言つてゐる間に、遂に時機を失したのは、今日から見ると滑稽の極」

「最も林はあれだけの計畫を立てた男であるから、三菱會社で、電報を見て、オヤ〳〵と呆れてゐるやうな頓馬でない、既にその前より、海老原から九州の模樣を聞いてゐたから、多大の準備は遣つてゐた、先づ岡本健三郞——左樣ぢや、民撰議院設立の請願書に、板垣、後藤、副島、江藤等と連署した岡本に秘密を明かし、横濱のローザ商會から、三千挺の銃器を買入るゝことを賴み、なほ岩神昂——左樣ぢや、古澤滋の兄弟の岩神を同志に入れて、刺客の任に當らせ、小室信夫等にも、それ〳〵任務を托して、密々計畫を進めてゐたのであるが、西郷が兵を擧げた此時迄は、實は未だ十分に準備がついてゐなかつたのぢや」

「明けて、明治十年に入りて、ます〳〵西南の風雲は急を告げて來た、東京の白髮山運動も、まだ判然(はつきり)しなかつたが、土佐の模樣が心元ないので、二月十四日後藤、板垣及大江卓等と、東京を出た、此時は最う戰端は開かれてあつたのぢや。東京と京都との間は、來往織るが如く、林の出立した日なぞは、横濱出帆の乘客が多かつたので、一枚の切符だも得ることが出來なかつたさうぢや、見送つて來た陸奧宗光は、心配して、丁度其時來合せた山東直砥——後に耶蘇坊主に爲つた山東ぢや、彼も矢張陸奧の手で、林の一味に加はつてゐた、此の山東の切符を貰つて呉れて、漸やく汽船に乘り込んだといふ有樣、あの温厚の山東も、陰謀に與(くみ)してゐたといふのを聞いてゐるのか、亂世には君子でも聖人でも、皆な陰謀の味を甞める！、幕末には、虫も殺さぬ今の島地默雷でも、島地太郞と俗名を名乘つて、大洲三郞（鐵然）と共に、奇兵隊に加はり、維新後、廢佛論の喧しかつた頃には、東本願寺の村上一策等と共に、外山光輔等の一味と連絡を通じてゐたといふではないか」

「後藤、板垣、大江、林、斯う揃つて横濱を出帆した四人の中、のんこのしやの後藤は、大江と共に京都に赴き、林は板垣を諫めて、京都へ行くを止め、相携へて土佐に歸つた、土佐に歸つて、立志社の連中に會ふと、何れも踊躍して時機の到來せるを喜んでゐる。當時土佐には、二つの黨派があつた、一つは林、片岡等

の率ゐてゐた立志社で、今一つは頑固黨の名で通つた古勤王黨、谷重喜、山田平左衛門、平井直次、島地正存等は、立志社派の先輩で、なほ東京には島本仲道なぞも控へてゐた、古勤王黨では、島村左傳次、大石彌太郎、池地退藏、桑原平八、安岡權馬、宮崎頼太郎等は、領袖。立志社派も、古勤王派も、兩手を擧げ、血をすゝつて林の計畫に贊成した、當時は林の最も得意時代」

「時に谷重喜の如きは、最も意氣壯絶で、大阪城の乘取は、余之に任ずべしと意氣込み、直に起たんとを求めた、と云ふのは此の谷重喜は、前に大阪鎭臺司令長官を遣つてゐたので、大阪の地形は掌を指すが如く熟知してゐたからぢや……此の谷重喜の事は、後に民權運動を話す時に、能くその人物を聞かすが、我輩は、此の谷は、林よりも、片岡よりも、人物であつたやうに思ふ、民權運動の時も、板垣を表面に立てゝ、谷は隱れてゐたが、畫策は何時も此の谷の胸中より出たので、隱然として、民權黨の實權を握つて居た、無名の英雄ぢやつた。此時平井直次、左樣ぢや後に憲政黨内閣の時に、警視總監と爲つたあの西山志澄は、當時德島支廳詰長官の職にあつて、爲替方に十五萬圓の官金を溜めて、擧兵の用意に備へてゐたといふ事ぢやつた」

「土佐の模樣は、右のやうな鹽梅であつたから、林も大に安堵し、再び東京に向ひ、路すがら大阪に寄つて、大江卓に會ひ、電報の符號を定めた、第一、第二、第三の暗號を作り、第一は銃、第二は刺殺、第三は擧兵といふやうに定めたのぢや、此時、「櫻花を咲かすの春風は僕之に任ぜん」と自ら進んで、刺客の任を引き受けた川村矯一郎は、飄然と、林を尋ねて來た、陸奥も京都の出張先より、大阪に出て來た」

文士初對面錄（その十二）

天中天

▲泉鏡花氏（ノ二） 丁度僕の訪れた時は朝湯に行つた留守であつたので二階の一間―氏の書齋といひたいが書物はない、机に硯、それに原稿の書きさし、傍に茶棚見たいなものがあつて色々の小さい人形がのツかり、床には紅葉山人の短册の細い軸物が掛けられ、違ひ棚には山人の寫眞に香花を供へてお經が置かれ、西の柱には仝じく山人の筆で「二三里の妹がり行くや露の中」とある扇が懸けてある、一日見れば紅葉室、然らざれば原稿書き部屋、それも可笑しいから、ズツと碎けて氏の仕事場、といふ其一間―に待たされたが、凡そ半時間の後、背後にコホンと咳拂ひがして、殆んど寛物のやうに思つて居た氏が現はれた、席を辷つて氏は叮嚀な初對面の挨拶、「兼て登張君からお名前を聞いて居ましたが」なをキツカケに、席に直つて茶を進められる（ツヾク）



煩悶の價値

綱島梁川

『時代思潮』

「人に與へて煩悶の意義を説く」と題せし中に左の一節あり

凡そ有りと有るもの、生きとし生けるもの、何れか自家分上の煩悶なからむ。煩悶は萬有之向上形式也。水の流るゝ、やがて煩悶なり、大海の懐にあくがれ行かんとす。烟の騰る、やがて煩悶なり、靜かに天上の雲と合せんとす。魚の形したるものは鳥の形したるものに、鳥の形したるものは獸の形したるものに、獸の形したるものは人の形したるものに、彼等は皆おの〳〵本然の我を求めて踊る。そこに無聲熱烈なる戰あり、煩悶あり。所詮一切の煩悶は、自己以上の自己を産まんとする煩悶にあらずや。而して煩悶のうち最も崇高を極むるは、人、神を産むの煩悶なり。

一切煩悶なき生活、君は羨ましとや。是れ取りも直さず白く塗りたる墓の、中は淺ましき虚を孕める生活を羨むなり。何事にもあれ、人その得意滿志の鼻蠢かして、思ひあがり、笑みくづるゝ時ばかり、斷腸多きはあらじ、七つの惡鬼も來たり住みぬべくと、いと淺まし。譬へば霜柱の、㷔として裝ひいかめしきが如し、指頭一彈して早くその影を留めず。かの悲痛煩悶と戰ふものを見よ。彼等に天寵の乘ずる能はざる一念の光、實あるにあらずや。面を撫づる春風に空調浮響ありて、寒林に吼ゆる北風に剛健至誠の聲あり。

快樂は以て豚を救ふべし、以て人の心靈を救ふに足らず。人を救ふの力は煩悶也、煩悶の導き到る解脫也、大覺也、祝福也。自己存在に對する煩悶、嗚呼世にこの一味の自覺ばかり、沈痛にして深奥なるものありや。大地聲を合はせて叫び、諸天僧に來りて悶え苦しむ。これ詩にあらずや、げに吾等が有するこの一個の自覺こそは、あらゆる有情無情の煩悶を會萃して、一點の白熾光と現じたるものなり。わが一己の煩悶と解脫とは、即ち全萬有の煩悶と解脫とを合せ振しめて代はり立てるにあらずや。人一たびこの境に立つ、即ち我及萬法の生死關頭に立てる也。生乎死乎。死も亦光榮、生も亦光榮、生死悠々復た論ずるに足らざる也。是くの如くにして煩悶と戰つて死す、これ充實の死也。是くの如くにして煩悶と戰つて生く、これ亦充實の生也。男兒苟もこの自覺の城に入る、生死を一擲して其の全人の科を盈たすべき也。何物の怯兒狡兒ぞ、生死一間の巷に立ちながら、自ら欺き安きを偸みて、この嚴肅なる自覺の事實を掩ひ、避け、弄び、推諉百端せんとはする。

げにや自己存在に對する煩悶は、我等が宇宙の根抵より、遽然として醒め來たれる一種無類の自覺也。いかなれば人の、かゝる苦き〳〵自覺の重荷を負うて生まれ來たるべきかを知らず、唯だ知る、われ今、眼前にこの火よりも燎かなる事實の前に立てるを。嗚呼、人の百意欲のうち、自己存在ばかり愛着の道深きはあらじを、一たびその人生的意義に惑ひ

惑うて安きを得ざるや、竟ひには自己存在其のものをさへ訛ひ訛うて已まざるなり。我てふものゝ生まれいでざりしを願ひ、死にて生まれざりしをねがひ、生まれて死なざりしをねがひ、更に併せて天地萬法の存在を根抵より都滅せんとを思ふ。何等の破壊ぞ、何等の闇黒ぞ、たゞ惑ひ也、疑ひ也、恐れ也、驚き也、悲しみ也、寂びしさ也、孤獨也、神秘也、不可測也。半夜聲を揚げて天地の間に疾痛を訴へて、しかも感應の聲寂として來らず。この時むしろ一死の甘きに就かむか、須らく問ふべし、死は果して甘き乎、死は一切を了するに足る乎、死はわが當面の大問題たる自己存在の意義に光明を與へ得る乎と。然りと信ずるものは、進んで死を抱き、然らずと信ずるものは、死の淵より踵を旋らして、復び曩の大叫喚の巷に立つ。死する能はず、煩悶の闇黒に堪ふる能はず、さりとて曩昔の無意義の生を繰返す能はず。慘ましいかな、この矛盾、この懐疑、この煩悶。然れども君見ずや、この悲哀之人、煩悶之人の有する一種崇高なる權能を。國家はそのいかめしき歴史を以てして、道徳はその先天の當行を以てして、法律はその神聖を以てして、習慣はその古道を以てして、人道はその慈眼を以てして、美術文藝は其の快活優美を以てして、倘ほ皆膝行俛首、來たつてこゝに其の自家究竟の意義及位置を聽かんとするなり、聽かざるべからざるなり。これら一切乃至は全法界の實在を、一夢と空じ去らんも、はた其れをして無限の價値ある存在たらしめんも、竟ひに繫りてこの煩悶之子の叫び出づる一結論の聲にあり。煩悶は堪へがたき苦惱也、しかも人類無上の光榮也。

女子を論ず

茅原華山

「法學院大學演説」

世の中に女子がなくてはならぬ、固より論ずるに及ばぬ、然しながら青年學生に婦人がなくてはならぬといふことは、頗る疑問である、私は女子を卑しむるものではない、人格に於ては、男女固より平等である、近ごろ箕作博士の如きは、女子と男子とは不平等であると唱へられたが、私は矢張り神の前に於て、男女平等の人類であると信ずる

殊に男子がどうしても女子に及ばぬ點がある、其れは外でもない、子を産むといふことである、諸君決して笑ふべきではない、女子が子を産んで與れねば、種族が滅亡して仕舞ふ、米國では、女子の生産力が漸く減じて來る、英國でも結婚の數が減じ、従て生産數が減じて居る、日本では女子が盛に子を産んで與れるから、女子と出産とは殆ど問題に爲らぬが、佛、米等では、國家興廢、民族消長の大問題でルーズヴェルト大統領が或夫人に與へた書簡中にも此事が書いてあつた

産兒と哺育、之が女子の、少くとも其第一の、天職である、女子に此天職があるが爲に、性理上、心理上、男子と非常なる懸隔を生じたことを知られればならぬ

女子は此天職あるが爲に、肉躰のエネルギーが著しく此方面に傾注せらるゝのである、女子は腰部の構造大にして、胎兒を保護するに足るやうに出來て居る、又骨盤上の關繫よりして、女子の大腿は内に向ひ居るを以て、其歩行が内輪と爲る、筋肉も臀部と大腿部とに發達して、概して脂肪に富み、且つ柔軟である、此點を除けば、女子の躰力は到底男子に及ばぬのである、男子は强健長大、女子は短小脆弱、一は勞苦に耐へ

一は勞苦に耐へず、內臟諸器亦男子に比すれば小にして、從て機能も亦男子の如くイナージチックならず、腦味噌も男子よりは少量にして、心的作用の男子の如く旺らざるを示して居る、女子にして如何に男子には負けぬと威張つても脚部關節の發達が男子の如くならず、運動が遲鈍なれば、男子と共に二百〇三高地に突貫することは、甚だ覺東であるに相違ない

性理上の相違は、又心理上の相違である、女子が產兒と哺育とを其天職と爲し、家居の風を爲してより、進化の結果として、女子は男子の動的なるに反して靜的と爲り、男子の剛的になるに反して柔的と爲り、積極的ならずして、消極的と爲り、戰鬪的ならずして、平和的と爲り、壯麗ならずして優美と爲り、雄大ならずして細緻と爲つた、男子は其靜的、柔的、消極的、保守的、平和的、優美細緻の點に於ては、到底女子に及ばぬのである、然しながら若し女子が女子らしく發展するを以て得策なりとすれば、男子は男子らしく發展するを得策とするのである、Man must be manly; woman must be womanly と申します、靑年學生の時代は、最も男子らしく發展するやうに心掛ければならぬと思ふ

心理的に女子の最も發展して居る方面は、其情的方面である、女子は所謂イモーショナル、ライフを爲して居るもので、戀愛といふものは、イモーション即ち情緒とか譯するものである、女子の一擧一動は皆情の爲めに支配されて居る、情の爲には、智も其明を失ひ、意も其力を致す能はぬのである、故に女子がフハナチカル、狂熱的になつたなら、夫れはく實に恐ろしい、然しながら鞏固なる意力が之れに伴つて居らぬから、西洋の詩人が言ふた通り、女子の怒りは驟雨の如し、猛烈なれども暫時の間だ

女子を智的に觀察すれば、女子の感覺器ば男子のそれに比して、精緻且つ微妙で、殊に觸覺は最も銳敏で、視覺も亦物を細かに觀察識別するに於て男子に優つて居る、然れども物の全體の統一如何を見るは、遙く男子に及ばぬのである

器械的記憶力に於ては、女子は確に男子に優つて居ります、或女子教育家が、材料の精密なる蒐集と事物の斷片的部分的記憶とは、到底男子の及ぶ所でないと言つたも、此事である、蓋し家庭的生活は寧ろ細密なる記憶力を必要とするので、且つ受動的生活を爲す所の女子に於ては、推理力の如きは、深く其必要を見ないのである

凡そ推理し構成するといふには、記憶が必要なる條件なるも、唯一必要なる條件ではない、構成するには、推理しなければならぬ、推理するには、第一に分析アナライズしなければならぬ、第二に分析した各要素の相互關繫を知りて、之をクラシフハイし之をエキスプラネートして、後に之を總合、ジエネラライズせねばならぬ、女子は能く模倣、イミテートするも、構成、コンストラクションや、創始、クリーエションは女子の能くする所ではない

女子の世界よりは、コランバス、マゼランは出なかつた、又プラトン、アリストテレス、カント、スペンサーは出なかつた、學藝の世界に於ける女子の特長は、獨り文學と藝術とに於て發見することが出來る、イーセツチツク、センチメント即ち審美的情操に於ては、女子は屢々其天才を現はしました、我國の文學史を飾るものに、女子は少くない、平安朝に於て最も女子の天才を見出します、蓋し女子が情的動物である限り、其好む所は哲學に非ずして文學に在り、科學に非ずして音樂に在り、數學に非ずして繪畫に在り、美術に在るは、理の自然であらう、凡そ此等のものは、推理よりも想像を重んじ、頭腦よりも感情を重んずるので、且つ女子の靜的生活に適するよりして、女子に其天才を發揮する事が出

來たのである、然しながら女子の文學美術は、高遠なるよりも細緻、博大なるよりも纎巧、男子の寫し能はざる些小の點まで寫し出して其眞を失はざるを以て其長を見るのである

世には高秤女子ありて、今日まで女子は男子の爲めに壓抑せられたれば、男子に及ばなかつたのであると言ふものもありますが、女子にして女子たる以上は、男子の及ばざる所を有するを以て滿足せねばならぬ、男子の及ばざる所を有しながら、更に男子の爲す處までも踏み込まんとするは、甚だ越權の處置なるのみならず、到底男子に及ぶことが出來ぬのである、假りに女子能く男子と競爭するを得べしとするも、社會の進化は單純より複雜に進むのである、生物が男女雌雄を區劃するに至りたるは、男女雌雄の區別なき狀態よりも、確に進化したるもので、男子益々男子らしく發達するのが、進化律に從ふた遣り方である、男子が女子を解し女子が男子を解するは必要であるが、これは唯相互の人格を尊敬するを知れば足るので、男子が女化するのが惡い如く、女子の男化するのも、亦間違つて居る

名刀と青年

村井知至

「向上主義」

何事に限らず、苟も其道の薀奥を極めた人の言葉には、誣ふべからざるの眞理を含んで居る者で、取つて以て修身處世の、教訓とするに足るものが多い、私は近頃或る有名の刀劍鑑定家を叩いて、刀劍の利鈍良否を識別する標準を質問して深く感じた、其人の曰のに、凡そ名刀たるに缺くべからざる要件は曰く「良く斬れる事」、曰く「曲らない事」、曰く「折れない事」、曰く「品位のある事」、曰く「疵のない事」、と云ふ五個條であると、私は此言を聞きて、端なく斯う言ふ事を悟發したのである、夫れは、名刀に、要する資格と理想的の青年に要する資格とは、恰も符節を合するが如くに、少しも差違がないと言ふことである、抑も理想的青年に要する第一の資格は、實力あり技倆あり、社會に立つ、能く役に立つといふ事である、換言すれば、即ち善く斬れると言ふてある、即ち第二の資格は、確固たる信念理想を有し、持節一世、如何なる誘惑に遭遇しても、自己の主義を枉げないと言ふ事である、換言すれば即ち曲らないと言ふ事である、第三の資格は、意志が強固であつて、如何なる困難に遭遇しても挫折しないと言ふ事、即ち折れないと言ふ事である、第四の資格は、其風采擧動の威風と溫雅とを具へて居る事、即ち品位のあると言ふ事である、此品位と言ふ者は、處世上極めて、必要の者であつて、如何に學殖や才能があつて、意志が強固でも、品位のない者は、社會に立つて非常に損である、私の友人に一人の秀才がある、人品が何となく賤しい爲めに好い地位に立つ事が出來ない、此品位は猥りに邊幅を修めて、ハイカラがつたらと言つて、決して出來る者ではない、志想の高尚優美が、外に發して溫雅幽婉の品位ある風采となるのである、第五の資格は疵がないと言ふ事である、之を刀劍に見るも、如何に良く斬れて、折れず曲らず亦品位があつても、其刀劍に假令極めて小さい疵でも、疵があつては、最早所謂疵物である、人間亦然りて、如何に學殖才能あり、亦意志が強固で主義に忠實でも、其經歷に於て一點なりとも、汚點があれば、其一點の汚點は、絕えず其人の立身を妨害する、彼の教科書事件に關係して、處刑された人の中には、隨分立派の人物も少くないようだが、最早疵物であるから、生涯頭を擡げる事は出來ない、誠に氣の毒てあるが致し方がない、即ち理想的青年に缺くべからざる要件は名刀と等

しく善く折れる事、折れない事、曲らない事、品位のある事、斑のない事の五個條である。

國語假字遣改定案反對意見

白井光太郎

『日本人』

書物を焚き、儒者を坑にすると云ふことは、歷史に見えたれども、今の世に斯る暴戾無道の擧あらんとは思ひ設けざりき。然るに今回文部省の企てたる國語假字遣改定案の如きは其の實書物を焚き、儒者を坑にすると同一の結果を來す可き者にして、數十年の後には少數の圖書館を除くの外は、世上復我が國書を見ること能はざるに至らん。是之を解讀する人士の死滅すればなり。是れ我邦古來の歷史文學を無視したる者にして、和漢學を衰滅せしめ、延きて國運の衰退を招くを顧みざるの事業なりと云ふも、敢て過言に非ず。斯くの如き改定事業は征服者が、被征服者に對し强行する場合の外、何の必要あるを認めざることにして、假令此の度の露國との戰爭に打ち勝ちたりとて、斯る無謀の改革を敢てするに於ては、戰敗國の人民と同樣の狀態に陷り、日本人にして日本古來の典籍を解讀する能はざる有樣に立ち至り、徒らに外國人の嘲笑を招くの外、何の得る所なきや明なり。

我國古來の假字遣は條理整然たるものにして、改定假字遣の如く、無分別のものに非ず。又甚だ簡單なるものなり。唯ワヰウヱヲとハヒフヘホとを適當の場處に遣ひ分くると字音を一定の假字を以て表はすに就て少しく注意を要するものあるに過ぎず。

歐米諸國の國語には、綴字法即假名遣の不規則なるもの、發音の異るもの、文法の不思議に煩はしきこと、甚く可きものあれども、然も今日猶之を保存して改めざるは、國語假字遣の如きは、容易に改むべき性質のものに非ざるを以てなり。

先づ最初五十音圖の假名文字を改むることを無造作に定めたれども、是れ大なる曲事なり、阿行のオをヲに改め和行のヰをイにヱはエに改むるは徒に混雜を招くのみにして毫も益なし。阿行のオは母韻にして。の字に當るなり。ワ行のヲは母音と子韻と合して成りたる、一の成音を表はすものにして wo に當りオは其音輕くヲは其音重し。古來斯の如く遣ひ分け來れり。之を母韻と混ずるは無學の至りなり。輕重の區別を無視せるものなり。ワ井ウヱヲとアイウエオとは明に區別す可きものなり。之を互に入れ替へんとするは、非理の甚しきものなり。斯くの如き不思議なる改め方は、常人の考へ及ばざる所にして、外國人抔が故らに我國語を混亂せしめんが爲に、計畫するの場合にのみ有り得べきものなり。

（以下省略）

兒童に虛榮心を起させてはならぬ

松本孝次郎

『日本の家庭』

戰時にありて出征軍人をして後顧の憂あらしむることのなきやうにするのは、固より肝要であると信ずる。出征軍人の家族を慰問し、傷病兵に慰藉を與へ、其の他恤兵のことに力を盡すことも亦必要なることであると思ふ。併しながら兒童をしてこれらの事をなさしめんとするに當り

ては大いに吾人の注意を要するもの、がある即ち方法の如何によりて兒童に惡しき影響を與へ易き恐れがある。兒童をして唯に金錢物品の類を上述の事項に寄贈せしめんとするが如きは、大いに熟考すべきことてある。元來兒童は自ら獨立して生活して居るものではないからして所謂收入がある譯はない。從つて自分のものとして自由に使用し得る性質のものは殆んどないと云ふてよろしい。而して假令恤兵等の如き善き目的のためとは云ひながら、之が爲めに金品を親にもらひ受けんとするに至りては、あまり教育上おもしろきことてはないと考へる。兒童自身の手に成れる書畫の類を集めて慰問の材料にするとか、又は或る適當なる勞力に依りて得たるところを寄附すると云ふやうにしたいものてあると思ふ。恰も兒童に貯蓄心を養成するは必要なることてあるが、其の方法如何によりてはあまり喜ばしからぬ場合があると同じやうに、吾人は兒童に適當なる方法と云ふことを熟考せねばならぬと思ふ。そこて新聞紙上などて誰は何々を寄贈したり等の記事を見て、我も亦かくせんなど丶虛榮心を起し、方法の如何に拘らず、金品の寄附を望むに至らしむるは决して善きことてはない。吾人は深く兒童をして虛榮心の爲めに活動せざるように注意して居らればならぬ。

海外成功者の最大要件

杉浦龍吉

『成功』

要するに左の五點に十分の注意を拂ふが最も肝要てあらうと思ふ、

一、海外活動を爲さんとするには内外相應じ一致して事業の發達を計る事

一、約束期限は嚴重に確守する事

一、信用取引に重きを置く事

一、一時の損失は忍んでも將來の信用と永遠の利益を得るを專一の目的とする事

一、蚤の膽ッ玉的考慮を捨て大國民的膽ッ玉を涵養する事

從來の、光景では以上五點の中一ッも完全に行はれて居ない、浦潮の裁判所へ日本人の引出されるは何時も民事訴訟の契約違犯である、刑事ては殺人毆打等てあつて、一ッも破廉耻の爲めに裁判所を煩すことがない。西洋人が裁判所へ出るは多く破廉耻て、契約違犯などは殆んど無い、全然正反對の光景を呈し、日本人に破廉耻のないは、日本人の美德と稱されて居る程てある、其契約違犯の多いは大概内地商業者の約束期限を嚴重に確守してくれぬ結果てある、平和克復の後は東部西比利亞へ渡航者も多くあらむ、從つて商業の智識に富む人も出懸けるてあらう、從來の如く内外別々の考を持つてゐては、到底海外に於て活動することは、出來ぬ、故に如上の次第には最も深い注意をもつて、内外呼應するにあらねば、西比利亞に碁布する利益は皆洋人に攫はれて了ふのてある。

磊落な人は磊落な字を書き、謹愼な人は謹愼な字を書く。筆跡ほど人物を表すものはない。習字の等閑に附すべからざるとは、今も昔も西洋も東洋も異りはない。英國の政治家フオックスは、字體の野鄙亂雜を以て有名な人てあつたが、中年後頻りに習字に勉めたので、晩年の筆蹟は拙惡てなかつたさうな。俗に八十の手習といふ語もある。專門の書家ほどな筆蹟は望まぬが、せめては其人の品格と信用とを、傷けないほどてありたいものだ。(端書世界)

實用 園藝界 娛樂

第二年第五卷 ● 五月五日發行

園藝雜誌にして兼て植物學雜誌たる本誌は實に世の植物學講究者及園藝家の**師友**を以て期する者にして**山草**野草**西洋草花**の栽培より**盆栽果樹蔬菜**の仕立方に至る迄凡そ事の植物と園藝とに關する者は悉く是を網羅せり本誌は欄を分って植物動物譚叢灌漑百草雜錄紀行文藝質疑音信時報の數欄とし每號極彩色の口繪と數葉の寫眞版とを添え草花木竹を栽培する者果樹蔬菜を作る者の爲に摩姑の手を貸さん草木圖譜とする者なり殊に第二年第五卷よりは未だ上梓せざる**珍書**を掲載し猶續々是等の古書を掲げ讀者をして知らず〳〵數十卷の珍本を架上に備へしむ

實價
壹冊　金三十錢　郵税一錢
六冊前金　金壹圓五拾六錢　郵税共
十二冊前金　金三圓十二錢　郵税共
郵券代用一割增

發兌元　東京日本橋通四丁目角　**春陽堂**

藏經書院第二回大出版豫約募集

靖國紀念

大日本續藏經

第一輯　印度支那撰述部

第二輯　日本撰述部

目錄編輯　令久會　島田蕃根
文學博士　前田慧雲

目錄校閱　文學博士　南條文雄

評議員（いろは順）

文學博士　井上圓了
文學博士　井上哲次郎
京都佛教大學長　伊井知量
大派本願寺　石川舜台
醫學博士　長谷川泰
文學博士　芳賀矢一
統一學社長子爵　鳥尾得庵
眞言宗宗務廳　土宜法龍
文學博士　荻野由之
美術學校教授　大村西崖

大派本願寺　小田尊順
文學博士　加藤弘之
靈巖寺住職　神谷大周
上宮協會幹事　河瀬秀治
本派本願寺　利井明朗
大谷派大學長　吉谷覺壽
文學博士　高楠順次郎
文學博士　上田萬年
延命寺住職　上田照遍
高野山聯合大學　浦上隆應
妙滿寺派　野口義禪
傳道講習院長　黑田眞洞
理學博士　山川健次郎
文學博士　松本文三郎
圓福寺住職　見性宗般
前長谷寺管長　權田雷斧
日宗大檀林長　小林日董

文學博士　小杉榲邨
本派本願寺　赤松連城
早稻田大學講師　赤堀又次郎
東京　佐々木東洋
天台東部大學長　櫻木谷慈薰
第三高等學校教授　榊亮三郎
律宗覺尼苑學頭　北川智海
増上寺佛學院　道重信教
文學博士　三上參次
文學博士　三宅雄次郎
令久會會長子爵　三浦觀樹
東京目白僧園長　釋雲照
本派本願寺　島地默雷
醫學博士　森林太郎

贊助員（いろは順）

眞盛派管長　石山覺湛
興正派管長　華園澤稱

本門派管長　蓮胤日章
曹洞派管長　西有穆山
誠照派管長　二條秀源
顯本派管長　本田日生
南禪寺派管長　豐田毒湛
高田派管長　常盤井堯凞
本派管長　大谷光瑞
大派管長　大谷光瑩
律宗管長　大森覺明
眞言宗管長　長宥匡
富士派管長　大石日應
隨心院門跡　和田智海
醍醐寺派管長　和氣宥雄
法華宗管長　神保日惟
時宗管長　河野覺阿
大覺寺派管長　高幢龍暢
天龍寺派管長　高木龍淵

方廣寺派管長　長山虎堅
融通念佛宗管長　梅原靈巖
寺門派管長　山科祐玉
淨土宗管長　山下現有
西山派管長　安井月海
出雲派管長　藤善聽
山元派管長　藤原善住
永源寺派管長　蘆津實全
眞言律宗管長　佐伯弘澄
東福寺派管長　濟門敬仲
華嚴宗管長　佐保山晋圓
木邊派管長　木邊孝心
智山派管長　瑜伽教如
圓覺寺派管長　釋宗演
三門派管長　平光圓
曹洞宗管長　森田悟由
大德寺派管長　菅廣州

天人歡聲の裡に振古未曾有の大藏經出版は結了せり爰に時局の發展と共に又空前絶後の大出版を企つ即ち大日本續藏經是也

●續大藏經特徵の概略

●大體　諸大藏經以外及本院藏經に洩れたる各種の佛典を網羅す　珍本稀籍の絶版を同復し寫本として祕密に傳はれる多數の貢典を含有す

●目的　忠勇死節の士の英靈弔慰の爲に其靖國紀念として發行す

●内容　○緊要なる典籍全部に亘り校訂愼重句逗又は訓點精確なり　○各卷末に壯嚴なる紙槧兩面を設け一面は征靈忠烈戰死者の令名を奉安し一面には隨意記載の便に供す

●功果　眞理の貯藏所　佛道練磨の資糧を無限に供給す　○參考の無盡藏　全世界古今の諸學術に關し豐饒なる援助を與ふ　○材料の富源地　諸般の作家之に對すれば意匠自在恣に百花を手折るが如し　○唯一の大壯嚴　安置する所即ち佛陀の在る所三寶依て紹隆人天依て善利　○文明の指南車　人文を開導し人格を組成して萬物の精華を窮む　○至便の好結塊　佛祖の眞髓往哲の祕訣一座に集りて而も低廉なる代價この無二の寶物を得　愛道好善の諸士請ふ奮つて此優曇華に倖き絶世の寶典を歡迎せられん事を

●一　本院第二回豫約出版は靖國紀念大日本續藏經中第一輯印度支那撰述部　●二　製本の體裁は第一回出版中の本藏經と同一也　●三　字體は明朝四號活字一行二十字詰十八行二段　●四　用紙は別漉上等改良美濃茶表紙絹糸綴唐綿布コハゼ付五冊一帙入　●五　全部豫約部數は五百部（内地海外共）限り　●六　毎月一回五冊入一帙（紙數凡五百丁）出版し凡三ヶ年にて完結の見込　●七　正價一帙金七圓五拾錢　全部豫約減價金五圓部數の多少に拘らず割引なし　●八　豫約證據金全一部に付金拾圓第一回出版の一帙代金と共に引換拂込ものとす　●九　送本は毎月出版の都度代金引換の小包郵便にて發送　●十　送本の荷造費は本院支辨郵税爲換料は豫約者の負擔　●十一　豫約者へ毎月一回本院出版の雜誌大藏經報第一部贈呈す　●十二　豫約希望者は本院指定の申込書に記名捺印して申込るべし　●十三　見本は代金を要せず目錄は金五錢（郵券代用諾）御申込次第發送　●十四　第一

發行所　京都市油小路松原上ル麓町十二番戸（電話六七二番）

藏經書院

詞藻

（禁轉載）

爐のほとり

柳川春葉

大宮發の下り列車には、まだ一時間餘の暇が有るので、一人停車場に待合はすのも怠屈と、自分は直前の茶店へ入つた。

三月には入つたものゝ、寒氣はなか〱緩まうとも爲ず、斑の雪を戴せた山から錐のやうに鋭い風が降し來て、其處此處の墻穂の梅も半は莟を堅くしてゐる。

店へ入ると、正直らしい内儀が帳場から立つて來て、

「奥の御座敷が明いて居ります。何うぞ彼方へ。」

と揉手を爲ながら言ふので、

「否此處で可い、面倒だから。」

自分は土間に据ゑてある腰掛に歩み寄つた。

「てはお火でも澤山入れましやう。」

「然うさ。其方を早く爲て貰ひたいものだ。」

間も無く内儀は大きな十能に炭火を山程入れて來て、漆喰て周圍を固めた、圍爐裏風の低い火鉢に積揚げた。其火が熾に起るにつれ、四邊の寒氣は少しづゝ遠退いて、半生木の薪がプス〳〵と燃えるさへ、煙いといふよりは先づ嬉しい暖氣であつた。

火鉢の縁へ兩足を置き、少し身を反してゐると、股から腹、さては全身の筋が緩むやうな好い心持、以程戸外に勞働する人々の、冬の樂みは斯んなものかと、今更のやうに考へられる。

軈て内儀が剝盆の上に急須と茶椀を載せて持つて來た。

「今日は御天氣ても御寒さが甚いやうでございます。」

「然うだね、何時まで行つても暖く成る樣子が無い。」

「今年は又格別でございますよ。然しまあ其中彼岸にても成りましたら、大分違つて參りますてしやうけれど。」

自分は氣が着いて、

「何か食ふ物は無いかな。」

伸上つて奥の方を見ると、硝子箱へ入つた菓子や、蜜柑、鯣、鷄卵等が有つて、其後の棚には膳や銚子

が並んでゐる。

「蜜柑を五つ六つ欲しい。」

「畏まりました。」

彼は急いで持つて來たから、其中で性の良ささうなのを拾ひ出して、皮を剝きながら又話でも爲やうと振仰ぐと、內儀は何時か奧の方へ行つて了つた、家內の者の住んでゐる室には、六歲と四歲位な男の子が、先刻から仲好く遊んでゐたが、何うした機會か兄弟喧嘩を初めて、弟は急に破鐘聲で泣出した。

「え〻お客樣だのに又初めた。泣くぢや無いよ。」

「あい。」　弟は直に默つて噓唏を爲ながら座敷の隅へ坐る。

「勘太郞も何故泣かす！言ふ事を聞かねえとお父樣に然う言つて、打撲いて貰ふぞ。」

「俺は知らないよ。」

「知らねえ事があるか、然うしてつるなら洟でも拭いて遊ばしてやれ。」

「あい。」

兄は神妙に弟を介抱してゐたが、軈て狐鼠々々話してゐるうち、何時か又睦しく成つて、椽の前の庭に下りて了ふ。

「何うも惡戯者で、お客樣が居ても少しも遠慮を爲ないで困りますよ。」

「なか〳〵然うては無い、二人とも大和好く解るぢやないか。」

「何有、お客樣。何でも父親が可怖いばかりでさあ、妾共の言ふ事は少とも聞く事ではありませんよ。何うせ東京あたりの子供のやうに氣が利いて居ませんから、少とも役に立ちません。」
猶も話を續けやうと爲た時、突然店へ入つて來た二人の客があつた。
「入らつしやいまし。」內儀は例の愛相好く迎へる。
「新潟行きは未だ大分手間が入るかね。」
先に先つた五十許の老人が、濁聲を張上げて言ふ。
「未だ二時間と少し間がございます。」
「然うかね。」と老人は後に續いた十八九の若者を振返り「二時間の餘も有るとよ、ぢやあ休んで行くべえかな。」
「夫可からうよ。」
二人は可笑しな體裁で內へ入り、何處へ腰を下したものかと少時躊躇してゐたが、軈て自分の前へ來て、
「お父樣、此處が可かんべえ、火が澤山有るだから。」
「ぢやあ御免なせえまし。」
二人は押並んで腰を懸けた。
「さあく明いて居ますから御遠慮無く。」
と言つたが、自分は此人々の風采を見て、危く噴出さうとまで爲たのである。老人の方は奉書紬の稜の

磨けた紋付の羽織に、黄い秩父銘仙の綿入を裾短く着なし、兵隊のやうなダブ〳〵為た半靴を穿いてゐたが、肉色の襪が寛いので、烏賊の頭のやうな格向に足の甲へぶら下る上から、毛深い空脛を突出してゐる。帽子は二十年程前に流行つた、頭の尖の少し狹い山高て、地圖に見る河流の如き龜裂が幾筋も入つてゐるのを、虚飾も無く阿彌陀に引冠つて、しかも平然たる其有樣。

忰は糸織擬似の藍つぽい羽織の、襟先が四途路に曲つた代物に、手織木綿の布子を着て、其下に未だ新しい綿フランネルの襯衣、同じ穿袴下を穿き、是も爪先の寛い足袋を穿いてゐた。

老人は逞しい手で小な茶碗を取上げ、樂しみさうに一雫も殘さず呑んで（傍に急須が置いてあるのに）幾度も鼓舌を爲ながら、其茶碗を掌の中で弄くり、

「誠にへえ、氣が落着いたもんだ、俺は昨夕程樂に寐た事は無かつた。」

誰に云ふでも無く呟いた。此時忰は、自分の傍に置いてある密柑を然も羨ましさうに眺めてゐたが、突然老爺の方を向き、

「お父樣俺も密柑を買つて可いかね。」

「何だ？」　父は眉を顰めて「密柑だ、食いたければ買つて來い。」

首に釣つてゐた大きな蝦蟇口を引摺出して、

「幾個買ふだ。」

「幾個でも、お父樣も食うだらう。」

老爺は默つて首を掉り、軈て五錢の白銅を出して、
「是で三個も買つて來い、澤山だア。」
子息は喜んで立つたが、命令通りに三個買つて來て、釣錢を父に渡すと、然も嬉しげに其蜜柑を打眺め、大きいのから順々に膝の上に並べて、手を出したり入れたり、何れから取らうかと迷つてゐる樣である。
是には有繫に老爺も見かねたか、
「何を爲てゐる、馬鹿々々しいものだ、他人見たら。」と一寸と自分の顏を見て「他人が見たら笑ふぞい。」
と言ふと、子息は笑ひも爲ず眞面目な顏で、其うち一番小いのを取つて、大事さうに徐々と皮を剝き出した。
自分は是等の體裁を見て、内心餘り好い氣は爲なかつた。其傍若無人の振舞が可笑しいと言ふよりは、寧ろ苦々しく思つたからだ。それて再々其方を見るのも可厭で、成るべく面を背けてゐると、少時してから老爺は又思出したやうに、
「全くだ。俺は東京へ行つてから壽命が縮まるやうに考へた。」
何と無く自分に話懸けられたやうな氣が爲て、不圖目を見合はせると、彼は恰も夫を待つて居たもの丶如く、
「お客樣、俺今言ふ通り東京へ行つて懲々したゞよ。」

「何故ですか。」爲う事無しについ口を出した。

「馬鹿々々しい、腹の立つ事ばかりだ。全くさ、二度と行く氣は無えから可いが、俺は懲々した……お前樣は東京かね。」

「然うです。」

「ぢやあ斯んな事を云つては可く無えが。」と少し躊躇して「だが地から東京の者なら那樣事も無かんべえけんど、何だつてへえ法無しだ。」

「何が法無してすか。」

「眞實に法無しだ。」密柑を頰張つた子息が拍子の拔けた時分に口を出した。

老爺は難しい顏を爲て例の異形な帽子を脫つたが、其頭腦も鳴呼實に其物に適つて異形であつた。全體が宛然磨いたやうにつるりと禿げた處へ、耳の上から頸窩へかけ注連でも張廻したやうに一列に毛が並び、額の眞上にも約十五六本、鸚鵡の鷄冠のやうに突立つてゐる。未だ其上に驚くべきは、此老人の頭の形が帽子と同じく不思議に尖つてゐた事だ。是は帽子の爲に頭が變形したのか、頭の爲に帽の形が崩れたのか、其區別に至つては恐らく即答を與へる者は無からう。

彼は今徐に其滑な頭を撫てゝ、

「俺も怠屈だし、夫に餘り腹が立つから話すだがね。俺等は一體信州の北へ寄つた方の者だ。今度始めて東京へ來たのは、俺の舍弟が一人東京に居るだからね。尤も是はへえ去年までは九州に居たし、又岡

山か……にも居たし、官員だから時々方々へ遣られるのだ。」

と眤と自分の方を見詰め、

「俺は此通り何にも知らねえ田舎者でがすけんど、弟なら少とべえ自慢にも成る。何でも九州に居た時分は、知事樣から二番目とか三番目とかいふ位で、恐しく威張つたもんだとか言ふッけ。お前樣俺決して嘘は吐かねえ。」

「それでは書記官か警部長でも勤めて居るのでしやう。」

「何でも那樣事だッべえ。處がお前樣去年の事だつたが又役が上つて、今度は東京の役所へ來る事に成つたゞよ。尤も俺が弟に斯んな者の出來たのは不思議のやうだけんと、奴は稚え中から何でも人とは違つて居た。十五六の年に家を突走ッてからに、夫から何處へ行つたか、十年ばかりも音信しねえ。親類の者も言ふッけ、錄の奴は何うも膽魂が大いから、甘く行けば豪い事を爲るだらうとね。俺も然うは思つたが、然し迚も駄目な事だ。まあ／＼今迄少とも便の無え處から考へて見るに、大方死んで了つたので無からうかと。處がお前樣、不思議な事もあるものだ、丁度十六年目に便が有つた。」

然も聽者を驚かしたと云はぬばかり、老人は目を丸く爲たが、初めから其結末を聞いてゐた自分は、少とも意外とは思はなかつた。

「便がよ。」

老人は應が無いのを不滿らしく、又も仰山に言ふと、

「不思議だなあお父樣。」

彼の子息が熱心に言つた。二人は宛然打合せてゐたやうなので、自分は急に馬鹿々々しく成り、果は釣られてゐるのでは無いかと邪推したが、子息の樣子を見ると、何處にも那樣氣色は無く、ぽかんとして口を開いたまゝ、老爺の顏と密柑とを半分々々に眺めてゐるのが、正直正銘の愚人なので、隨つて此方の邪推も直に消て了つた。

「夫からへえ其手紙を見ると驚いた。話半分に爲ても甚い立身の爲たものさ。其時は何でも熊本に居たッけが。

其處て奴の事も解る。此方からも時々は手紙を遣つたが、熊本だ、岡山だと云つちやあ行つて逢はうにも及びもつかねえて、此十年ばかりは其まゝに爲てゐましたゞ。」

自分は何氣なく話を聞いてゐるうち、少しづゝ面白く成つて來たので、何時か熱心に耳を傾けた。

「處がお前樣、今度彌々東京へ來たについて、去年の暮だつた、其事を手紙で云つてよこし、一度は生れ故鄕へ歸つて、死んだ兩親の墓參りも爲たし、又兄貴の顏も見て、種々話も爲たいけんど、役人ちふ者は誠に不自由なもので、體は縛られてゐると同樣だから、急には國へ行く事も成らねえと神妙な事を云つて來たから、夫ならへえ東京だら然して遠くも無え事だて、俺が方から逢ひに行くべえと返事出したら、これは望む處だ、家中して來るのを待つてゐるといふだものな。」

老爺は語り來つて幾度か茶を更へたが、例の如く茶椀を弄つて、難かしい顏を爲出した。

「それから東京へ出て來たのですね。」

「然うだとも。」

思ひもかけぬ子息が横合から話を取つて、

「お父樣が俺にも連れて行つて遣るべえと言ふから、東京といふ處は未だ知んねえから、お母樣も行つて見ろといふから……。」

締の無い言葉でだら／＼と喋つては、奇麗に筋を取つた密柑袋を、一袋づゝ樂しさうに食つてゐる。自分は返事も爲ずにたゞ頷くと、

「其處で以てお前樣。」老爺は立更つて「正月に爲べえとも思つたが、東京は正月は忙しいと聞いてゐたから遠慮して、田舍の正月を濟してから、此忠六を連れて出かけたゞがね、……悴はへえ忠六と云ひますだ。是でも十八でがす。」

忠六と呼ばれる子息は、自己が名を紹介されたので、急に堅く成つて、莞爾しながら自分の方を眺める。

「來る道中も二人で何程東京の噂を爲たか知んねえ、俺も二十何年か逢はねえ弟の處へ來るだから、それはいろ／＼の事を考へ出すだよ。」

「嘸嬉しかつたでしやうな。」

と言へば、

「はあお察しの通りだアね。其處で以てとうとう東京へ着いたが、話に聞いたよりも大層な處さ。俺等

は宛然狐に誑まれたやうに、何が何だか滅茶苦茶に成りやした。」

老爺が大聲で笑ふと、忠六も一緒に成つて笑ひ出した。

「で、貴方が東京へ行つてから壽命が縮まつたと云ふのは、其繁華なのに驚いたからですか。」

「それがさ、然うてねえてがす、繁華だちうて壽命が縮まる理屈さ無えだもの。是には理由の有る事だ。」

老爺は彼の不思議に尖つた頭を撫て丶、ガツシリと腕を組み、益々難しい顏を爲たが、

「まあ二十餘年ぶりで弟にも逢た。其家内にもさ。子息と娘が三人有るが、皆に逢つた丶。他の者は何とも思はねえが、弟の顏見た時には驚いたアね、全然見も知らねえ者同様だからね。彼奴もへえ俺を見て涙流して居るッけ。何と不思議な再會だ言ふもんで……然し人間も變れば何でも斯でも變つたゞよ。邸ちうたら豪いもので、車曳も抱えて有れば、書生だ、女中だ、五人も六人も轉々してゐるだから、俺は全く驚いた。

忠六は口へ入れる種が盡きたので、滿らなさうに欠伸を爲てゐたが、軈て此家の子供が遊んでゐるのを見て、迂濶々々と其方へ出て行つた。

「一日二日は別に事も無えかつた。夫から三日四日と成ると、此處だあ俺壽命が徐々縮まり出したのは。最初は先づ言葉が可笑しいちうて笑ひくさる。何だつて夫は無理だけんど、家内の奴は俺等一言云ふ度に腹を抱えるだ。其中はまあ可い、段々高じると禮儀を知らねえとて惡く云ふ、歩くのが荒えちうて叱

る、それでも爲方が無いてへイ〳〵と聞いて居たが、子供や書生や女中までが、寄つて集つて馬鹿に爲出す。

斯ういふ事もあるだ。或時弟の留守に飯食う時に成ると、今年十二に成る娘つ子が、伯父さんの方では螽や蜂の子を食るちうが眞實かて。するとお前樣、俺返答する間も無く嬶の奴が口を出して、螽や蜂の子は恐な事だ、伯父さんの方では蚤でも蚊でも食べると言ひくさる。それからといふ者は子供が蟲せえ見れば持つて來て食へ〳〵と吐かすだ。」

口惜しさうに言つて

「斯んな事は可いとしても、未だ〳〵腹が立つ事がうんと有るだ。俺も我慢が爲されねえて、えゝ歸らうと何度も思つたけえ、折角東京へ來たもんだ、少しは見物でも爲て行かねえでは土産話も無えと思つて、隨分辛抱も爲て見たゞが……五日目頃に成ると最う愈〳〵駄目だ、嬶奴顏を見ても口を利か無く成る。奉公人は俺耳へ聞えるやうに、邪魔な田舍者奴が來たあ言うだ。忠六が事は子供までが馬鹿々々と惡口言ふ。

それでも有繫に骨肉は違ふものだ、弟ばかりは少しは大事にも爲て呉れたが、丁度昨日の夕方だあね、役所から歸つて來ると、用が有るからと俺を呼ぶだ。何だらうと行つて見ると、兄さんには誠に氣の毒だけんど、何うか近いうちに歸つて呉れと言ふだ。元來長く居る氣は無えが、餘り思の外だから、何故に那樣な事を言ふと聞いたら、お前樣が居ると俺の價値が下ると言ふだ。可笑しいて無えか、俺は俺、

お前はお前だもの、俺が居たちうてお前の價値が下る道理さ無からうと怒ると。—

老爺は何を思つたか、急に口を閉ぢて、熟と考へてゐた揚句、

「止さう。斯んな事を言へば弟の耻辱だし、俺の耻辱にも成るだからね……唯斯うだ。弟の言ふには、俺は從五位だからちうだ……成程弟は從五位でがす。今迄は我慢を爲て、出來ねえ辛抱も爲たけんど、最う迚も一時も坐つて居られねえ。俺今から歸るちうて、何でも引拂つて汽車まで來ると、其汽車は大宮止りだといふ。何處でもへえ構はねえ、斯んな氣持の惡い東京を離れゝば可いと思つて、昨夕は此處へ泊つたでがす。」

自分は此人の話を聞くうち、絶えず氣の毒だといふ考が起つて、而して目の前には東京の或社會の家庭が歴々と映るやうに思はれた。

老爺は太い嘆息を漏らして、

「あゝ東京へ來るのを樂みに爲てゐたが、俺等が爲には來ねえ方が益だつたよ。兄弟といふ者も、長く逢はねえでは他人よりも駄目でがす。何有從五位だつて俺等だつて、同じ米の飯食うだ。自分の國の言葉を言ふのが耻辱だら、立身するのは要らねえ事だ。」

「若し、其方の旦那様、上りは唯今直に參りますよ。」

内儀が注意するので心着き、時計と發車の時間とを見比べると、既に十分しか間も無いのである。

急ぎ勘定を濟して、彼の老人にも袂別の挨拶をすると、彼は立上つて叮嚀に腰を屈め、

「飛んだ失禮しやした。田舎者だて。」

子息はと見廻すと、何時の間にか奥の座敷へ上り込んで、六歳位の子供を相手に、餘念も無く遊んでゐた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

上り列車に乘込んだ時に、我行方には虚榮心と、僞善と、煤煙と、砂埃とに濁つた空氣が充ちてゐると思ふと、何だか可厭な心地に成つて、自ら彼の老人と感を同じう爲ざるを得なかつた。而して自分は彼等の爲に熱心に其歸國を祝した。

山長く水清き處、豈たゞ風光の佳なるのみならんや。人の誠や家庭の快樂は、何時の世までも其處にばかり殘るのだらう。(完)



がまゝ

白也

○

いかに方々、江戸の色見る氣はなきか、斯うした長い年月、五十三次の道中双六、まだ振出しも知らずとあつては、少なからぬ恥辱、某村會議員といはれて末席をけがす者が、さりとはきつい時世におくれやう、幼學便覽此年になつて放されば、平字仄字はどうやら知れど、何が扨て今申す始議、噂には聞きあきた都の名所、上野の博物館淺草の觀世音、裏へ廻つて神ぞうれしい花處、花舞の菩薩の靈

現いやちこにして、あの時のうれしさどう忘らりよと、村の輿入伊勢詣りの歸るさ、足序に廻り込んでたつた一夜の情乍ら、うちの女房のおたふく見ともないと、今日が日まで口癖のやうにいふにぞ、嬶ぢやとて默まつては居ず、まい〲要ないいさかひ起すは方々知つての通り、自分見た事がなくては、輿入の不心得叱りやうもないわけと、年甲斐もない事云ひ廻つて仲間四五名出らい、始めて都に入りこんだ其夜、何の分別もなく廓へ入り、魂を飛しての亂痴氣、すつとこ踊にやんやと云はれてあらば足鼎も被らん勢ひ、きぬ〲の名殘踊しともないと泣かれて、内兜すつかりと見ぬかれ、二日三日の流連に春の夜の夢心地、げに春宵一刻の價千金といふ口の下に、勘狀書つきつけられて膽をつぶし、寄集つて財嚢たたくに、殘んの金のありやなしや、今更嚙むべき臍はなく〲、風呂敷包の着更質しろなして、そこばくの金子になし、觀世音さへろく〲とは拜まず逃げるやうにして歸村なして、いづれも家につゝがなかりしを祝ひあへりとぞ、

○

家居のつき〲しくあらまほしきこそと、唐樣で書く何代目かの男世のそしり人のいさゝめもとんと聞かず、親から讓られの住家とりくづして、玄關は斯う、客室は斯うと、采配ふりたゝて棟梁を選み、あまたの人足入れて念には念をも入れ、今までの平庭に築山築かせて、松の緣に紅梅のなまめかしきなと氣をもみ、莫大の金費して出來上つた數奇屋、某長者の住家と聞えて恥かしからぬながら、夫が爲め身代少なからず傾き、折角の家居にも長閑にはあらでうなされ勝ちの夢、美しい庭詠めても催さるゝ歎息の哀れさ、色々と思案盡して勝負事に手を出し、ぬれ手で身代つかみ直さんたくみ、これもがらりと外れて大きい穴一とまわり大きくし、餘儀なく家屋敷悉皆人手に渡して、此土地にも住みうくなり、旅烏に一隔ちり〲となつて、今は都の裏町にありとかや、

○

田舍に住んで七部集位も讀み、蛙飛び込む池を鑿ひ、焙爐の匂ふに山吹の花を植ゑて、のつと日の出を梅林をも出來、時には猿蓑の講義片言ながら仕る、樂隱居の氣安い暮し、人々に宗匠と云はれて此頃ても頭巾も被る、若い衆の運座に招かれて短冊幾枚か書く勢ひ、彷ら都々逸も作つて年にも似ないぬれ言、扨てもお若い宗匠といはれて氣ばかりぢや、身體はとてもと高く笑ひぬ、さる程に例の通り、若い衆都々逸の卷をもて來て、度々の御免倒恐縮ながら、お隙を御覽じてと恭しく差し出すを、おつ取つてずらと見、卷の奥へこれはと思ふを二ッ三ッ拔いて、又其奥へ軸と書いて事々しく、ぬしや私しといふが多きは凡て初心のわざよと前書まで添へ、

ぬしとお前と私しがなけりや
　ろくな都々逸出來はせぬ

とぞ憎まれ口たゝきぬ、若い衆口惜しさものに思ひ、どうにかこの仇打つてやらうと、車坐になつての談合、持ち合せの智惠袋、會心の者共なればみゝみ隱さず出しくらべて、宗匠がお顔念入りのいゝもあるを幸ひ、これはどうだと一人がいふに、やんやの聲に一決した

都々逸

　いもがありやこそ人間らしい
　　猫やちやんころにやいもはない

と短冊とりいてゝ手よきにかゝせ、これにはわしもぬしも御坐らぬ、お氣にめしてやと宗匠に示すに、大笑ひになつて濟まうと思ひの外、

眞赤になつての憤り、心外千萬の者共、又とお前たちのもの點すまいと、疊を蹴つて歸られしにぞ、今更に氣の毒になり、村長樣賴んで詫びて貰ひ、さんざんのいやみ聞かされて辛くも元のお機嫌、頭巾破りの宗匠樣や、

○

今日思ひ出づ旅衣、きらくをいつと定めんうかれ男、住家もとめん量見露なく、西國の方へと志し、また夜深くも雲井の月、出る都を夢や現や、昔ならどうして三百里の旅、水盃に涙うけあえぬなげきを、開けりたやの世は氣輕く、親類緣者へ挨拶の一つにも及ばず實は兩親にも内々、口にはそれとも岩清水、祇園の夜の櫻うつり香袖にしめて、白粉になる水で洗つた玉の女の子、ちよつと見て來やうの考へ、何處も過ぎ彼處も過ぎて、漸く着いた京の都、たゞちに車飛して、さる旅屋にかりの住居、何はともあれ一風呂あびて、汽車のほこりさつと流して適の東男、ふらりと出てゝ京極から祇園、處替れば品替る珍しさに、夜の更るまでさすらひ、歸る路ころり忘れて幾度びか聞けど、お上りやしてお曲りやしてとばかり、上るとは何方下るとは何方、日の出る方を東とは知れど、扨てどちらから日は出るぞと、樣々に見案すれど持ち合せの磁石もなく、乘らうと思へど車も見えぬ不仕合、まゝよと傍の旅屋に飛びこみ、又しても此處を假りの住居、一夜に二ヶ處の宿帳につきぬとぞ、

○

惣兵衞と申す者　今はなき數に入つた昔譚ながら、此男何物にも價をつけるが癖、人の持物誰彼の遠慮はなく、この煙草入のかますはよい皮、何程位の價はたしか、この駒下駄は誰のぢや、疊が惡い安からうぞ、高く買つて何程が止めと、時にはあられもない安價を付けて、いやな顏さるゝ事も稀からぬが、一と歲サる御方の吉事に招かれ、紋付き着なしてまかり參じ、樣々の御振舞恭けなく頂くに、器物は更なり御料理のくさ〴〵、魂消る程のけつこうさ、箸もつけかねてと見かう見、すばらしい事ぢや、この干瓢とて尊く見ゆるぞ、又このお平はたいしたもの、どう積つても何程が物はたしかと獨言く、傍の人あまりの事に思ひ、これはしたり輕い口ぢや、今日は又ない吉事の御座敷、價値つけるも時にこそよれ、きつと嗜むがよいぞやと、親身になつての異見に首を縮め、重々恐縮の不重寶、そなさんの御異見仇とは存せず、大きな恥かゝいて濟んだもそなさんのお影、二兩や三兩の安價ては御座らぬと、眞顏になつて云ひしかば、夫より人々價つけ惣兵衞となん仇名しける、

うらの森の杉の木へ三十三才が巢をかけたら、いたづら盛りの弟が取つて了つた、今度は西側の檜へ來て一生懸命に巢を作つてゐる、小さい可愛らしい女夫づれ、朝から晩まで仲よく働いてゐるしほらしさ、可愛さうだからもう巢などとるなと弟を戒めたが、近頃は巢も牛分位出來たらしいのに、いつも人が大勢ていぢめてゐる、ほんに運のわるい三十三才、

○

聞きわけなきは初戀、何事も我儘一ぱいの一人娘、一本松の思ふまゝに脊も心ものびて、初めて切ないといふこと知つたれど、猶我儘てかなうと心得、親たちに無理な涙、はかなきは忍ぶ戀、泣く斗をぞといひけんもあはれ、うれしきは逢ふ戀、待つ身を詫びし甲斐も有明、と今更惜しや別るゝ戀、かりそめの小酒盛して、屹度々々と念押して誓ふ戀、後朝の文して又の日をとぞ契る戀、口說も漏れ

易き恨みの名立戀、なき名ぞと思へど君が名をとぞ惜名戀、少しほどほりさまさうなど云へど、扨ても忘れぬぞ口惜しや増戀、切なる戀に命をもと心さだめて、身を害ふは愚に似たれど世の常なり、其外は片戀、相思戀、僞戀は恨めしけれど、情ありげにてなきは遊女の戀ぞ、

歌

尾上柴舟選

○　前田夕暮

美しう沖の燈臺かすむ夜や小唄に越ゆる磯のまつやま

これ見よと毒草かざす子のゑまひあゝわざはひやいざなひのうた

行きずりにふとならひえし琴のうた連翹黄なる小垣とおぼせ

虹の橋加茂をまたぎて淸水へよこなる朝を京のかね鳴る

風吹くよ菜の花霞遠がすみ野に立つひとに春かぜ吹くよ

毒草の花もて香もてかざりたる戀の花環をかむりとほこる

書にせむと繪の具とくまに消えにけり姉にすねたる夏の朝虹

○　村田愛美

劒うたふ詩人の血汐かれにかれてこの頃いでず若きケルネル

かくて今わが名わが榮とことはの戰史に刻らむと男の子は起てり

たゝかひに東亞の天は光明えていま新星はたからかゝれり

この春を詩に幸なきわれながら今宵たま〳〵ゑみに入りぬる

追懐は若き歌人が趣ある巻むかしの春を夢とひらくよ

色やいづこ香やいづこ年をへて戀の園生はふりにけらしな

○　若麻績長風

おごそかに君がふります銀鈴にうたの大野は今めざめたり（選者の君に）

むらさきの夕靄せまる花の戸や樂師うぐひすまだ歸り來ず

繪日傘の夕日につゞく花見堂花の木の間を鐘なりわたる

山吹の里の少女がとつぎにしさくら小島の夕がすみかな

○ 林漁村

楡の香に森をたづねてうたひ來といひてわかれし戀はふりたり

故里や母にみられてかくれたるをさなき戀のむかしおもほゆ

初夏の風やはらかき朝の森ふたりが歌にやまどり鳴くよ

山にしてたま〳〵えてし戀はふりぬ櫻さきなば京にかへらむ

おん歌のたかきしらべの輿に乗りて森のゆふべをまよひし子なり

みなさけに生ひし秀才の御弟子らが末にひとりの子と具したまへ（柴舟先生に）

○ 塚田柳虹

人は誰そあまりに低きしらべなり花野の末に月の入る頃

○ 吉成桂美

相見るや春に罪もつ憂の子まづみ手とるになにを語らむ

○ 松本春潮

春わかき花にこもれる戀守ると潮八千たび八洲をめぐる

佛佗伽耶菩提樹淡う霧這うて古りし聖者がやすき守る

月うすき夜をぬる蝶の息にふれて花綻びぬ野の名なし草

歌に古りし奈良は戀にも古りたりな三笠春日は妹と背の山

君は今紀路に越えしと見て覺めぬ小鼓抱きて寐し夜半の夢

うぐひすに留守をあづけて梅の宿春を旅なる年わかき繪師

▲歌募集　五月十八日限り、東京本郷區西片町十番地ほの部尾上柴舟宛の事

神　繞石選

朝戸出の神に賽する涼しさよ　初聲
神棚に灯を點じけり蚊のうなり　同
藍刈るや犬神祀る阿波の村　同
玄關に水打つてあり御神燈　白江

御神馬のかくて果つゝん五月雨　空木
氏神の一本榎茂りけり　石羊子
百年の神の榎の若葉かな　香洲
鷄あまた熱田神社や楠茂る　秋良
神官の馬上にかざす日傘かな　四緑
麥の秋疫病神をはらひけり　五遷
夕立や風の神追ふ雨の神　同
雲蒸して鳴神遠き夕かな　青龍
杉の根に清水湧くなり道祖神　同

選者吟

葉櫻の神の馬場や朝嵐
繪日傘の子連れて神に詣でけり
松落葉神殿風の吹きとほす

六月分課題　豆の花　五月十八日限
七月分課題　夏野　六月十八日限

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛の事



評論

アンチセシチズムとジオニズム

(上)排ユダヤ人問題

文學士　煙山專太郎

今を去ること二十年ローマの史家タキッスはユダヤ人を評し且其性質を描きて曰く、彼等相互の間には、並びなき忠信あり、慈惠の美風常に活動するも、彼等以外の世界に向ては休みなき憎惡の心、動けりと。ユダヤ人の二十餘年にわたる歴史變遷は大體に於て大史家の言の過たざるを證するに似たり。ギリシア、ローマ及中代に於けるユダヤ人排斥の悲劇は蓋し之に由來せり。殊に中代に至りては、基督教熱の歐洲の全土に熾なりしよりして寸毫も異敎の徒を假借せず、專ら宗

敎上の動機に於て彼等を排擠したりき。然るに十九世紀の今日に及びては、風潮急轉して之が事情は復雜し來り、所謂アンチセシチズムなる別種の形式を取るに至りたり。人、或は之を揣摩して云ふ、今日の排ユダヤ人運動の宗敎上の敵愾心に由來せるは、毫も古代及中代に異ることなしと。或は人種的の排外思想に源因すと說き、又或は經濟上社會上の排擠嫉妬に起ると說くなり。されど吾人は、眞理がこれ等の何れにも偏在せずして、內外雜多の事情錯綜して各地に於ける排ユダヤ人の國民的感情を激越せしむるに至りしものなるを思ふなり。而してこれ等の動因の果して何れが今日の反情を齎すに於て最有力なりしかと問はゞ、そは蓋し、社會上、經濟上に於ける競爭其物にありと答ふるこそ恰當なるべし。

　ユダヤ人の世に處する、何事に對しても理財の念を離るゝことなし。彼等が其間に在て獨り兒童の敎育に其財を投ずるを吝まざるは、洵に異例なりとすべし。然れどもこれ思ふに彼等の成功の一原因たらずむばあらず。彼等は如何にも宗敎に熱着せり。其ラッビの敎說に固執し、古風の儀式、傳說を崇奉渇仰して止まざるは、今世文明の一異彩たり。されど如何に容易に時世と推移せざる彼等なりとても、其間、又、這般の固定的流風に反對するカライム・ユダヤ人の如きものなきに非ず。彼等の間に傑出したる人々の中には、往々にして却てユダヤ敎を排し、已に同胞を貶斥するものすらも存するなり。スピノーザ、曾て賄賂を以てユダヤ敎に復歸すべきを慫慂せらる。彼斷じて動かず。ハイネは一八二九年「ルッカ町」なる一小詩片をものして己が民族を罵倒し、これ鰐魚と僧侶の國なるエジプトより來りし原罪の一民族にして、其皮膚病と剽盜せる金銀器との外に、所謂實驗宗敎なるもの及敎會なるものを齎せしものなりと冷語せり。吾人はもとより、今世に於て歐洲に宗敎的反情なしとは云はず。自由思想家として、哲學者として眼中、些の情實差別を認めざるべきギオルダノー・ブルーノーや、ウォルテールや、フォイエルバッハや、ショーペンハウエルや、將た彼の盲哲人デューリングの如きにありてすら、なほ公然、ユダヤ人の排斥せざるべからざるを叫びしならずや。吾人は又彼の正敎は獨裁政治を以て萬能なりとするロシアに於て、政府及人民の公然、之を標榜して嚴壓をユダヤ人に加ふるの事實なるを知るなり。アレクサンドル三世の治世に於て頻々として行はれ、又近く一昨年に於

イキシネフに行はれたる慘劇は、即ち之に外ならず。然れども、此等の運動は其眞動機こゝにあらずして却て他にあり、會々名をエホバの美名に藉りて其發心を發露したるに過ぎざるのみ。實理實利の今世に於て列國の政府人民が空漠たる單に信仰、理想の爲に此の如きの大事を起さんこと、吾人の信ずる能はざる所なり然らばユダヤ人は果して如何なる社會上の事情によりてか方今の世界より排斥せられんとする。これ吾人のこれより序を追ふて觀察せんと欲する所なり。

人、往々にしてユダヤ人を以て非常に富裕なりとし、金權の彼等に歸するを以て國際的患害なりと論ずるなり。ユダヤ人を以て恰も盡くシャイロックやファギンの再生たるかの如くに唱ふるなり。然れどもこは其實彼等の眞狀に通ぜざるものゝ言なり。如何にも歐洲の或場所によりては、ユダヤの仲買や高利貸の頗る勢力を握るものゝ存するは事實なり。然れどもロスチャイルド家は、之を例外として、兎にも角にも一流の富豪を以て目せらるべきものは、眞に寥々たるものなり。最近のユダヤ年鑑によれば、彼等の數はロシアに五〇八二三四二人、オーストリア及ホンガリアに二〇七六二七七人、ドイツに五八六九四八人ルーマニアに二七六四九三人、トルコに二八二二七七人、オランダに一〇三九八八人、フランス、八六八八五人、イギリス、一八八〇〇〇、イタリアに四四〇三七人、スウイス、一二五五一、セルビア、五一〇〇、ギリシア八三五〇デンマルク五〇〇〇、スウェデン、ノルウェー五〇〇〇にして歐洲全體にて八七四三〇三三、歐洲以外のものは、概算アジアに三四二四四〇、アフリカ、三五四五〇〇、アメリカ、一五五六一二八、オーストラリア、一七〇三三にして、現在の世界に於けるユダヤ人の總數は、一千百万餘なりと云ふと雖、今之を其の半數以上を占むるロシアのユダヤ人に付て見るに、十五万乃至二十万ルーブルの富を有するものは、僅に五万乃至十万位のものにして、これ等の財はロシア・ユダヤ人の有する殆んどすべての富を包含すと云ふも可なれば、殘る四百九十万有餘の最大多數は、一定の生業を有せず、只、朝に夕に、糊口の途を求めて流遇する遊民たるなり。彼等は、旅行の自由なく、政府の指定に出てる都市中の一地區におし込められてこゝに苛烈なる生存の競爭に驅逐せられ、非常なる不衞生と不健康との間に纔に其氣息を繫ぎつゝあるものなり。ガリチア及ルーマニアのユダヤ人も亦其慘狀に於てロシア・ユダ

ヤ人と甲乙なし此等の地方に於ては、かゝる無職のユダヤ人はもとより如何なる惡德と雖も、之を行ふを憚らず。彼等はアンチセミチストの非難する如く、公然少女の賣買を行ひて之を各地に輸送し、ガリチアポーランド及ルーマニアのユダヤ賣淫婦は、今や南アメリカの諸大都、コンスタンチノプル、レヴァアント、エジプトより遠く印度、シベリア香港シンガポールに至るまでも横行濶歩しつゝあり。されば、一八九八年、パリ、ベルリン、ローマ、キーン等諸大都のラッビ連は、ヘブライ文の檄文を如上三州の同胞に配布して其惡風を杜絶せんことを試みたりし事あり。ユダヤ人問題に付て最平和なる唯一の國はホンガリア是なり。然れども此國に於てすち、排ユダヤ人の運動は今や漸く其芽を發しつゝあり。概して之を云はゞ、アメリカを始め英、佛、イタリア等西歐の諸國は、在住ユダヤ人の數の少きだけ、人種的社會的及宗教的の軋轢を見ること比較的に少きに反し、東歐の諸國は、ロシアと云ひ、ルーマニアと云ひ、ブルガリア、オーストリアと云ひ、之が爭鬩のこゝに最も激甚なるを發見するなり。何となれば、無賴遊民の多數を有することは、風紀、衞生其他種々なる點に於て一國一社會の患害たればなり。

ユダヤ人の排斥せらるゝ、其慳吝の質の之を招ぐもの尠きに居らざるべきも、吾人は諸種の事情を綜合して其寧ろ彼等が貧民問題のそが主因たらざるべからざるを斷ぜんと欲するなり。世界に於けるユダヤ患の眞相は其極貧と云へる事にあり、十九世紀の後半期に於て漸にして熟成したるアンチセシチズムの熱狂運動は實に之が成果に外ならず。ドイツ若くはオーストリアに於けるユダヤ人排斥黨がユダヤ富民の多くが一般人民を虐して自ら富を吸收する旨を訴ふるも、こは一小片面を見て全體に通ぜざるの論にすぎざるなり。

十八世紀より十九世紀の初半期にかけては、ユダヤ人は歐洲一般に頗る良好なる境遇にありき。これ十八世紀に於てはルーソー及アンシクロペヂストの徒が唱道したる天賦人權説の餘澤により、彼等が到る處に好遇せらるゝの傾向ありしと、及民主主義を標榜して東歐の專制君主と戰ひたりし大ナポレオンの寬政との爲にして、次で十九世紀に入りてよりは、各國に民主立憲の運動の起れるにつれて社會主義の勃興し、各國の政府も一時は彼等の懷柔に專心せざるべからざりしとに源因せしなり。さればユダヤ人の最大多數を有するロシアにありてすら、時のツアル、アレクサンドル二

世は、頗る之に向て仁政を施し保守的なるイギリスに於ても一八五八年七月二十六日を以てロスチャイルド男を以て同國議會の一員たらしめし程なりしに、プロシア、フランス戰役の後、ドイツの勢力、旭の昇るが如く、而してさしも一時歐洲の中原を風靡したりしマルクス、ラッサル等の國際勞働者協會も、其分裂の結果亦往時の猛威なきに及びてや、ユダヤ人に對する反動の趨勢は倏忽として其間に現れ來り、政略上かつてはラッサルの運動を援護したりし老猾なるビスマルクの却りて此勢力を助長するありしよりして、一八七八年、帝國議會の解散に次ぐ七月三十日の總選擧に於ては、保守黨議員の數俄に增加して帝宮禮拜堂の牧師たるアドルフ・スチュッケルの如き卒先してユダヤ人の排斥せざるべからざるを唱へ、彼の雄辯によりて翌年十月ベルリン及ドレスデンに排ユダヤ人同盟の組織せらるゝを見るに至れり。此等の徒はビスマルクの政策を贊し、中にはプロシアの議會に提出するにユダヤ人を盡く國民學校及大學校より排斥し之が公職に就くことを禁ずべき旨の建議案を以てする者あり。皇太子及妃は先づ之に反對し、モムゼン、グナイスト、ドロイゼン、及びウィルヒョー等の諸大學敎授も、連名の公文を發して熱心に其非なるを論じ、爭論、一時當時の社會に喧かりき。ドイツに於ける此反動の勢は、其西隣なるロシアにも及び、殊にアレクサンドル二世の弑害者中には、ユダヤ人の參加せしものもありしかば、彼等を撲滅せよてふ聲は政府民間を問はず、何處ともなく、高められ來りて、平生、利害の衝突よりして之を憎める者や將た宗敎上の偏執心よりして窃に之を敵視しつゝありし者は、機乘ずべしとして盛んに愚昧の農民を挑發煽揚せしかば、帝、死して僅に一閱月なるに、ユダヤ人の住める帝國の到る處に毆打、破壞の中世的蠻行は演ぜられたりき。各國、之を見て痛く其亂暴を非難するに及び、ロシア政府は亦調査委員を任命して之が善後の事を議らしめしが、其結果、終には所謂イグナチェフ內相の五月法、發布となり、ユダヤ人は村落にあるを禁ぜられて盡く大都市一定の區域內に群集せざるべからざることゝなり、之が排斥熱は政治、社會、宗敎等すべての方面よりして彼等の身邊に迫り來れり。アレクサンドル三世の治世は、實にロシア政府のユダヤ人排斥運動を以て名あるものにして、當時、暴壓せられたる異敎民のロシアを去りて各方に漂浪するもの尠からざりければ、一八九一年、各國は又もや、之に向てべ

テルブルグの政府に交渉する所あり、ロンドン市民も亦、ギルド・ホールに集まりてツァルに請願する所ありしに、アレクサンドル帝は、自國の大使を經て市長に願意を聽許する能はざるを傳達せられたり。如何に穏順なる英米諸國と雖も、かくの如き貧困、無頼なる多數のユダヤ人の頻に其境に移り住するを見ては、又之を默過すること能はざるなり。機を見るに敏なる米國政府は、即無産外人を調査し、一八九一年、突如、一の法律を發布して、殆んど外國貧困者の太西洋岸の諸港に上陸するを禁止しければ、主としてロシア、ルーマニアの諸國より窘逐の笞を脱し來りたる多數のユダヤ移住民は、滔々として英國に集まり、ロンドンのホアイト・チヤペルは惡習と不潔とを以て首都の風紀を害するの有様となりければ今は英國にも亦新に一種のユダヤ人排斥黨を見るに至りたり。ドイツは殊に排ユダヤ熱、旺盛にして今日に於て公然、アンチセシチストを以て帝國議會の議席を占めつゝあるもの九人あり。彼等は選擧の都度、同主義者を推擧して頻に黨勢の擴張を謀りつゝあり。フランスに於ける此運動は輓近、ドライフス事件の大騷動に於て其一端を推すべく、ロシアは、ニコライ現帝の初年に於てユダヤ人を寬待し、宛然、先帝の壓迫政略を一變したるの觀ありしが、最近時に至りて即一昨年キシネフ虐殺の大事件あり。以て平靜の世界をして之が兇暴蠻虐に呆絶せしめたり。キシネフ全人口の三分の一を占めたるユダヤ人は自ら曰く、其五六十人を撲殺せられ、數百人は重輕の傷を負ひ、殆んど二千の住家は全く破壞せられ、其他に多少に拘らず、損害を被りたる家族一万二千を數ふべかりしと傳ふ。而もこは地方、中央の當局者の冥々裡に於ける助力後援によりて起されたるものなりしこと、確然たる徵據の之を示す所なるは洵に、驚くに堪へたりと云ふべし。キシネフ事件の事、未だ讀者の耳に新なるべきを以て吾人はこゝに贅言せざるべく、之を要するにユダヤ人排斥の運動は、詩人文客の往々にして之が不都合を鳴らすものあるにも拘らず、毫も之が衰頽の狀あるを見ざるは今日の有樣なり。

文藝時觀

ホトヽギス派の文章と名文家

ちよいん生

(上)ホトヽギス派の文章

▲お恥しい次第ぢやが僕は近來初めてほとゝぎすの文章に感服した。其前にほとゝぎすを買うたこともあり、又俳句を讀んだこともあつたが、終に其文章を讀んだ事はなかつた。文章を讀み初めたのは四五ヶ月前からのことだ。讀んで見ると實に面白くつて／＼たまらぬ、古いほとゝぎすも集めて日に觸れ次第讀んで見た、讀めば讀む程いよ／＼面白い妹にも讀んで聞かせた、友人にも讀んで聞かせた、少しく文學趣味のある男と見れば親父の友人にも讀ませた。或理屈家の友人の外は誰一人面白いといはぬものはなかつた。然し性來世話好きて我趣味を人に移したい僕はまだ何となく物足らぬ氣がしてならぬ。てこゝに聊か紹介の筆をとつて讀者にもかゝる面白い文をお勸め申すのである、若しまだお讀みにならぬ方があつたら早速讀んで御覽なさい。

▲ほとゝぎす派の文章の面白味は一言以て之を掩へば其溢るゝが如き俳味にある、然らば俳味とは何ぞといふと之を正面から適切に說くことはなか／＼六つかしい、て僕は之を裏面から槪言して其他は以心傳心讀者の契會に待つより仕方がない。俳味とは厭味の反對である、俗氣の反對である、執拗の反對である、といふより外僕には說明が出來ぬ。若し之を正面から評して、締て、輕く、垢拔けて、サツパリとした趣は知る人ぞ知る‥‥なぞと來ると彌助の形容をもぢつたやうな厭味たつぷりの文句となつて俳味に反すること甚しい。

▲ほとゝぎす派の文章は境を天地以外の夢幻界に求めない、思を現實以上の理想境に馳せない、否天地の中でも市街や郊外などを選み、現實の中でも平民や動物などを選む、即ち其取材の範圍は直ちに市井の出來事である。而して其中に無限の詩趣と感興とを見出す、苟くも俳人的洒々落々たる胸襟を披いて事物を見れば、天地は俳趣を以て充された一大パノラマである、此パノラマに入れば平生卑俗と見たものに雅致がある、普通平凡と思ふたことに、奇拔な所がある。ほとゝぎす派の文章は即ち此趣を傳ふるもので、天地といふ大パノラマを縮寫した小パノラマと稱すべきものだ。何も殊更に天堂に飛び出やうと思うて頭を雲の切端に引つかけたり、地獄に潜り込まふと願うて足を地熱の飛火に焦がしたりする必要はない。詩題眼前にあり、詩趣足元にあり、之を遠きに求めて、精を毀やし力を竭し、得る所即ち空、實に哀れな話てある。若し虛言と思召すなら理想派とか稱する人の作物を此ほとゝぎす派の文章と比較して御覽、直ぐにわかることてある。

▲ほとゝぎす派の文章の言葉や句法の簡勁で剴切なことは他に種類がない、一語も增減し、一句も變更するを許さぬ。所謂動かぬものであるこれは十七字といふ短詩形て鍛へ上げた腕を以てするが爲てあらう。此事は後に名文家を論する場合に例を擧げて見やうと思ふ。

▲ほとゝぎすの文章を面白くないといふた理屈家の友人は僕にこんなことをいふた。君はこんなつまらない片々たる小文學を愛するのか、我

望の求むる所は雄篇大作である、何の暇あつて斯樣な小文學を讀んで居るのかといふた。いかさま長ければ大作、厚ければ雄篇、涙といふ字があれば悲劇で、笑といふ字があれば喜劇と心得て御座るお目出度い手合にはほとゝぎす派の面白味はわかるまい。

▲又ほとゝぎす派の文章は大文學に移る階級であるといふ人があつた。僕も或意味に於て此言に賛成する。僕はほとゝぎすの文章其れ自身で以て立派な文學であると斷言するものである。スケッチは繪畫にあらずと妄言するわからず屋ならざる限りはほとゝぎすの文章を文學にあらずといふものはなからう。然しながら僕は之と同時にほとゝぎすの文章は大文學なりと論ずる程の大膽は有せぬ。否かく論ずるは大膽といふよりも寧ろ狂氣(きちがひ)沙汰である、ほとゝぎすの文章を書く人と雖も乃公の作は大文學なりとは恐らく思うて居られまい。大文學の何なるかは必ずしも深く說くの必要もなく、又今之を論ずるの場所でもない。たゞほとゝぎすの文章よりは取材の範圍が遙かに廣くて、事件の葛藤が遙かに複雜で、性格の描寫が遙かに深酷で、而かも一篇の調和は渾然として缺くるなく、全躰の詩趣が油然として溢るゝが如きものである位の抽象約說明で滿足して貰ひたい、或はほとゝぎすの文章を潺湲たる小川とすれば大文學は浩蕩たる大海の如く、ほとゝぎすの文章を、小形の寫眞とすれば大文學は大幅の活動寫眞の如しとの形容的說明を以つて滿足して貰ひたい。具体的の例證や、又果してかゝるものが明治の今の世にあるかないか、又今後果してあらはるべきものであるか、ないかは茲に斷言することは出來ぬ、然しかゝる理想的ともいふべき大文學も必ずほとゝぎす派の文章の如きものを土臺とし根底とせざるべからざることは僕の斷言する所である。何となればほとゝぎすの文章は寫生的であつて、寫生的といふことは今後の如何なる文學にも用ひざるべからざる方法である、大文學と雖も寫生的ならざるを得ぬ、否大文學なればなる程寫生を土臺とし根底とせざるを得ぬからである。蓋し世が進むにつれて人の注意が緻密になつて人の思想が實際的となる、虛僞の描寫や空想の産物に滿幅の同情を寄せて、作物と一躰となるといふことは到底出來ぬ、現代の我等は人間を離れたり、實際と別れたりすることは出來ぬ、さういふ時代は已に過ぎ去つた、よくいへば神のやうな、惡くいへば小供のやうな人間は現代では生活することが出來ぬ。現代の人は神樣を見ても其善人に似た點丈しかわからぬ、惡魔を見ても其の惡人に似た丈しかわからぬ、要するに人間中心主義、實際万能主義である、而して此人間の中に詩情を見出し、實際の中に趣味を見出す所の能力は實に非常の鋭敏と非常の高度に達した、これは到底昔の人の有して居らぬ所である、我等は空想に失つたものを現實に得、外で損をしたものを內で儲けた、これが即ちあらゆる文學の寫生を土臺とし、根底とせざるべからざる所以である、即ち僕がほとゝぎす派の文章が大文學に至るの階級であるといふ說に贊成する所以である。

▲忌憚なくいへば僕はダンテの神曲や、ゲーテのフアウストには餘り多くの興味を感ずることが出來ぬ、地獄とか極樂とか惡魔とか神とかいふ言葉は已に一種の不快を起さしむる、何となく虛言(うそ)らしい感が起る、恰かも馬琴の八犬傳を讀むの感情だ。或る理想家が僕の此言を聞て君は俗物であるからそうだといふたが現代の如何なる理想家も此等の作物に對して恐らく昔の人程の興味を覺ゆる人はあるまい、若し非常の興味を覺ゆる人があつても恐らく特殊なる現代の眼を以て讀んだ批評的興味であつて其作物と一躰となる同化的興味ではあるまい、若し同化的興味でないとすれば已に藝術的興味でないといふて差支あるまい、然し何も僕が俗物といはれたからというて躍起となつて昔の物を攻撃するのではな

い。實際的となり、人間的となつたことを以て俗化とすれば、僕は寧ろ俗化を以て滿足し、俗化を以て榮譽とするものである。所謂俗化したお陰てほとゝぎすの文章のやうなものゝ面白味を感ずることが出來たのてあるから。

▲兎に角これから小說家てもならうといふ人はほとゝぎす派の文章を學んで之を土臺としてやらなくちやなるまいと思ふ。思はず話が横道に這入つて面白くもない理屈を馬鹿に長く並べ立てたから、今度は名文家の事を少し書かうと思ふ。

(下)ホトヽギス派の名文家

▲ほとゝぎす派の名文家として夏目漱石、坂本四方太、高濱虛子の三氏を紹介しやうと思ふ。ほとゝぎす派には此外に名文家がないといふ意味てはない、故人となつた子規もある、虛子と相並ぶ碧梧桐もある、其他鳳骨もある、燕洋もある、「蛇のから」といふ面白いものを書いた鉦谷もある、又僕の未だ知らぬ名文家もなきにしもあらじと思ふ。僕が以上の中より特に此三氏を選んだのは一番多く此三氏の作を讀んで、一番多く此三氏に感服して、一番多く此三氏のことが書き易いからてある。

(其一) 夏目漱石氏

▲本名夏目金之助て、英文學の專攻て、洋行をして歸て、今は帝國大學の英文學の教師てあることは何人も知つて居る、知つて居るそれを態々書くのは僕にとつて少し面白いことがあるからてある。恰度僕が仙臺の高等學校に居つた時分の事だ、今度東京に行けば英文學の教師は夏目金之助といふ洋行歸りの先生だ、答案を英文て書かせる極めて眞面目な學者肌の人といふことを聞いた、僕などは英文て答案を書ける男てない、果て困つたなーと大いに悄氣た事があつた、上京をしてマクベスの講義などを聞くと、眞面目な顏して時々面白可笑しな事をいふ人てあつた、然し此人が今年正月以來花々しい目醒しい活動をやつて、文壇の大驚愕を起した夏目漱石其人となるべしとは愚かなる僕の思ひ及ばなかつた所てあつた。

▲夏目先生は兩刀使ひてある、左手には俳想と呼ぶ切味心地よき一尺八寸の短刀を持し、右手には洋想と名づくる見る目眩き三尺の大刀を有して居る、或は兩刀を一時に用ひ、或は一刀づゝを用ゆる、兩刀を用ふる時も兩手共に敏活て一方の腕に隙間を出すやうな事がない、俳想といふ短刀はほとゝぎすといふ日本流の工場て鍛へた作て、洋想と云ふ大刀は無數の西洋の書物を參考にして打ち上げた作てある、箇樣な名刀を二つまて持て、而かも自由自在に働かし得る人は先生の外に恐らく一人もあるまい、之れ先生の我文壇に濶歩する所以てある。兎に角眞面目な學者肌と聞いた先生が「我輩は猫てある」て滑稽の上乘なる作例を示し、「倫敦塔」「幻影の盾」て詩人肌の人なることをあらはされたのを見るに實に面白くつてたまらぬ。

▲「倫敦塔」と「幻影の盾」は直もに右手に携ふる大刀を揮はれた方て、西歐文學の素養と西洋的詩情が全篇に充ちて居る、或は勁拔、或は幽遠或は高古、或は綺冥、兩篇共蓋し先生苦心の作てあらう。殊に「幻影の盾」の冒頭などは恐らく幾度も〳〵推敲して後に出來たものぢやないかと想像される。從て文字の推敲、句法の洗錬は最もよく此兩篇にあらはれて居る。

其頃の戀はあだには出來ぬ。思ふ人の唇に燃ゆる情けの息を吹くためには吾肱をも折らねばならぬ、吾頸をも挫かねばならぬ、時としては吾血潮さへ容赦もなく流さねばならなかつた(幻影の盾)

肱を折るより、頸を挫くと續け、而して血潮といふ一層恐ろしき文字を記し來りて更に容赦もなくといふ形容詞を加ふる、深く人の感情を動かす所以である。僕が先きにほとゝぎす派の文章の語句は動かぬといふたのは此容赦もなくといふ一字を以てもわかる、此言葉を他の言葉に換へることは到底出來まいと思ふ、若し換へれば惡文章となる。

一年は三百六十五日、過ぐるは束の間である。七日とは一年の五十分の一にも足らぬ。右の手を擧げて左の指を二本加へればすぐに七である。(幻影の盾)

實に面白い書き方だ

▲先生の句法は實に勁拔て一句は一句より強くなる、「藤村が天馬の蹄を形容して、紫金の色のやきがれを高くも叩く響ありといふた語は先生の句法を形容するに適して居る。

少し行くと左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の楯、黑鐵の甲が野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて敵遠くより寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黑き夜壁上を歩む哨兵の隙を見て逃れ出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の君の政非なりしとして蟻の如く塔下に押し寄せて犇めき騷ぐときも亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖來るときは祖を殺しても鳴らし、佛來るときは佛を殺しても鳴らした。霜の夕、雪の朝、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は今いづこへ行つたものやら、余が頭をあげて蔦に古りたる櫓を見上げたときは寂然として既に百年の響を收めて居る。(倫敦塔)

初めは史的詩情を以て徐ろに趣味深き文字を行り、中間緊迫りて其句簡勁激越、終りに冥想的叙述を以て之を結ぶ所、餘韻嫋々として極なきを覺ゆる。此圈點打た所と全一の句法は先生の作物の處々に散見する。

期限は三十日、傍の木立に吾旗を翻へし、喇叭を吹いて人や來ると待つ、今日も待ち明日も待ち明後日も待つ、五六三十日の期が滿つる迄は必ず待つ。時には我意中の美人と共に待つ事もある。(幻影の盾)

猶內側へ這入ると延板の平らな地になる。こそは今も猶鏡の如く輝やいて面ににあたるものは必ず寫す。ヰリアムの甲の挿毛のふわ〱と風に靡く樣も寫る、日に向けたら日に燃えて日の影も寫さう、鳥を追へばこだまさへ交へずに十里を飛ぶ俊鶻の影も寫さう。(仝上)

かくの如く句を重ねて、少しもたるみなきは即ち先生の文藻に豐かなると感情の鋭いこと即ち詩人たる特質に於て缺くる所なきを示して居る。

▲上に拔いた句を讀む人は必らず其凡手に出てたものにあらざることがわかるであらう、「倫敦塔」と「幻影の盾」はかくの如き名句が集りて一篇の散文詩をなすものである、其價値と其興味との如何なるものなるかは最早や多言するの必要はあるまい。

▲然しながら僕は「吾輩は猫である」を以て尙一層先生の本領を發輝したものであると思ふ、「倫敦塔」と「幻影の盾」は先生の禮服を纒ふた姿である、「吾輩は猫である」に至りては宛然として先生の平服を着た形である。ゆつくりした氣儘な自由な活動は後者の方にあるやうに思ふ。即ち此作は左手なる無刀を用ひたもので先生は右手よりも左手の方は利きはしまいかと思はしむるのである。續篇の中頃から漸く人間の描寫に移て第三篇の大部分は人間の寫生文となつて了ふたので題名には些か不釣合な嫌はあるが面白いことは始めと少しも變らぬ。然し「吾輩は猫である」の面白味は一句〱の上にない、總躰の上にある、全躰關聯して、前後照應

して無限の面白味がある、先生の滑稽は決してクスグリはせぬ、ゲラゲラ笑ひはせぬ、眞面目で平氣で滑稽を吐く、噯飯さずに居られぬ所以である。猫が餅を齒につけて踊を踊る苦しまぎれの際に第一の眞理第二の眞理など、哲學者然たることを平氣に濟まして書いて居る所など實に面白いぢやないか。又首懸の松の記事、車屋の黒などは活躍して居る。例へば猫が自分の「眼を上品に半ば開いて落付き拂つて見る」とか、小供二人が砂糖の取りくらべをした記事の「少らく兩人が睨み合つて居たが」といふ樣な文句の面白みは全篇を讀まれば到底わかり兼ねる、で僕は「吾輩は猫である」については最早何にもいはぬ、我文壇に缺乏した上品なる滑稽を見んと思ふ人は必ず之を一讀せられんことを望む。

▲夏目先生について僕はつくづく感じたる事がある。男子文壇に名を成さんと思はゞ宜しく先生の如くやるべしぢや。深く研究し、深く蘊蓄して、然る時花々しく文壇に打つて出るべしぢや。以上に僕が擧げた作は皆本年に入つてからあらはれたのだ、本年というても未だ四ヶ月しかならぬ、文壇不振の折柄益々先生の御奮勵を願ふ、

▲夏目先生は本年になつてから急に大名を擧げられたのだが、今迄も何にも書かなかつた人ではない、實に面白い俳句や、面白い文章も書いたのである、が一時に花々しく出されないので餘りに世俗の注目を受けなかつたぢや。俳句のことは今はいはぬが、倫敦に居られた時分に書いた「倫敦消息」などには隨分面白い事がある。西洋人の丈が高くて自分の低いことをうまく書いてある。

夫からステッキでも振り廻はして其邊を散歩するのである。向へ出て見ると逢ふ奴もく皆んな厭に脊が高い。御負に愛嬌のない顏ばかりだ、こんな國ではちと人間の脊いに税をかたら少しは儉約した小さな動物が出來るだらう抔と考へるが、夫は所謂負惜みの減らず口といふ奴で公平な所が向ふの方がどうしても立派だ、何となく自分が肩身の狹い心持がする。向ふから人並外れた低い奴が來た。占たと思つてすれ違つて見ると自分より二寸計り高い。今度は向ふから妙な顏色をした一寸法師が來たなと思ふと是即ち乃公自身の影が姿見に寫つたのである。不得已苦笑ひをする向ふでも苦笑ひをする、是は理の當然だ。

十五錢の木戸錢を拂うて下手な落語家の駄洒落を聞くよりは餘程面白い。其頃の文章は俳句好きの一派の人の外には餘り知られなかつた。兎に角先生の如き人が其實力を發揮され、實力に相當の名譽を得られつゝあるのは先生の爲のみならず、我文壇の慶事である。

(其二) 坂本四方太氏

▲氏は天成の文章家である。漱石氏を以て露伴に譬ふれば四方太氏は柳浪である。然し誤解されては困る、二人の比較は趣味の比較でない。只一は學殖を用ひて出來た文章で一は學殖を用ひずして出來た文章らしく見えるのが似て居るといふのである。又兩者の間に優劣がある如く思はれても困る。漱石氏に漱石氏の面白味あり、四方太氏に四方太氏の面白味ある。只漱石氏が廣く其實力を認められたに反して四方太氏の特長は未だ一部の人にしかわからぬは大いに遺憾ぢや。强て作爲した跡なく敢て苦吟した形なく、すらくと書いていふにいはれぬ面白味のあるのは此人ぢや。其境最も普通で其事最も平凡で而かも其文章最も面白いのは此人ぢや、此點に於ては恐らく前にいふた漱石氏をも凌ぎ、後にいふ虛子氏をも壓して居やうと思ふ。漱石や虛子の作には苦心經營の跡が見らるゝが、四方太の文は自然に出來たものゝやうに見える、筆をとつて紙につけると軸の中からするくと出て來るものゝやうに見える、從て

其面白味は文字や句法の上よりも寧ろ全體にある。古い方の作では「月待の夜」「動物園」「下宿屋」「蝿」「穴守詣」等皆面白い。

▲寫生文の中でも最も寫生的て、最もよく全體の釣合がとれて居るのは此人てある。假名遣あるものゝ言葉は假名遣の儘て書いてある。例へば動物園を見に來た田舎者の言葉は純然たる田舎言葉て、下宿屋樓上て幾何學の講釋を聞いて居る書生の言葉は東北辨てある。

各室が騷々しいので容易に寢つかれない。

十二番の室ては頻りに問答をやつてゐる。「君、斯うだらう、これが垂直線になるからしてだ、此の角が二等分される事はわかるだらう。然る時はB角に對するＤ邊がだれ。うむ……そうだ。即ち定理十八によつて長方形の對角形に成る事が證明されるんだ。」「さうか。すかす此邊と此邊と等しい事を證明しなければ駄みだらう。」「ナニさうぢやない、これとこれとは始めに等しく作るんだから。」「アヽアこれさ始めに等しく作るんだれ、やア分りした、ありがたう」(下宿屋)

又「向島」に於ける少女の言葉は「あたし蒸汽よりひをし(潮干)の船が好きよ」「いつしッかけ(ひッかけ)たのでせう」と書いて東京ッ兒たるを示してある。動物園を見に來た田舎者の風俗など隨分うまく書いてある。

そこに後ろから田舎者が十人ばかり、どや／＼遣つて來た。先達の親爺は色の褪めた鳥打帽に、紺ネルの頸卷、淺黄のぱッちに日和下駄といふ扮裝て、裾を端折つて先に立つて來る。今ま一人の男は蝦冠りして手提カバンを手拭て帶に結びつけてゐる。此男の背中の包みの小口から海苔の二十帖ばかり二六新聞に包んだのが見える。あとは鳴衆や婆さんばかりて、てんてに頭巾、紺ぱつちを穿て、中には袴とぱッちと縺れたやうなものを穿いてゐるのもある(動物園)

觀察の精、描寫の微を以つて誇らんがために三四頁も衣裳の講釋をしたり、腰のあたりにある痣の記述までし兼ねまじき今の一部の人とは自ら撰を異にする。

▲四方太の文章の特長は物を眞實に描寫して、其描寫が活躍して、限りなき詩情を起さしむる所にある。「穴守詣」の結末「余の前に立つてゐる男は酒に醉つてゐるのかして、窓に凭れてコクリ／＼と居眠してゐる。土産の達磨は竹も旗もなくなつてしまつて、手拭に包んでぶら下げてゐた」の如き、「下宿屋」の結末「これなら大丈夫だと、戸を閉ぢて、又布團の中にもぐり込んだが机の上のランプを消すのを忘れた。のび上がつて腹一パイの息てふーッ、ふーッ、と二三度つゞけて吹くと油煙がホッ、ほッと立つばかりて、灯は消えない。仕方がないから、又出て吹消して寢た。」の如き隨分面白いと思ふ。殊に僕が名文であると思ふのは「蝿」の中に蝿を捕つて蟻にやらうとする一節である。

何か呉れてやるものはないと思つて、そこらを見廻すと、後の桑の葉に大きな蒼蝿が止まつて居た。ぬき足さし足近寄つて、手を差伸べて捕らうとすると蝿はフーイと飛去つた。失敗つたと思ひながら息を凝らして窺ふと、今度は前よりも一層要害な葉の上にとまつてこゝまでお出で、といつたやうに尻を天にむけて身構へた。さうして兩手を揉んで頻りに頭を撫でゝ見せる。「これ憎い奴め」と思つたが、前の失敗に懲りて、今度は警戒に警戒を加へて、ぢり／＼と詰寄つた。こちの武器は只爪はぢき一つなので、渾身の力を爪先きに集めて、ヒチンと彈くと、手答は慥かに命中した、蝿は三尺先きなる大地の上に、のけぞり返つてもがいてゐる。早速蟻に投げてやうとすると、生き返つてくるやうだから、兩方の羽をむしつてやつた。所が羽ぬけ蝿め一向平氣で足だけでパッ／＼飛びあるく。更に足を二

三本もぎとつて、びつくりかへして穴の側に置くと、さア大騷ぎだ蟻が出て來て引ぱり込まうとする。蠅は片足踏張つて引かれまいとする。いよ／＼蠅と蟻との相撲となつた。

理想派に此精細なく、寫實家に此自然なく、寫生派に此活動ない。

▲四月のほとゝぎすに出た「蒲鉾の贊」は京都蒲鉾の味を賞したものであるが、自分の經歷や、不平などを書いて大部分は敍情的のものだ、今迄の寫生的のものとは少し趣は違ふ。然しなか／＼面白く讀まれて、四方太氏の未だ衰へざるを示して居る。最後の所は實に面白くて思はず噴飯した。

吾輩は子供の方なら隨分有望だが生憎出世の見込みが立たないには弱る。つまり貧乏の上塗りといふのだ。などゝ又しても不平をこぼすやふだが、こぼすのではない自然にこぼれるのだから仕方がない。マア蒲鉾にあやかつて兎角世の中は斯うしたものだと生悟りでも開くとせう。蒲鉾も吾輩のやうな甲斐性なしに惚れられては迷惑だらうが、これも何かの約束事と諦めて貰ひたい、其代りに吾輩もいよ／＼世の中の生存競爭に敗れた曉には、戀しい。そなたと情死しやうとまで覺悟をきめて居る。好きな蒲鉾を喰つて喰つて喰ひ死んで仕舞へば吾輩もそれで本望だ。四方太と蒲鉾の道行などは存外意氣かも知れぬ。コレお蒲、斯うおじやと來るも嬉しいではないか。

▲「向島」の記事にあるお汁粉を以て晝飯を誤魔化さうとした政略などは隨分面白いのであるが餘り長くなるからこゝには書かぬ。兎に角四方太氏は最も寫實的で最も面白い文章家で一度其味を嘗むれば忘れられない名文家であることを斷言する。

（其三）　高濱虛子氏

▲俳句の上では漱石よりも四方太よりも有名である。或人は虛子の俳句は故人子規よりも上にあるといふた。然し今は俳句の上の伎倆を論ずる積でない。文章家としての虛子を見るのである。虛子の句法には漱石のそれに劣らぬ面白いのがある。例へば「居蘇に醉ふて」といふ文の冒頭

居蘇を一杯飲み過ごした。居蘇を一杯飲み過したといふことが罪惡かい。罪惡かも知れんさ。よろしい罪惡でよろしい。罪惡で結構ぢや。罪惡で結構ぢやといふのは惡いのか。へゝ居蘇を一杯飲み過したところが憚りながら虛子樣ぢや。

醉時の口氣を寫して宛然として見るが如しぢや。

▲こゝまで書いて紙數を數へて見ると已に原稿紙の十八枚になつた、雜誌に印刷しても六七頁になるだらう。僕のやうな下手な文章で長たらしく書かれたら讀者もたまるまい、それに虛子は最もよく人に知られて居る人であるから委しく論ずる必要もあるまいと思ふ。で僕はほとゝぎす派の文章に書いた緒言を以て虛子の文章の總評に代へて只虛子の文章の面白い處を拔いてお目に懸けやうと思ふ。

▲「屁」などゝいふと人は直ちに汚ないやうな、卑しいやうな感を起す。而かも俳人虛子は此下等らしく思はるゝ題を捉へて趣味ある文章を作つた。

或夜どうしても寢られぬ。一時を聞く、まだ寢られぬ。二時を聞くまだ寢られぬ、どうかして寢たいと思ふと愈寢られぬ。或俗に敎はつた通り南無阿彌陀佛々々々々々々とお念佛を誦へて見た、ます／＼寢られぬ。

同意味の句を繰り返して、面白く而かもたるまぬこと漱石と同一、これは二人とも俳句の上より得たものであらうと思ふ。それよりいよ／＼屁

のことに移る

ア、弱つたナア、と思つてゐるとふと横腹が突張つて來るやうぢや。これから屁を催ほしたのである。そこでふと斯ういふ事を思ひつく。いゝいゝ屁を十だけ奮發して放つて見やう、其中には必ず草臥れて眠るやうになるであらう。さう決心すると間もなく。第一發を放す。如何にも冷性なやつが無造作にスーと出る。しかも其スーがあまり短い方でない。可成發して置くやうにせぬと後に困ると思つたが、長い尾を引いて殘り無く出てしまふ。そこで第二の工夫をする。徐ろに乳の下あたりから腹を撫で下ろす。腸の迂回曲折を考へて臍の周圍を撫でまはす。程なく何處かに固まりが出來たやうで、だんだん其の固まりが大きくなつて來るやうで、終に首尾よく第二發を放す。

或はキュッと音を發する痛快なやつが出て、或は非常に熱性なやつが辛じて出て、或は苦心慘憺百方其術を盡して漸くにして出て、或は案外にも思はさる中に無造作に出て、「此思ひ附きは功を奏して第十發に達せぬうちに熟睡することが出來た。翌朝十一時頃まで寢た」の結末まで實に面白く出來て居る。風來山人に此奇想あつて此寫實的手腕がない。

△文庫子の「百八の鐘」などは隨分面白いが最も彼の寫實的手腕を見るべきは「影法師」である。これは疏水の屋根舟に乘つて逢坂山のトンネルを通る記事だ。此位精細に此位活躍して居るものは僕は未だ見たことはない。全體即ち渾然たる名文であつて、何處を拔いて其一斑を示してよいかわからぬ。兎に角讀者は朧ろげながらもほとゝぎす派の文章はいかなるもので、名文家として擧げた三氏の文章は如何なるものなるかゞおわかりになつたと思ふ。僕ももう書き疲れてしまうたし、讀者ももう讀み疲れるのを恐れるので、茲に筆を止める。

（完）

四月文壇

孤村花主人

◎花月の一番の讀物はホトヽギス百號の附錄として公にせられた夏目漱石氏幻影の楯だ。趣味深い、力強い書き顯はし方で、讀んで行く中に魅せられると云ふよりは全く其の力に壓せられて了ふ心持がする

遠き世の物語りである、バロンと名乘るものゝ城を構へ濠を環らして人を屠り天に驕れる昔に歸れ。今代の話してない。

之がそもそもの書出して昔アーサ大王の御代とばかり白城の城主狼のルーフアスの家の子キリアムが夜鴉城主の愛女クラヽ姫を戀した物語り、其れに幻影の楯の不思議な由來。纏頭を貪はらして一篇をなしたものである、僕は最初飜譯かしらと思つたら、創作だと云ふ事だ。大方昔物語りとして傳へられた無論故事來歷はあつたのだらうが、其趣味ある筆致には眞實感服せずは居られない、僕は吾輩は猫であるよりも、倫敦塔よりも、遙に此の作品に於て夏目氏の力量を知つたのである。倫敦塔とて成程惡い作ではないが、あの當時世間か持囃す程立派な作品とは何としても思はれない。あれ程の感情と想像力は在來の文學者にても持つて居る、或はもつと深い想像力を持つて居る作家が無いでもないと思はれた。然し此の幻影の楯に至つては、決して然うで無い、句一句に深い味が潛んで居る。深い素養が無くては書き顯はす事が出來ない文字が到る處に眼に附く、兩城主が靴を破つて隈端の影が突として兩領地の上を襲ふ處より筆はいよいよ力を增して來て居る、末の世の盡きて、其の末の世の殘る迄と誓ひたるクラヽ一門に弓を曳かればならぬ樣になるキリアムの煩悶は遺憾なく描き出されて居て、壁に懸けてある盾を仰いて、其の中にク

ラヽ姫の顔を見出す所。何等の凄絶！僕は終りに戀の滿足が栝の中に見出される所よりも此の邊りの所が自然でいゝと思ふ。戰ひは湖の河に上る如く次第に近附て來て、鐵を打つ音、鋼を鍛へる中にキリアムの煩悶は漸次に加はつて行き、過ぎし昔し樂しかつた境遇を想出して、騎士の戀に四期ある事をクラヽに語り、其れから一轉して城中の會合、次に盾の由來を讀む光景、讀む身には深い趣味に魅せられて只、息だ。

戰爭の慘憺たる光景、誰しも恁ふ云ふ處を書くと得てして實感に訴へる樣になり、自然と粗雜な感情ー雜ぱくになるのであるが、其れが依然として讀者に同一の感情を保たして、藝術の範圍から脫出して居らぬ。幾度も書直した後公にしたものであらうか。全く感興に依つて短い時間に書き上げられたものであらうか、僕は後者だと思ふ。終りの幻影の盾の盾たる戀の滿足を栝の中に見出す邊り、周圍の光景が林にして、其の林を極寫實風に描くのは、後の神秘な段の配交して殊更に美しく身に染みだ只終りの結び言葉は却つて無いがいゝと思ふ。之では餘韻が消えて了ふ折角得た深い藝術の趣味が此の理の爲め揉み消されて滅茶々々になりはしないかと氣遣はれる。此の作を見て一番に嬉ばれるのは姉崎嘲風氏だらう、僕は本年に入つての第一の傑作だと思ふ。

◎銀短冊は泉鏡花氏の作品で文藝倶樂部の卷頭に揭げられたものだ。狸の小屋の佐々六老爺が話すことゝ、外套を着たのと襲を着たのとは、默言つて之を聞いて居る。背景は鏡花氏得意の雪景色。惡からう筈なしはなしがいろくにこんがらかつて、とゞのつまり此の小屋の中へ話の主人公が戀入り來るより急轉直下

『大村さん、私ですよ、しばらく。』

外套の頭巾を刎ぬれば、男と思ひの外、こは何事ぞ、雪の顏、翠の黑髮すらくとほつれげ肩まで打爬けりて大時代の芝居の形を明治にやつて居る。

『肉は、肉は、何斤。』

大村犬太郎恥ちて恁く叫びながら自殺せんとするのを女の夫の陸軍少佐先づしばらくと止めて、明治の新式に妻君をくれてやるなり以上。

僕は今迄幾度も鏡花君の作を評して此の紙上に意見を吐いたから重ねて云ふまい。只一言云ひたいのは、想像と空想との差異で想像と云ふものには確固たる根底があつて、空想と比較して其の價値は霄壤の差だ、空想と云ふものには何等の根底もないもので、野蠻人や未開人程多く所持して居るものだ。之丈け云つたら解つて居やうと思ふ。鏡花君の周圍には阿諛者や賞讚者が多く居ると云ふ事だ。確に然うに違ひない、文學の眞意義を解せずして美くしい文章で、何かある一つの物語りを書き顯はしたものが小說だと心得へて居る淺果敢な人達は、鏡花君の人を魅して了はれば置かない鋭い筆致を見れば眞實驚いて了ふに違いないんだから。恁ふ云ふ人達が鏡花君には果して眞實の友人であらうか、眞實の讀者であらうか、僕は決して然う思はない、鏡花君を誤らす人だと思ふ。若し鏡花君にしていつ迄も思ひ此處に到らずして今の傾向を續けて居たならば恐る可き結果に到着するだらう。呉々も鏡花君の三省を願たいものだ。

◎新小說の卷頭を飾つたのは春葉君の薄情者だ。君にしては長篇の作物の樣に思はれた。工學士千村靜雄と結婚して四人迄子を爲しながら夫の愛情の存在を疑ひ、煩悶に煩悶を重ねる折節、夫の恩家の子鎗田俊太郎が九州から上京して、ある出來事の錯誤から其處に一種の愛情を認め、自分一人極めて愛情の的になつた心持になつて、居ると何ぞ圖らん恩家の子は他に戀人があつて、打明けられて見ると他人、貳人の間に何等の關係もないのに、夫は邪推して遂に離緣せんと云ふ、主人公の美佳子は

遂に承諾して

『まゐります、妾は一人て窕羅を注ぎましやう。』云ひ放つて出様とすると、父が泣く兒供等に命じて、現在の母を薄情者と呼べと命ず遂に兒供は泣聲を上げて母を、

『薄情者！』と罵り、美佳子は卒倒したので止めてある。

讀み了ると直ぐ僕はイブセンのノラを思ひ出した。ノラの夫の許を去るのは、金錢の價値が夫婦の情合よりもより價値あるもの〻樣に夫が擧動ふたのを確に見定めてからだ、然してノラは夫の病氣中夫に知れない負債を償却するのに自分の性情を僞はつて迄も苦心したので、斷然其の夫の許を去るのは、一種の反動とも見られる處がある。恁う云ふ處は柳川君には少しも無い。其の作想の構成せられた所因は何てあらうとも、現在の結婚法を眞面目なる人生の上から見て痛罵した樣な所があつて面白い。只美佳子が鎚田俊太郎にもう一遍處女の時代に回りたい〳〵と繰回して居るが、處女時代の快樂を少しも知らぬと云ふ美佳子が、其れに回りたいと云ふのは可笑しい樣に思はれる、恁ふ云ふ言葉は愛に失望した人か、又餘り今迄人を愛し過ぎた結果、もう誰も愛する事が出來ない人の口から出るのが適切だ。何としても未だ愛を自覺した事のない人が云ふ可き言葉てない。僅な事てあつたが美佳子の性格の書き顯はし方がすつきりしなかつたのは此の言葉の行爲の樣だ、いつ讀んでも癖のないなだらかな文章、蓋し春葉君近業中白眉の作ならん。

◎小山内八千代女史の鶺鴒なだらかにすら〳〵とした書き振り、御孃樣が母親の前をごまかして街をハモニカ吹いて通る若者達に美しき姿を見せつけに行かんとする邊り、流石は女性の手になりし作、些と男の氣附かぬ處、近時女作家の無き時、力められよ

《完》



漫評

當世美術家氣質

八面生

鹿子木孟郎

三宅克巳先生和田英作先生など〻論戰をして頓日有名になつた人にて、評判の氣餤家。一理窟ひねくつて相手を說伏せやうとするのは勇ましいが、製作品は口程上手ではないさうな。嘗て友人等と米國へ赴き、それから歐洲へ渡らうとする時、先生の作のみ一枚も賣れず、とても旅費が取れさうでないので、漸く友人の助によりて所々に筆を加へ、米國向にして、辛うじて渡歐するを得たといふ逸話あり。兎に角將來有望の人

高橋廣湖

四月の還壽會展覽會に「女風呂」を描いて、同會に入場者を引つけた人。この畵については非常の苦心をしたさうて、百方策を運らし某湯屋に依賴し、其の實景を

寫つしたのである。先生曰はく「美は妙齢の婦人にあり、而して婦人の美は其の湯上り姿を最とす」と。同先生は青年畫家中最も勉強家にて、常に掌中に隠せる程の小畫帳を携え、電車中にても竊かに同乗者の容姿を寫つしてゐる。其の作も甚だ望を囑するに足るありて、今度の展覧會に於てはこの人の作のみ際立つて目につくやうである。

尾竹竹坡

竹坡先生其の弟國觀先生とは青年畫家中の評判男。頗少き健筆家にて書肆には調寶がられ、教科書が國定となる前には、各所から引ばり凧で、收入も雅邦玉章等の諸大家を凌いだそうな。從つて本能主義の實行も盛んにて尾竹兄弟といへば誰れ知らぬ者なき剛の者。性質は流石畫家臭く厭味がない。

西鄕孤月

嘗て雅邦翁の女婿となり、美術院中屈指の中であつたが、此頃は衰頽して製作にも目醒ましい者はなくなつた、自費で洋行するとの噂もあつたが、實行されさそにもない、例のずぼら黨の一人、新聞にも唄はれ、關西へ脱走したことがある。下村觀山横山大觀等美術院の秀才何れも酒と女とに現を抜かしたのであるが、これもお師匠様を見やう見眞似とは褒めてよいやら悪いやら。

鷹田其石

日本畫家中で類なき議論家、相手かまはず滔々と自家の大抱負を述べるので有名。其の主幹たる眞美覽展覽會には數と量とに於ては非常の熱心であるが質の上からは褒めかねる。自から曰はく「予は西洋の描法を取るのみならず、遠く日本の天平時代に遡ぼり、古今東西の美を合はせて一にす」と。兎に角日本畫家のタワイなく酒と女に溺れてゐる間に、一人美術上の研究にのみ忙はしきは感心。

鬼面魔語

醉美生

⦿紅き襦袢の裾のぱツと風に飜へりて、チラホラと白き脛の見ゆるにこそ穏やかならぬ思も挑發せらるれ、裸躰むき出しのまゝにて眼の前に立たるればなかなかに興の醒むるものぞ。太股のそこいら上あたりまで見えしならば久米の仙人も通を失はざりけんに只脛ばかりなりしこそ、抑も粋な噂の基なりけめ。

⦿美人と相向ひて起る最高の欲望は只其頰をキッスせんとするに止る。

⦿大學生のかれやすに入るものあるは將來に於て婦人に脆き文明的紳士

の増加すべきを豫言せり。

◉二六の二面に於ける牛頭馬頭は支那の院本的言辭を以て時に面白き逸話を載す。而して其筆者は福田和五郎氏なりといふ。

◉エライ人の子に比較的愚人多きは子供の敎育などを面倒くさがりて放任するもの多きによる。

◉櫻花爛熳紅ゐの霞上野公園に棚曳いて人生の歡樂今を盛りなるとき、基督敎徒の連中銅鑼聲を振り立てゝ盛んに傳道に勤む、何事ぞ花見る人の長刀の元錄先生を起して一句參らせたき心地せり。

◉霜葉黃に落ちて鳥の聲風に消さるゝ蕭條たる上野の秋、致を首傾け行く若人に說く。或は傳道の功を奏すべし。然るに花人に媚び、人花に醉ひ、万物相滿足せる夢裡境に於て之をなす。吾人はパリサイの學者を改宗せんとするよりも愚なるを見る。

◉車屋が距離相等しければ必ず路を曲れるに求めて直きを捨つ。單調を厭へばなる。

◉結婚前に筆を起せる小說は多く結婚を以て大團圓となし、敢て其以後を說かざるなり、これ結婚は人生の大時期を劃し、其前後の事件全く關係を絕たれたる如き觀あればなり。

◉女は如何に親しき友との間にも尙多少の虛僞あるを免れず。

◉西洋人は名を姓の前に書き、日本人は姓を名の前に書く、これ彼れは個人單位主義にして我は家族單位主義なるによらんか。

◉女が多くの男に接したき浮氣心を節して、一人の男に緣附くは色衰へたる時の養老保險をつくるが如し。

◉日々の新聞紙自殺者の記事を掲げざること殆んど稀に、而して其自殺の原因多くは發狂の爲とあるが如し、而かも其發狂の原因に遡りて之が眞の解釋を試むるは終に詩人小說家に待たざるべからず、我は只忌々しき發狂の二字を附せられ、憐れなる原因を知られずして沈み行く無數の精靈を憫れむの情に堪へざるなり。

◉尾崎市長の令息、美術學校にありて繪畫を學ぶ。人あり之を異とす、市長笑て曰く、「親父がこんな俗な商買をして居りますから、子息が激したのでせう」

文士初對面錄（その十三）　天中天

▲泉鏡花氏（の三）　年齡が三十二で登張竹風君と全年、髭もない苛もない顏の、小作りな活々とした風采、袴を穿いた女學生を見れば氣分が惡くなると云ふ事は事實らしいが、さりとて見れば見る程、話をすればする程、どうしてあんな小說が書けるか、どうしてあんな想が出て來るかと不思議でたまらない。

『批評家といふものは當時ありませんな、死んだ高山林二郞、あの人の時代には、さうですれ、隨分盛んでした、併し私などにはあの批評は少しも役にたちませなんだ、と申しますは、作家の長所と短所とを見ずに、いたづらに自分の鑄型に合はせやうといふのですから、私共はそれに指導される事にはまゐりません、爲永春水に向つて淫猥だから可かんと申しましても、春水はその方面に筆を染めるのを目的として居るのですから、春水は何とも感じますまい、その淫猥な書き振りに就いて、然ふ云ふ風に書いたら可からう、かうしては何うぢやと云へば大變爲めになります』とは氏が批評家に對する希望、談話はこればかりに止まらず、紅葉山人の逸話、世間ばなしの面白いのもあつたが、餘白限りあるを以つて、これでお了い、要するに僕が見た鏡花氏は、評判程の變物でなく、愛想のいゝ、人好きのする好男子であるといふ事を御披露に及んで置く。

社會

淺草公園（下）

二葉生

藝妓屋と藝妓

由來淺草公園内に於て藝妓屋を構へることは許されない。藝妓屋を許されない以上は藝妓營業を許される理由の無いも知れてある。それが立派に鑑札を受け税金を納めて營業するは、甚だ不思議な譯と云はねばならぬ。公園に於ける藝妓營業は殆んど公然の秘密と成つてゐるのだ。斯く云ふと何だ馬鹿〳〵しい、其樣理由のあるものか、公然鑑札を受け納税して居るにと、誰れも一口に言て退けるけれど、藝妓屋なるものが公園に住居する表面の屆、市役所へ願ひを出してある處に據ると、實に彼等は水茶營業といふ名目の下に、住居もする營業も大目に見られて居るのである。然ればだ、公園規則といふものは制定されて居ても、何等の價値もない反古同樣な始末、矛盾も之れより甚だしきはあるまい。苟且にも輦轂の下にある東京市の規則、否、内務省より發布した法律は彼等に蹂躙されて、誰れ一人これを怪しむものなく、ノンコの洒蛙で税金さへ徴收すれば宜いのか、その取立には立派に藝妓營業税と書いた、徴收書を配布し恬として居るのだ。

扨て藝妓屋といへば、公園だからッて他場所だからッて變りはなく、何れも同じ醜の醜なるもので、唯だ其の掛りが大きいか小さいかの區別のある迄のこと。

淺草公園の藝妓屋はその藝妓の劣等にして、黴菌製造技手たるだけそれだけに、總ての事が野卑であるは自然の理である。其家庭の如き素より論外で沙汰の限り、殆んど小店妓樓と何ぞ擇ばんと云ふ趣きで、唯だ自己の家へ嫖客を招くと招かざる迄の差があるのみだ。

藝妓は如何に、これ言ふだけ野暮の骨頂。此の地は他の狹斜街とは趣きを異にして居て、藝妓の抱へられて來るにも、藝の如何は更に頓着なく、三味線を横抱にして雨垂彈にポツリ〳〵と甚句の二ッ三ッ、都々一の五ッ六ッも知つて居れば、結構々々と主人の口から云ふ、その代りに、身體の健全なのと、成るべく顏の雜

作の滿足なのとを撰ぶを專一として居る。而して普通藝妓を抱へるには、切半（稼ぎ高の半分は主人の有とし半分は本人の有とするもの）七三（七分は主人の有に歸し三分は本人のものとなる）丸抱（收入の全部を主人のものとする）の三樣になつてゐて、切半は座敷着も平生着もその衣類を自辨し、七三は座敷着主人持ち平生着自分持ち、丸抱は全然足の爪先から頭の上まで主人任せにするといふが極りだが、公園藝妓は技術の用ひ處が違ふゆゑに、假令切半でも主人にて衣類まで賄ひ、營業に粉骨碎身せしむる習慣となつて居る。てあるから此の土地で純粹の白人が藝妓の披露をしたら、二ヶ月を出ずして塒につき病院の厄介となるのだ。是等の消息にて彼等の素行は知るに足るものと信ずる、敢て深く切込んで醜躰を曝すにも及ぶまいと思ふ。また彼等の社會は比較的浮氣といふことは少なく、只だ公園流の利慾にばかり眼を見張つて、馬と云へばいへ、鹿と呼べばよべて平氣の平左で濟すが一斑の狀況である。

●●●●●●料理店と飲食店

料理店とは改めて說明するまでも無いこと。また飲食店のうちには牛肉屋もある、鳥屋もある、天麩羅屋もある、鰻屋もある、汁粉、團子、蕎麥、鮓屋など皆この中に含蓄されてゐるのだ。

そこで料理店から解剖して見ると、淺草は淺草だけに立派に屋躰骨な構へ、何屋と暖簾が相應に人に知られて居る家でも。其買出しの魚類は決して上等のものはない。中位まで往けば上等であるが。到底覺束ないのだ。假令奮發して上等品を仕込み、板前に手腕のある料理人を抱へて、遣つて見たところが來る客が、それを味つてくれる者は一人もない。夫れよりは寧ろ安直を專一に中以下で間に合せて置く方が宜いから、料理店らしい料理店は更になく、偶々美味屋との評判をとつても他の料理と比べたら、到底も比べ物になるものでない。斯ういふと何か故意に貶すやうに聞えるかも知れんが、決して貶すのではない、若し噓だと思ふ人があるなら、公園第一等と言れる料理店に上り、其料理を味はひ他のところの料理と比べて見れば直ぐ知れる、それも喰へども味ひを知らずと云ふ先生は別ものである。

世間では料理店に使役される女どもが何のかんとの噂をするが、中には隨分海千山千の化性の者が潜伏もする、けれども多くは眞面目なものである。否、餘り

眞面目でないかも知れないが、是等の家へ客（土地以外の人が中食などにまぐれ這入るは別もの）を咬へこむ魔物が、隨分甚だしい所業をするから、女中その者の爲しつゝある事も、ある種の客の爲めに掩はれて居る傾きがある。況して飲食店の側になると、其營業が眞面目なだけに、使役される女中も亦た眞面目らしく見えるが當然で、而も眞面目ならざる可からざる侶面相も多いのだ。併し魔窟に生息する彼等である、魔風に感染せざる譯もないこと　何れもそれ相應に墮落する順路は歩んで居る。

けれども表面は何處までも正業を營むもの、魔窟中に在つては、稍や神聖なもので、恰度彼の耶蘇の牧師などが處世策と同じやうなものである。

待合附類似業者

この營業も公園に於ては公然許可されるものでなく、矢張り水茶營業の下に潜みて、惡魔の手となり足となり、頭腦となり腹心となつて罪惡を犯す幇助をして居るのだ。併し公園の中には待合營業は素より少ない、例の千束町即ち公園地の周圍にベタ一面である。

待合營業者は何れの土地でも女主人が多く、こゝも亦女主人で開業するが多い。而して其主人たるものゝ前性を洗へば、大方は泥水に首ッたけ浸した經驗者であらねば、彼の遊人と稱するものゝ女房、否らざれば警察風を吹かして横柄に人民を見下し、泥坊や掏兒から旦那と立られる、一種不可思議の人物が内職である。殊にこの土地の待合はそれが多く、繪面によくある湯屋から糠袋を輕く咬へて出るやうな意氣な女王は殆んとないのだ。

待合の表掛りは何れも人の目に觸れて居ることとて、事新しく記するまでも無いが、各室の構造と設備に至つては知らぬものが多からうと思ふから、聊か其一斑を書いて見やう。公園に附屬して營業する待合は、何れも立派なものでない、彼の瓢屋などゝ云ふ如き豪い構造ではない多くは三間か四間よりなき家で、中には二階に一室よりない待合も往々ある。それで戸棚の中に階子段があつて、そこを下りると意外にも隣家の荒物屋の奥へ、ひよこり出るなどの構造も珍らしくなく、又床の間に掛けてある掛物の裏に洞穴があつて、次の間へ脱けられる構造もある、何の爲めに其樣構造が必要で作られてあるか、云ふまでもなく警八風を除ける手段であるのだ。而して各室に必らず袋戸棚とかまたは半戸棚、或ひは一間の戸棚が附てゐて、其中に

は如何なるところでも、枕毛布などの用意がちやんとしてある。此用意がある故に待合なるものに晝夜とも客があるので、若しも此用意が無いものとすると、決して裏口より紅粉を裝つた女が竊々と駈出す筈はないのだ。此樣客筋は晝間一時間或ひは二時間の小時間であつて、決して長く腰を据ゑ悠々酒食を命じ、六乳四乳の音色床しく漏るゝ事はなく、それで彼等が稱する所謂お茶代なるものが、五十錢より壹圓まであるのである。又夜を籠めての客は待合に取りては、餘り有難き客にてはなく、萬一風の神にお見舞申されると、輕くて營業停止、重くて禁止の災厄を喰ふ虞れがある（この邊の營業者は大抵一度や二度は警察の門を潜つてゐるから其恐れが充分ある）それで所謂お茶代なるものは、晝間一時の客の倍位より收入はないと云ふことである。

先づ大路前の如き光景であつて、藝妓も來る、銘酒屋の女も來る、揚弓店、大弓店、碁會所、其外屬籍不明瞭の女も來ると云ふ始末である。公園附近の待合は實に或る專門技手の技術執行所である、黴菌製造所である。その執行所、製造所ある故にお茶挽藝妓も少ないので、殊に銘酒屋碁會所等のます〳〵公園に跋扈する礎因を作るのである。實にこの營業者は神聖なるべく靈場たるべき公園を汚穢たらしめ、魔窟たらしむるの誘導物である、種々の惡魔が僅かに一圓以下の金で（それも自己の懷中を痛めず）魔力を逞ふすることが出來るが爲めに、總ての風紀を壞亂させ、眞面目なものまでを魔風に捲き込みて、奇怪至極の狀を現はさしめて居る。淺草公園の醜體を幇助するは、即ちこの下等待合なるものが七分まで荷つてゐるのである。

待合の外に殆んど待合と同じ所業を爲し居るものがある。それが何であるか、惡魔どもが所謂素人家にて二階の一室を或る銘酒店なり碁會所なりに特約して賃貸するもの。斯かゝる家は多く荒物店を開きゐるとか、洗張御仕立物の看板を出し居るとかして、外面よりは一個の商業者、あるひは職業者である。之れがある場合には待合の害毒を流すよりも、一層甚だしい罪惡を犯すの媒介所ともなつて居るのだ。

此媒介所へ彼等が魔力を揮ふ爲めに、這入る時が如何にも面白い。仕立物の看板掲げる家へ赴く時の擧動は何うである、

『伯母さん、彼れは出來て――アラ、やだ、まだなの。眞個に氣が長いことねえ。』

『何だね、まだ持つて來たばかしぢやないか。――お連さんがあるの。』

『なアにね、此方が何處か仕事をしてくれる人はないかと仰やるもんだから連れて來てあげたのさ。』

『おや、さう、御深切さまにねえ。――あなた何うか斯様汚穢ところで御座いますが、先ア此方へ……
……』と、宿主も調子を合すのだ。

斯くの如き切懸て、女は男を室内へ連れこんで了へば、二階なりまたは奥座敷なりへヅヽト這入りこみ。宿主との話聲などは些ともしない。而して出るときは、男が先きへ出るか、女が先きへ出るかして決して一所に姿を現はさない。此様ところを賃借するには、其方法が二種ある、一は一ヶ月を五圓とか四圓とかで借りる、一は行く毎に一回づゝ支拂をするのだ。宿主なるものは此一回づゝの支拂を受ける方が、收入の多い譯であるが、彼等社會に稱するお茶代なるもの、素人家往きのときは一圓が關の山である。其收入の内で宿主への支拂が一回廿錢より三十錢、殘り八十錢なり七十錢なりが、技術者の收入となる、けれども其技術者が若し雇人であると、抱主と切半或ひは七三などの契約を履行せねばならぬのだ。猶ほ一夜をかゝる家に明すときは、宿主へのお茶代なるものが半圓が普通だと云ふ事である、

　であるから待合と此の類似業者は、黴菌水の貯蔵池で、此池より滲潑と流出する毒の泉が、中流以下の社會に害毒を波及せること、何程なるか知れぬのである。

遊人と公園

近來警察の取締が表だけ嚴重になつたから、十年以前の如く遊人と稱する破落漢の横行は少なくなつたけれども現今でも決して跡を斷た譯でない、警察官と遊人との間に如何なる干係があるやら知らぬが、破落漢の藝妓屋または銘酒店等の惡錢を摑む家へ強請に這入る位は、時に引つ捕へて拘引もする、拘留の刑にも處する、破落漢の稍や貫目を持つ彼の遊人と稱し横柄な顏して、ヤレ五區は誰れの繩張内だの、六區は某の繩張内だのと威張り散らし、賭博と花會類似の所業を日課として居るもの等には、警察の威嚴が更に行はれて居ない。彼等を戒飭すべき人その人が、彼等の驥尾に從ふて、彼等の收得する處の惡錢の分配に預つて居るなどの怪しからぬ事實さへあつた。今は其樣ことも無いか知れぬが、徒手坐食する遊人等が、昔日よりも

寧ろ立派に、安穏に生活する點より推究しても、此間に一流も二流も暗潮の横たわつて居ることが知れる。

彼等も亦公園のバチルスであるけれど、一般社會へ向つて流す害毒は、黴菌製造技手及び製造所ほど甚だしいものはない。寧ろ遊人なるものゝ名が堅氣な商人などには、鯱に怖しいものゝ如く聞え、『淺草も好いが破落漢に恐れる』と躊躇するものもあるので、彼の技手の毒爪に觸れざるに至る幸福もある由に聞く。併し不思議な奉加帳や手拭の押賣は、未だ中々斷絶しない、或者より聞きしに公園六區の銘酒店は約百二十戸あつて、それより毎月遊人が捲きあげる金て、少なくも三十人以上の大の男が酒食もする、着物も着て往くのである。一寸一例を擧げても斯くの如くであるから、仔細に調査を遂げたらば、驚くものが多くあらう。

遊人または破落漢などの。金の成木として金庫と稱し居る營業者は、料理店、飲食店、藝妓屋、銘酒屋、碁會所、揚弓店、劇場茶屋、諸興行物の木戸口等である。彼等は賭博に負けて仕方か無くなると、順禮でも遣つて來やうと云つて出懸る、順禮とは所謂金庫の許へ强請に往くのである、それが大きい奴は大きなところを、小さい奴は小さな處を强請のだ。公園と彼等の關係は、ざつと此様なものである。

露店商と出日

露店商人側には別に記すべきほどの事なく、普通商人であるが公園規則があつて、毎日出店することが出來ない。唯だ其出日なるものを記して置く、出日は大祭日、祝日、日曜日と毎月一日、十五日、十七日、十八日、二十八日である。其外の日にて特に出店を許されてあるは一月が二日三日、十四日十六日。三月が四日、十八日より二十四日迄。四月が八日。七月が九日十日、十三、十四、十六日。八月が廿四日。九月が廿日より廿六日迄。十月が十九日。十一月が酉の日と七日。十二月が年の市と十九日である。

普通の露店商人の如きは、何れの場所も格別の違ひがない。是等は商品を并べて賣るまでゞあつて、其賣品に不正直のものがあるにしても、害毒を流すことの甚だしからぬものだ。殊に魔窟に對する取締の不完全なのに反して、嚴重な取締が勵行されるので、稍や眞面目になつて居る。併し彼の香具師どもも掏兒と共同して人を寄せ、見物の懐中を窺ふなどの事は猶ほ跡を絶たない、が、其様些細の事にまで渡ると、幾干書ても書き盡されぬから省略して置く。

寫眞屋と田舍漢

寫眞屋も此土地のは、兎角が不眞面目なのが多くある。彼の客引を出して田舍漢を引つ張込み、寫り方は何うでも構はぬ一遍の通り客と、總てのことに手を省きて、それは酷い寫眞を撮影してゐる。けれども此の公園の中にては先づ正直に營業をする側に屬し、正業者を以て威張つてゐるが、裏口にまはると藝妓にお世辭を使ひ、また銘酒屋等の女の機嫌をとつて、お客を連れこませる算段を絶えず回らして居るのだ。

銘酒店の女どもに對する擧動は、實に怪しからむもので、假令ば五十錢にて撮影し得らるゝ寫眞を七十五錢とか一圓と言ひ、連込した客より引つたくつて、其の三分の一とか四分の一とかを、連込み來たる女に竊とやる、是れを割戻しと云つて居る。それも客の目に觸るゝ恐れのあるときは、其夜なり翌朝なり乾度割戻し錢を屆けるのである。是等は普通にあることで、ホンの朝飯前の仕事だ。猶内幕に立入ると種々の秘密はあるが、それ等は單に其營業にのみ關することで、敢て公園の寫眞師ばかりが爲しつゝある譯でもないから、これも端折つて置くとしやう。

夜十二時後の公園

この題目の下には愈々魔窟の眞相を顯はすのである、既に以上に於て大魔窟の光景の大概は盡してある。家の中に於ての秘密は合鍵でもしなければ分らない、縱や明らかに知れてゐても餘りに醜の醜なる譯でもあること。家の中のことは戸が建つてゐて見えぬものとして暫く置く。屋外に於ける夜の十二時後の光景を聊か記して見やう。

淺草公園の地坪は、その附屬地までを入れて總坪數が約十萬三千六千坪ある。うち公園内に家屋の建築されてゐるのが、第一區で五十九坪七合五勺。二區で九百六十三坪四合一勺。三區は彼の傳法院の敷地であつて、獨立した寺の圍内に屬するから除く。四區で二百二十八坪〇三勺。五區で六千二百四十八坪八合五勺一才。六區は四號に區劃されてゐて、一號地が二千四百三十八坪九合六勺五才、二號地が千百七坪一合七勺、三號地が二千四百三十二坪二合、四號地が二千二百四十二坪八合三勺六才にて、此の合計八千二百二十一坪一合七勺一才である。第一區より六區(四區は除く)迄の總建坪は一萬五千七百二十一坪二合一勺二才であるのだ。

それに住する戸數は六百五十戸であつて、銘酒店のみ

て百五十戸を占めて居ると云ふが、此の土地の大體で其の半數以上は魔窟、および魔窟によつて利益を得てゐるのであるから、風俗の紊亂して居るは自然の結果と云つて宜からう。

公園に住する六百五十戸の、何れの家にても各々營業がある。營業時間中に雇はれゐるものが、勝手氣儘に外出することは出來ぬ。如何なる營業者でも大抵辨天山に十一時の鐘を撞き出すころは、看板を下して雇人等は後片附にかゝる。（銘酒屋は十二時まで）それが濟むと各々自分の身體になるので、觀音樣へお參詣を名として、彼等雇人どもが三々五々出懸けるは十二時過ぎになる。何程眞面目な稼業をしてゐる商家でも、公園に住ひ魔窟に依つて利益を占めて居る家ならば、男でも女でも雇人がお參詣を許さぬ處はない。さア此のお參詣といふのが甚だ面白からむので、實際觀音樣のお堂で禮拜するものは殆んど稀れだ。彼方の物蔭に黑き人影が二つ、此方の軒下に窃々の私語、此間三十分か一時間の間は、不思議なところより黑き人の影が雜組もあらはれるのだ。それ等の多くは飲食店その他の雇ひ女、または雇ひ男、否らざれば其の者等と親しみのあるもの達である。この以上は說く必要もあるまい、可惜靈場を彼等に蹂躪されてゐたまふ、觀世音に對してもお氣の毒の至りであるから、此處では深く言ふまい。

啻に飲食店等の雇人ばかりでない。魔窟のお茶挽どもがお參詣に假托て客引にも出る。丁度この時分を圖つてまた公園をうろつく野心家もあることゝて、昔時の柳原、またはお廐河岸に髣髴たる趣きがあるのである。けれども晝間の如く敢て雜踏はしない、彼方にこそ〳〵此方にこそ〳〵と往く人影の目に入るまでだ。殊に夏季にかけては一層十二時後の公園の光景は、慘憺たるもので瓦斯燈の光も凄く見えるやうである。

以上の總てを含蓄するの大體は略ぼ盡くした積りである。全國に著明なる觀世音の境内が斯くの如きかと思ふと、誠に心細いやうな氣もする、一切衆生を援ひたまふ御佛の大慈大悲の功力も、勿體ないことながら濁世の波濤を避けかねて、光明を包みたまふのであらうか。呵々。

（完）

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内葉書に限る▲締切は毎月十八日

▲封建時代の巡査　今川橋　外人

或日東京は日拔の通り京橋日本橋から今川橋の方へ差しかゝると、角の交番に大勢の人だかり、と見れば二人の若い巡査が一人の老い窶けた勞働者を蹈んだり蹴たりの酷たらしい有樣、さんざイヂメた揚句の果て交番の便所へ引ずり込んで目茶々々に叉擲つたやうな音がした、如何なる罪人か惡黨か知らぬが、衆人環視の中で東京の眞中で、此有樣は何事ぞ

▲小便無用と小僧入用　紅月子

大學の躰格檢査に近眼の者が十分の八迄あつた、其内の一人銀座の通りを歩きながら向側の店先に小便無用の貼札がしてある、あんな處に小便をする者があらうかと歎くから、僕はあきれて言が云へなかつた、袖を引いて其店先へ連れて行くと先生腹を抱へて逃げ出して横町へ入つて笑ひ轉げて居る、貼札は小僧入用とあつたのである。

▲理論と實際　青山　素月

僕の知人に生理學者がある多年研究して今度新たに新式躰操三十五教練と案出した曰く腹筋の運動曰く頸筋の運動曰く胸筋曰く脊筋中々行きとゞいてゐる然し其學者は兩三年前から肺患に苦んでゐる又僕の學校の躰操の先生は中々嚴重な人だが痩ぎすのヒョロ〳〵だ

▲A十B　神田　一山

俳優と藝者とは昔から分つべからざる關係を有してゐる、近來文士芝居が流來して來たつまり文士が俳優を學ぶやうになつたのだ、又一面には良家の娘たちが藝者然とした姿を好む、つまり娘が藝者を學ぶやうになつたのだ、いまに天下は悉く俳優と藝者との二種類になつて了ふかも知れない、そうなると天下の人類は極めて簡單な式で顯すことが出來る即ちA十B

▲文學と青年　下谷　骨灰生

ニキビ文學式部文學から蕪文學星文學これ等が近來少し下火になつたら哲學じみたものが流行り出した『即ち昔にはぬれ事師であつたのが今度は坐禪的になつたのだ、而かもこれ等を最も好ぶものは青年であるとするとどうしても疊も女房も新らしいのがよいと見える、これを以て青年の思想が高尚になつたなどゝ思ふと大間違だ

▲女子學生の服裝　本郷　宿六

髮は下女風の庇髮に結て、頸には淫賣婦風の長いショール、腰以上は絹、以下は綿布の衣服に、尤も人心を挑發し易い海老茶色の袴、其上衛生上腦へ惡い踵の高い靴を穿いて濟まして歩るいてる人は、之れ、現日本に於て最も文明的の教育を受け他日良妻として將又第二の國民の賢母たるべき女學生諸孃の服裝ださうな

▲宗教の分業　牛込　哲學家

平等普遍、上下階級などの差別は無用。要は只其人々の精神信仰などにのみ依るべき宗教が大體分業的になつてるのが面白い。耶蘇教がハイカラや女學生、神道は頑固老人の尊むところ、佛教は年寄のもので、天

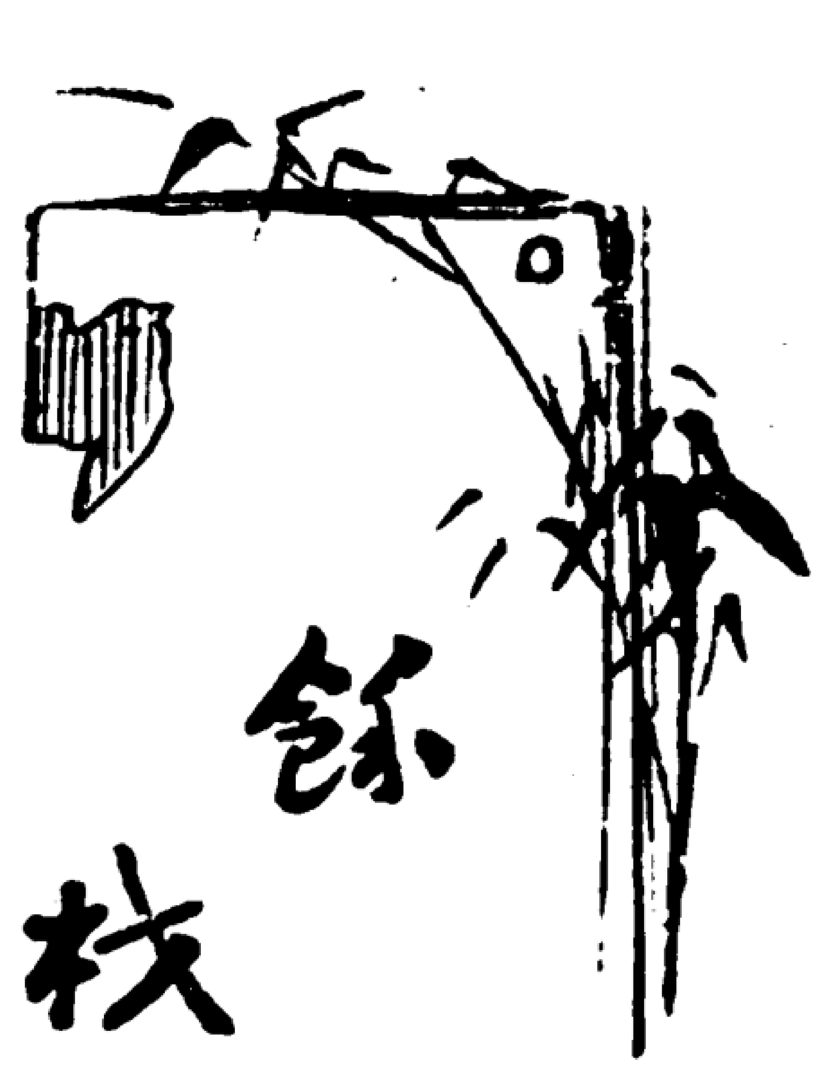
敎が下等無智の社會に行はれてるなどは、蓋し大に分業的だね。

▲等？　荒唐生

此頃世間で等の字が盛んに用ひられて、等でなければ「とう」していけないなど洒落を云ふ限りではないか。先づ早稲田の何町かの中等下宿例の天臨學士譯の「醉人の妻」廣告には高等小說と銘打てある。蠣殼町には、高等淫賣、高等出來合洋服に高等下宿、もう一つお負に高等女學校か？

文士初對面錄（その十四）　天・中天

▲山縣螽湖氏　萬朝報の英文記者として天下に名高い人であるが、風采は甚だ揚らない、この人も背の小作り、どうも小作が流行して、少し氣の利いた人は皆小さい、處で、さういふ天中天も五尺一寸の小男であるから、これを思ふと甚だ心强く覺ゆる譯。それはさて置き、妻君が貴族で自分がなだゝる英文の大家であるにも拘らず、薄氣味の悪い程謙遜て、叮嚀て、氏主幹の『英學生』の校正に秀英舍へ出かけても、給使をつかまへても、へイ〲といふ御挨拶には、最も痛み入るとの話、ぞれだから、其名を知らずに話をすれば、飛んだ失禮も働くといふ、紳士泣かせてある、暫らく氏の家に居た門下生の話に、先生は人には叮嚀にものをいへ、頭を低くうせよ、生意氣な事をいふなと云つて、自分もそれを實行して居るのださうな。僕は既に初對面てはない、去年の夏から月に一度二ヶ月に三度は面會するが、依然としてぞんざいな言葉は用ゐず、いつも初對面的の態度には甚だ珍客困るのてある。



當世詩人　汽車栗毛　茶・人

三　萬歳

待てば甘露の日和あり、たてば芍藥坐れば牡丹、牡丹紫の紋羽二重、下はお召の裾もやう、二枚襲ねてハコセコも、人の目にたつ高島田、歩む姿の白百合の、風にゆらるゝ風情して、來けるは誰ぞたをやめの、年は二八か二九からぬ花は盛りの月の眉、紅を含める唇は桃の蕾か近よれば、息さへ香る心地しつ、雪の肌の白妙は觸れば消えなんばかりなり、二人は一目見るよりも、心も魂もぬけ出てゝ、夢の境を行くがごと、もぬけのからはからくりの、機械人形の如くにて、目ばかりしばしうごかせり、

「來た！

「來た！
「有難い！
「ウフヽヽ有難い！
「いゝな！
「いゝな！
「待つた甲斐がある！
「大にある！
「天は公平だよ
「自然は至妙だよ
「萬歳だ！
「萬歳だ！
「萬歳だね
「萬歳だ
「女神に敬禮を施さう
「同感！

二人は聽て襟かき合せ、あみだ被りの帽とりて、はつとばかりにひれふせば、美人は何と見たりけんあらぬ方をば見やりつゝ、顔うち赤め玉ひけり

四　何者

やゝ暫して一人の男、身は鶯茶の脊廣服、同じ色なる外套に、鼻も高々高帽子、金ぶち眼鏡八字髯、二十八九の好男子、旅行カバンを携へて、悠々とこそ入り來る、美人はちらと見るよりも、顔に紅葉の色添えて、衣裝繕ひ品作り、頭をたれてしとやかに一禮すれば彼の男、一寸ながめたばかりにて、いと大風なそぶりにも、何處かに含む愛敬は、人懐しきばかりなり、美人はやう〳〵顔を上げ、大分お手間がとれました、もう御用事はお濟みかと、問へば濟んだと唯それきり、傍のベンチに腰すえて、まアお掛けなとばかりなり

白堇と光この體見て、小づら憎い野郎の振舞ひ、抑も彼は何者ぞ、抑もあの二人は何者ぞ、兄弟か夫婦か、或は他人か、他人とは受取にくい兄弟らしく、夫婦らしく、兄弟ならばたのもしい、夫婦ならば不埒な奴と心に千々の思ひあれど、顔にも出さでそらとぼけ、あらぬ話をしてゐたり、光は何か思案なし、
「白堇君ちと御意得たい
「何だ
「此處では話が出來ぬ、兎に角表へ行かうと表の方の人なき處
「あの女は君何だらう
「さア何者かね
「何と君は判断した

「僕か……僕の判斷は……令孃！
「夫人ぢやなからうか
「それは未定だ
「今令孃と斷決したぢやないか
「うむ令孃だ、然しあの野郎が？(インタロゲーションマーク)だて
「何んだあの野郎
「どうも兄弟らしいが或は從兄弟かも知れん、
「然し或は夫婦かも知れん、
「夫婦にしちや若過ぎやすまいか
「若過ぎたつて仕方がない
「實に君は冷淡だよ、串戲處ぢやないぢやないか
「だから熱心に研究中だ
「肩上はあつたかあの美人に
「氣がつかなかつた、肩上があれば無論夫婦ぢやないね
「そうだ、待ち玉へ見てくるから
と一目散に走りゆく、聽て歸るを待ちかねて
「どうだ〳〵
「ショールでわからんよ
「ちよショールこそ今は仇なれこれなくばだ
「串戲處の事ぢやない……然し僕は考ひたよ、萬一夫婦であつた處、或は兄弟であつた處……兄弟であることを冀ふけれど……詩にするに多分の差支もあるまい、どちらでもよいとして、同道することにしようよ、
「そうだね、然し君の連中は當然セコンドだせ
「僕等もセコンドに乘るさ
「ナンテ財政がゆるしますか
「計算して見よう、蟇口を出し玉へ、僕も出す。
「よからう、出すとも
二人は懷中さぐりしが、星野光は大聲に
「大變々々
と顏色替へて周章(うろた)ゆる
「どうしたのだ
「大變だ、實に大變だ、僕……僕の蟇口が無いぞ五圓入れてあつたのだ、大變だなア、
「何に？そりや大變だ、よく見玉へ、帶を解いて玉へ
「無いよ、帶を……それいくら振つても無い
「成程無い、然しきたないさるまただ、もう洗濯にやり玉へよ
「大きなお世話だ、そんなのんきな場合ぢやない、すられたのかね、大變な事をしたな、五圓君入れてあつ

たのだ、然しすられる筈はない、來乍ら落したのかしら、さがしに行つてももうあるまいね、
「何が今時分まであるものか、確かに宅を出る時持つて來たか、
「うむ持つて來たつもりだ
「つもりはこまるな、家へ置いて來やせんか、よく考へて見玉へ
「うむ、然うだ、家へ置て來たかも知れんよ朝あんまり急いて、ことによると本箱の上へ置いて來たかも知れんよ
「困るなア、實に輕卒な男だ、止むを得ない、取つてくるより法がない、
「時間があるかしら
「あつても無くても仕方がない、僕はあの美人を見失はんやうに、茲に居るから、大急ぎていつて來給へ、
「君は實に冷酷だね、君一人女神をながめて、居て僕一人勞苦をさせるとはひどいよ、君もいつしよに行き玉へな、
一身から出たさびて止むを得んよ、
彼是爭ふ其內に、發車のしらせの鈴の音、がらん／＼と響きける、
「もうだめだ、汽車が出る、ア、折角の神を又逃かすのだ、
「そう恨むな、これも因緣ごとだ、せめて汽車に乗つて行く後ろ姿でも見よう、
二人はすご／＼來て見れば、若い男の手かばんに、玉のやうなる手を添へて、何やらヒソ／＼樂しげに、打ち語りてはほゝ笑みつ、運歩をはこぶ共さまは、美しくも亦ねたまし、二人はこれを見るよりも、齒がみをなせどせんかたなく、汽車は出て行は煙は殘る、殘る煙が癪のたね、世ははかなしと觀じけん、居場の歩みのすご／＼と今は歌さへ出ればこそ、本郷さして歸りけり、

新刊批評

▲現代名家作文秘訣　成功雜誌社發行

現代廿四名家の作文に關する談話を記したるものなり。論文の作法あり。傳記文の作法あり、小說の作法あり、其他紀行文、漢文、新聞論說の作法等文學の各方面に渉りて材料を蒐集せり、作文の困難は作法の知れざるよりは作法を應用することの難きにあれども、名家の言、時に門外漢の窺ひ能はざる妙策を示すことなきにあらず、これ即ち此書の秘訣と稱する名を附せる所以ならんか。初學者にとつては參考となる節多かるべし。（定價廿五錢）

▲プリューダーク英雄傳 第四卷

森晋太郎譯
偕友館發行

三卷出版の後暫らくにして第卷の發行を見たり、シーミストクリーズとカミラスの比較にして記事例によつて趣味豐かなり、殊に經國美談などにてよく知れ渡りたるシミストクリーズの事蹟なれば吾邦人には面白さ格別なるべし。譯筆亦稍々初めの頃より流暢となれが如きも尙時として直譯調あり、意味不明の箇所あり、原作の名文なる丈け缺點も目に立つを覺ゆ、譯者益々こゝに注意して其槃の中止せらるゝが如きなきとを望む。(定價二十五錢)

▲新題狂歌大全

高橋太華編
内外出版協會發行

文政以前の狂歌二千餘首を集め、之を題によつて別ちたり、時として面白きものなきにあらずと雖も總躰に於て川柳に劣ること爭ふべからざるが如し、例へば暮春の部

暮行くといへばどうやらよけれどもなんにもくれず逃て行く春、
よけいわりと思ひし花も散りはてゝ今は十方に暮の春哉。

など要するに文字の面白味なり、文字の面白味決していやしむべきにあらざるも詩想と相待つにあらざれば文學的價値に於て充分ならざるへし。吾は選者が今少し精選して、數少くとも價値ある狂歌のみを出されし方可なりしならんと思ふ。(定價三十錢)

▲枯草

野口雨情作
知新堂發行

著者も茨城縣の人にして發行も茨城縣なり。新躰詩集發行の氣運につれて出でたるものなり。吾等未だ著者の作に接せざりしもの故に精讀以て其長所を見出さんと勤めたるも不幸にして贊辭を呈すべき價値なきを悲む、其作槪れ數年前の青年雜誌にても出でし樣の者なり、著者濫りに名を賣らんとを求めず、靜かに詩情を涵養せられたし。(定價十六錢)

▲日本美術 第七十五號

日本美術院
編輯部發行

寫眞版の美麗鮮明なること他に比なし、中村不折の佛國の藝術、登張竹風のゲーテの話等面白く、又岡倉覺三氏の近著 "The awakening of Japan" に對する米國の批評を載せたり。(定價貳拾五錢)

▲月刊スケッチ 第壹號

スケッチ會發行

「文人をして繪畫を解せしめ、畫家をして文學を解せしめん」との希望を以て起りたるものなり。畫は三宅克己、岡田三郎助中澤弘光等の筆になり、文は坪内逍遥、薄田泣菫、中村春雨等二十餘家の作を擧げたり何れも短きものなれども短き中に面白きもの少ならず、健全なる發達を望む。(定價二十錢)

▲陽春號

隆文館發行

新聲の臨時增刊なり。知名の文士數十人の作を集めて、虹彩陸離繪畫又美麗にして眞に陽春號の名に背かず春葉の「不平家」外にあつては不平滿々、妻子を罵りて「嗚や子供には愛情より食物の方が入用だ」といへる男が、家に歸りては、から頭があがらず、妻君には怒鳴られ、子供には目がなき樣を寫せり、人心の幾微に觸れたる所ありといふべし、掬汀の旅役者、銀月の越前堀、日南の辭の戯れ等亦見るべし(定價三十錢)

▲獨立評論 第三號

獨立評論社發行

卷頭の三井王國と岩崎王國は二十六頁の長文なり、第一號に出でたる東京市政論の如き筆力と精彩なしと雖も亦愛山獨得の觀察を見るべし。兎に角愛山の獨力を以て獨立の評論をなす今の世の珍とするに足る。(定價八錢)

▲天鼓 第三號

北上屋書店發行

嶺雲の霹靂鞭筆力遒勁、新聞の頽落、博士の價値等を論ずる所究として青年文時代の意氣を見るべし。文士の評列、文壇の消息等又雜誌として面白し。(定價十五錢)

五月五日發行
戰捷紀念號

卯杖

第參卷第五號
定價金貳拾六錢

文學、美術、俳諧諸方面の明星!!!!!!!

今號は特に紙數を增加し其目次は

俳文柏餅の賛(巖谷小波)暮の春(柳川春葉)に此二氏を措いて俳文家あるなし 俳諧五人男(活東)八文字屋張にしてしかもハイカラーを忘れず事に寄せて世を罵倒せるもの 脚本俳諧勸進帳(樂齋)俳諧始て以來未だ脚本あるなし是を以て嚆矢とす ●以上●何れも長編●其●他 堀田沙羅(柴舟)△■○(秋聲)僕を吊するの記(苔花)芭蕉管見(西男)天明の柳樽(四丁)芭蕉門諸生全傳(同人)七部集管見(春蘿)春雨行(空々)甲斐方言俳諧(無黄)端午百談(菱花)五月鯉(雨六)白人會紀行(參人)寶くらべ(南岳)廻文の俳諧(黄雨)煎燈譚(吟葉)雜言二則(霞峰)●附錄 俳諧人名辭書(牧野望東)

挿畫

川村雨谷　齋藤松洲　久保田米齋
小峰大羽　大田南岳　其他

附錄

戰捷紀念繪葉書　筆者　巖谷小波
　　　　　　　　筆者　窪田空々

繪を賣らざる人の書自ら雅趣あり神韻あり(石版彩色數度刷)

附錄

海戰參加談　窪田空々
戰況視察談　板倉醉月　仝　角田竹冷

◎注意懸賞繪葉書の圖按募集あり

發行所 東京神田區仲猿樂町一番地 **秋聲會出版部**

第五號五月五日發行

誌友募集

白虹

投稿歡迎

月刊文學雜誌

■『白虹』には前田林外、江見水蔭、田岡嶺雲、花房抑外、河井醉茗、岩野泡鳴、秋元蘆風等の諸先輩の應援せらるゝあり。

■『白虹』は地方文壇の巨擘として文壇の革命兒として立てる唯一の文學雜誌新進作家の玉稿をもれなく網羅す、殊に文庫、白百合の半面を知らんこと欲せば白虹に來れ。

■『白虹』は四六二倍四十餘頁の雜誌敢て呼號するを要せず、吾徒は奮闘を强行する氣銳の勇士如何に武者振せるかを見よ。

■『白虹』には相馬御風、片上天絃、野村葦雨、大石霧山、登坂北嶺、人見東村　齋藤紫軒、安倍村羊、內海信之、田中紫江、石井楚江等の新進作家の應援せらるゝあり。

發行所 岡山市花畑町三十番地 **血汐會**

投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること
▲締切は毎月十八日最終便まで
▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論　定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論　廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱　神田千代田町　博報堂

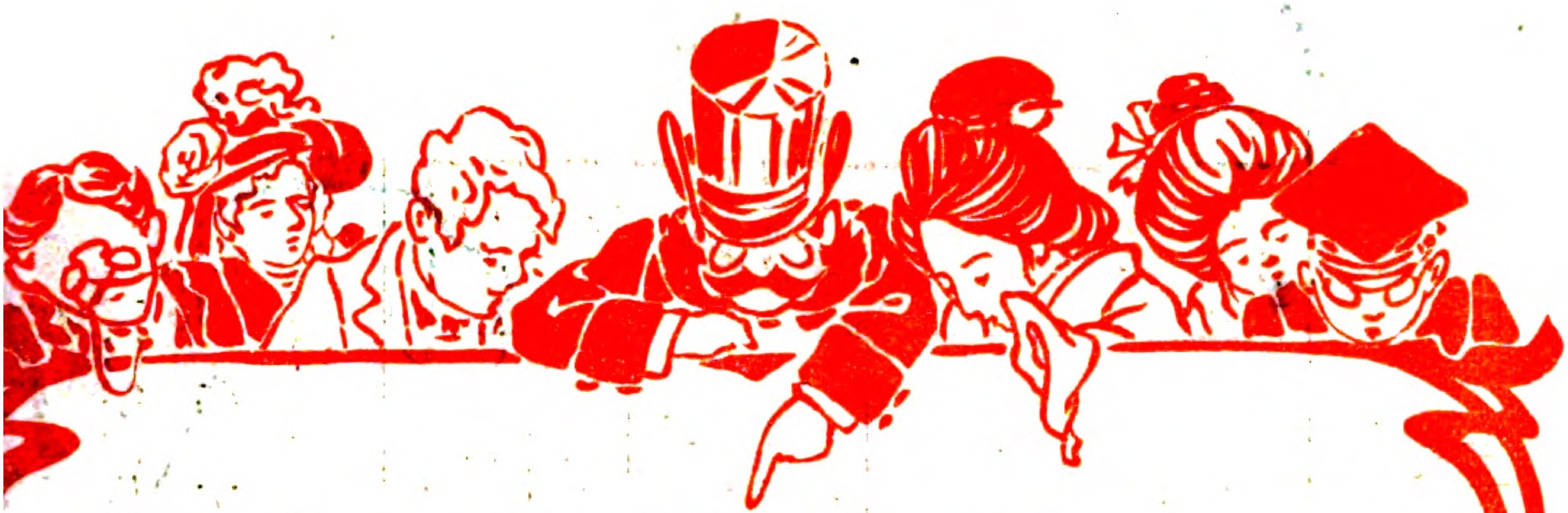
送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盗取せらるゝ憂なし
一郵券代用の場合は必す壹割增のこと
一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす
一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし
一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし
　一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割
　一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所
神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四　東海堂
本郷四丁目　文明堂

明治三十八年四月卅日印刷
明治三十八年五月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門
發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九一九）反省社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場



中央公論

No. 194

明治十九年創刊

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
明治三十八年五月一日發行（每月一回）

東京本郷區駒込西片町十番地
發行所　反省社
（電話下谷九一九）

東京牛込區加賀町一丁目
印刷所秀英舍第一工場

大賣捌所
神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四丁目　東海堂
本鄕四丁目　文明堂

（定價一部金十二錢）

前號概目